
愛に帰す

風

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛に帰す

【Nコード】

N9745L

【作者名】

凧

【あらすじ】

強大な軍事力と政治力を持つ列国最強の国ロゼ。王は23歳という若さながらも賢帝と崇められていた。王妃サラは辛い現実に苛まれていた。結婚して3年。王は一度もサラを抱くことはおろか、優しい愛の言葉すら掛けてくれたことはなかった。後宮の他の姫は抱くの。他国の姫の後宮入りをきっかけに、辛く悲しい結婚生活に終止符を打とうと王に乞うが…（本編完結済み・番外編展開中）

01：偽りの王妃

「まったく嫌になっちゃう！」

苛立った声に私の足は反射的に止まった。
よく知った声だったから、という理由もある。

「声が大きいわよ、サリー。聞こえたらどうするの？」

「聞こえたって構いやしないわよ。どうせあの女には何の権限も無いんだから。“名ばかりの王妃様”には」

「じゃああの噂は本当だってこと？」

「本当よ！フィオナはいいわよね。私も移動申請してみようかしら。
“新しい王妃様”へ！」

重厚なドア一枚隔てた向こう側の笑い声とは裏腹に、私は足元から冷えていく感覚がした。

手の中の小さなカフス。

サリーが落としたものだと思い付き、跡を追ったのがいけなかったのか。

普通の良家の姫のように、黙ってベルをならせばよかったのか。
後悔するには全てが遅すぎた。

足音を立てないように、静かにその場を後にする。
扉の向こうではまさか私がこうして聞いていたなんて思ってもいな

いだろう。

「まあ、王妃様。そんなところで何をなさっているんですか？」

「ええ…ちよつと気分が悪いから寢室に戻るわね。誰も入ってこないようにしてくれる？」

「それは構いませんが…お医者様をお呼びいたしましょうか？」

「結構よ。少し寝てれば大丈夫だと思うから」

曖昧な笑みだけを残して、私は寢室で一人泣くしかない。
涙が枯れるまで泣いたら、また私は偽りの王妃に戻る。
そうしてここ3年、やってきた。今日もそうすればいい。

“名ばかりの王妃”

そんな風に自分が呼ばれている事に気付いたのはいつからだろう。
最初は傷ついたりもしてみたけれど、今となってはそうすることに
も疲れていた。

何せ、否定する要素がまるでない。

私が真に王妃だったことなど一度もないのだ。

列国最強と謳われる国の王妃になって3年。

他国の美姫との縁談を断って、年若く優秀な王が選んだのは私だった。

実家は零落寸前の子爵家。婚約者にさえも見放された私が王妃になるなんて夢にも思わなかった。

それまで王家主催の舞踏会で2、3度、しかも遠目でしか陛下を拝見したことはなかったし。

誰もかれもが首を傾げたこの縁談。

それでも賢帝と名高い陛下と、私の結婚は民に祝福された。まるでお伽噺のようだと持て囃されながら。

だけど現実には童話のように甘くはなかった。

この3年。私が陛下に頂いたものと言えば、実家への莫大な資金援助と美しいドレスや宝石の数々。

お陰で子爵家は持ち直し、家を継いだ長兄は滞りなく領地を守っている。

陛下との縁談がなかったら私は年老いた伯爵の許へ嫁ぐ話さえあったのだから。

それについては陛下に幾ら感謝してもしきれない。

月が変わることに贈られる最高級のドレスや宝石を見て、皆は口を揃えて言うだろう。

「王妃様はお幸せですね」と。

けれど皆は知らないから。陛下が私を愛していないことを。

結婚して3年もすれば大抵の夫婦には子供が出来るだろう。

ましてや王族ともなれば、子供は重宝される存在。

私に妊娠の兆候が出たことなどない。

理由は簡単だ。陛下と私はまだ一度も交わったことがないのだ。

初夜は陛下がご自分の手に切り傷を作り、流れた血をベッドに落としただけ。

まだ15だった私は性に疎く、それが夫婦の交わりなんだと勝手に納得していた。

流石に3年経った今は分かる。

陛下は私と交わるのも厭うくらい私を嫌っていらっしやるのだ。

どこの国にも大抵後宮というものがある。

王の血をなるべく増やす為に。

この国も例に漏れず、陛下がまだ殿下だった頃から有力貴族の娘が

3人後宮に入っている。

どの姫も私なんか比べ物にならないくらい素晴らしい家柄と容姿を持った方ばかりだ。

幼い頃から王妃になるべく教養を積まれてきた彼女たちにとって、私が王妃になったことはひどく自尊心を傷つけられたに違いない。事あるごとに向けられる冷たい視線と、心ない言葉。

何より傷ついたのが陛下が彼女たちを抱いているという事実だ。

私と形だけのベッドを共にするのは精々月に1度か2度。それもお互い背中を向けて眠りに付く。

それ以外は陛下は自室で休まれるか、後宮のどなたかの部屋で一夜を過ごす。

それでも3年、なんとか堪えてきた。

私を妻に迎えたのはあまりの不遇さに同情したからなのかもしれない。

けれど偽りでもよかった。

私にとって王妃という立場よりも、オスヴァルト・アレキサンダー・ロゼの妻であることが何よりの幸せだ。

民のことを想い、強くあり続けようとする彼を私は心から愛している。

例え永久に愛されることがなくても、せめて邪魔にならないような王妃でいようと決めている。

だけど…私の役目もそろそろ終わるのかもしれない。

隣国の王女様が後宮入りするのだ。

そして私を排し、彼女を王妃にするという噂が実しやかに流れている。

“新しい王妃様”、とまだ顔も見たことのない王女を一部の侍女たちはそのと呼ぶ。

噂によれば、絶世の美女でありながらお心も優しくいらっしゃるそう。

侍女たちだって私のような平民出の王妃よりも、高貴な血筋をお持ちの王女に敬意を払って当然だ。

いつかはこんな日が来るんじゃないかと覚悟していた。

その時はなんの未練も残さず王宮を去り、どこか片田舎でひっそりと暮らそうと思っていたのに。

決意は涙となり、枕を濡らす。

思っていたよりも現実には辛く悲しかった。

王妃でなくなったら、私が陛下の傍にいる理由なんて皆無だ。

陛下。私のただ一人の愛する方。

貴方の幸せに、私は必要ない。

輝かしい未来に私はいてはいけない。

だから。最後の我が儘をお許しください。

02：深紅の宴

その日は城全体が浮足立っていた。

無理もない。夕方には隣国から王女が到着し、今夜は宴が開かれるのだから。

私は王妃として、その方を迎えなくてはいけない。

笑顔の仮面をつけて、最大限の威厳を持たなくては。

子爵家にいた時から私の世話をしてくれている侍女のエレナは、早朝から私を磨くことに余念がなかった。

櫛で何度も少し癖のある髪を梳かれ、肌に良いとされる香油を塗られ、夜会の為のドレス選びにも時間をかけていた。

まるで子供の頃遊んだ人形のようにだと心の中で笑う。

エレナだけはずっとそのままだ。

子供の頃からの付き合い合いということもあり、相変わらず私のことを

「サラ様」と呼び、言葉にも遠慮がない。

けれどそれが逆に心地よく、安心すら覚えていた。

「サラ様。今夜は特別念入りに準備いたしましたよね！王から先日新しいドレスを頂いたばかりですから」

「どんなに着飾っても顔は変わらないわ」

「またそんなことを仰って！少しは自信というものがないんですか？サラ様は充分お綺麗ですわ。なんて言っただって王妃様なんですから」

王妃。

その地位はやがて私のものではなくなる。
ただのサラに戻り、今まで以上に価値がなくなってしまっただろう。

「ねえ、エレナ」

「はい？」

「もし…私が王妃でなくなっても、あなたはそのままいてくれる？」

「え？」

「…ごめんなさい。なんでもないの」

その時私は今と同じように笑えるのだろうか。
エレナもこうして、笑ってくれるのだろうか。
思うだけで心に影が落ちる。

エレナのことを誰よりも信頼している筈なのに、「もしも」を考えずにはいられないなんて。

「今夜はクラウド様もいらっしゃるそうですね」

「お兄様が？」

「ええ。貴族は殆ど招かれているみたいですよ。クラウド様にお会いするのはいつぶりになるでしょうか」

「1年…と、少しかしら。会ったと言っても言葉は交わしていないけれど」

父に似て優しくったクラウドお兄様。

次兄と歳の離れた私をとて大切にしてくれた。

陛下の許へ輿入れが決まった時も、「それでお前は幸せなのか」と

何度も聞いてくれた。

懐かしい思い出。裕福ではなかったけれど温かい家庭だった。今は立派に領地を治めていると、近衛兵となった次兄がエレナを通して教えてくれたっけ。

夜、時間を頂けたら兄と話がしたいと思った。

悲しいけれど今の私に一人で暮らしていけるような生活力はない。兄ならきっと城を去った後、暫く人並みに暮らしていける場所をどこか紹介してくれるだろう。

「陛下に、兄と2人で話が出来ないか聞いてみるわ」

「そうですね。久しぶりに兄妹の団欒もいいかもしれません。アルフレド様はお呼びしなくてよろしいんですか？」

「今回はクラウスお兄様とお話したいわ」

「まあ。アルフレド様がお聞きになったら悲しみますわ」

そうね、とエレナと顔を合わせて笑う。

アル兄様はクラウスお兄様よりも気性が激しい。

だから近衛兵としてやっていけるのかもしれないけれど。

だけど今回のことでアル兄様の立場をあまり悪くはしたくない。

なるべく穏便に、かつ冷静に話を進めていくのにはクラウスお兄様が一番なのだ。

勿論、時期を見てアル兄様にも話そうと思っている。

「出来ましたわ。王妃様」

エレナに促されて大きな鏡の前に立つ。

毎日この場所に立っているけれど、流石に今日の自分には目を見張った。

美しい宝石と煌びやかなドレスに包まれたのは、18歳のちっぽけな女なのに。

この国では珍しくも無い栗色の髪の上に輝くティアラが、重すぎるほどにその存在を示していた。

初めてこれを頭に乗せた時のことは、緊張の所為でよく覚えていない。

鏡の中のサラが、悲しそうに微笑む。

あと何回、こうしていられるか分からないけれど。

少なくとも今夜いっぱいには王妃なんだと実感した。

陽が沈む少し前に、王女が到着したと連絡が入った。

あと1時間程で歓迎の宴が始まる。

広間には陛下と並んで入らなくてはいけない為、こうして早めに支度を済ませた。

短いノックの後に、この国の宰相のヴィンセント・モリスが恭しくお辞儀をし入ってきた。

「王妃様。王は執務が押しておりまして、今少し時間がかかるそうです。ごさいます」

「そう...」

宰相の言葉に、少しだけ胸に暗い翳が落ちたけれど勤めて冷静に返した。

広間に入る少しの間が、陛下といられる貴重な時間だった。中に入ってしまったら陛下の傍には入れ替わり立ち替わり重鎮たちが列を作るだろう。

ましてや今日の主役はあくまで王女様だ。

私の一存で陛下を引き留めておくことは出来ない。

「代わりにはなれませんが、階下まで私がお供いたしますがよろしいですか？」

「ええ。ありがとう、モリス」

まだ年若い宰相のモリスは、陛下が即位すると同時に宰相になった。実家は名門の侯爵家でありながら次男として育てられた彼は、朗らかで人がいいと評判だ。

しかし決断力があり、他の大臣なら躊躇うであろう改革も積極的に行ってきたと聞いている。

陛下もとても信頼を置いていて、外交など国を左右するような重要事項は先ずモリスに相談しているそうだ。

私も何度も話す機会があったけれど、彼の知識と話の豊富さに毎回驚いている。

きつと今日も階下に着くまで、彼の持っている話を面白おかしく聞かせてくれるのだろう。

そう思うと、心が晴れた。

もう一度身支度を確認し、ドアのところで待つモリスの腕を取る。

「緊張されていますか？」

「どうしてそう思うの？」

「いつもより笑顔が少ないですから」

「そうね、少し緊張しているわ。しなかったことなんてないもの」

「それでは力不足かと存じますが、最近耳にした間抜けな話で王妃様を笑わせて差し上げましょう」

「ええ。お願い」

モリスの話はとても面白かった。

あまりに面白くて笑い声が隠せず、前を歩いていた女官長に眉を顰められた程。

階下までの道のりは決して短くはないのに、私にはあっという間に感じてしまった。

「着いてしまいましたね。私の役目はここまです。王妃様、広間でまた」

「ありがとう。余計な仕事を増やしてしまったわね」

「いえ、お陰で退屈な準備を他の者に任せることができました。感謝いたします」

「まあ」

腕が私の手から離れていく瞬間、彼は酷く真剣な眼差しでこう言った。

「王妃様、どうか今回のことでお心を痛めませんよう。王が愛しておられるのは貴女お一人です」

今回のこととは、きっと王女の後宮入りのことだろう。

モリスは私に嘘を吐いたことはない。

けれどそれは、真実を知らないから。

違うとも言えず、私はただ曖昧な返事しか出来なかった。

やがてモリスと入れ替わりに階段を下りてくる人が見えた。

沢山の近衛兵に守られながらも、圧倒的なオーラは隠せない。

この国で最も高貴な人。

「すまぬ。遅れた」

「いえ、お気になさらないください。お仕事お疲れ様でございました」

「ああ」

たったこれだけの会話でも、私は心が震えることを止められなかった。

久しぶりに拝見したその姿は、覚えているよりもずっと素敵で頼もしかった。

シルバーブロンドの髪は照明に照らされてキラキラと輝き、見る人全てを魅了する。

軍事力で列国最強を誇るこの国の王もまた、一武人で。

繊細な中にも荒々しく、確固たる存在感を周りに植え付ける。

「サラ、手を」

「ええ。陛下」

広間はすでに贅の限りを尽くしたもので溢れていた。
その中でも隣国の特産品の、珍しい宝石が七色の光を放ちながら人々の称賛を集めていた。

陛下と肩を並べ、玉座に座る。

大勢の人々の視線が宝石から私たちに移る。

やがて上品な音楽が会場を包み、別の扉が開かれた。

玉座へ続く赤い絨毯を一步一步進む女性に、誰もが言葉を失う。
一瞬、辺りが水を打ったように静かになった。

静寂をもろともせず、堂々と歩む様はまさに王族だった。
艶のある深紅の髪が、腰の辺りまで真っ直ぐ伸びている。

やがて玉座の手前の階段まで辿りついたその人は、優雅に腰を折り、挨拶をした。

「カメリア国第一王女、スカーレットにございます」

「そんな硬くならなくてもいい。幼い頃は共に遊んだ仲だろう」

「まあ、覚えていてくださっただんですか？時々思い出しますのよ。」

陛下が前国王の寝台にこっそり蛙を忍ばせていた時のことを」

「…頼むから忘れてくれ」

王女様と陛下の親しそうな会話に、広間に集まった貴族も笑った。
私は陛下の幼い時の話を聞いたことがなかったので、スカーレット様に少なからず嫉妬を覚える。

嫌だ。こんな風に思ってしまう自分が。

どうして余裕を持って、彼女を迎えてあげることが出来ないのだろう。

「王妃様、お初にお目に掛かります。これからどうぞよろしく願
いいたしますわ」

「ええ。スカーレット様。こちらこそよろしく願います」

宴は始まる。

偽りの国王夫妻と深紅の美姫を迎えて。

03：朧月

宴は時間を追うごとに華やかさを増していた。

その間にも陛下と私の下へは入れ代わり立ち代わり貴族が現れ、王女の美しさを褒めた。

王室を始め、力のある貴族は妾を持つことが当たり前。

それを認め、妾にも優しくするのが正妻の在るべき姿とされている。だからスカーレット様を褒める言葉が溢れていても、私は黙って微笑まなくてはいけない。

どんなに心が悲鳴を上げても、大声で泣くことは叶わないのだ。

「お綺麗ね、スカーレット姫は」

「本当に。この国には珍しい深紅の御髪が宝石のようだわ」

「それに比べて王妃様の凡庸なこと」

「まあ、聞こえますわよ」

さして遠くない場所にいた貴族の姫の言葉は、針のように鋭く私の胸を刺していく。

取り柄のない王妃は、美しい姫の姿に霞んで見える。そう、言いたいのだろう。

スカーレット様の周りは、まるで太陽が落ちてきたかのように明るかった。

あの陛下との気軽なやり取りで、国中の貴族の心を掴んだのだ。嫌な顔一つせず、笑顔で会話を進めていく彼女はやはり素晴らしい

女性なのだろう。

何より陛下と並んでも全く見劣りしない華やかさ、一国の王女としての気品。

私がついていないものを、彼女は持っている。

嫉妬というよりは諦めに近かった。

この3年、陛下に相応しい妻になろうと頑張ってきたことが無駄だとは思わない。

けれどどんなに努力を積んでも生まれだけは変えられないのが事実なのだ。

少しでも頭を切り替えようと、テラスの方に足が向かった。

「王妃様、どちらへ」

「モリス…驚いたわ。ちょっと夜風に当たろうと思って」

「一人になるのは危険でございます。誰か呼んで参りますので」

「いいえ！誰かの手を煩わせるのは嫌なの。テラスに出るのは諦めるわ」

「王妃様…貴女はもう少し我が儘になるべきです。聞き分けが良すぎるのも問題ですよ」

「いいの。これが私なんですもの」

そうなのだ。

どんなに願ったところで私は私。

臆病で弱虫で、実はとんでもなく意地っ張りなサラなのだ。

自分を嫌うことなんて誰に出来るというのだろう。

せめて自我だけはしっかり持っていないと、足元から崩れてしまい

そうだ。

一際美しい笑い声が広間に響く。

どうやら臣下の一人が冗談を言ったらしく、スカーレット姫は楽しそうに笑っていた。

陛下は少し離れた場所で重鎮と何か話していたが、その笑い声に釣られ頬を緩めた。

スカーレット様…本当に貴女は素敵の方。

私の前で陛下があのように笑ったことなど一度もないのに。

貴女の明るい声は、陛下のお心でさえも掴むのね。

きつと貴女なら…素晴らしい王妃様になれる。

「スカーレット姫は大人気ですね」

「ええ、本当に。あの方なら立派な王妃になれますわ」

「王妃様！一体何を…！」

厳しく咎められたけど、それが私の本心だった。

この国が、何より陛下が幸せである為に私は最善を尽くそう。

例えばそれが身を引き裂く程辛いことでも。

「モリス、伝言を頼めるかしら」

「え、ええ。なんなりと」

「今夜、兄のクラウス・ハークネス子爵と話がしたいの。陛下に許可を頂けるか聞いて下さる？」

「畏まりました。ハークネス殿には」

「兄には私の侍女から伝言が行っているわ」

私はもう一度会場に視線を向けた。

華やかで美しい世界。

魔法は、間もなく溶ける。

「私は部屋に戻ります。モリス、頼みました」

「王妃様…貴女は何も分かっていない」

「真実は常に目の前にあるものよ。私はきちんとそれを見たの」

「しかしっ…！」

「モリス」

「申し訳ございません」と頭を下げたモリスは、そのまま陛下の下へ向かった。

近くにいた侍女を呼ぶと彼女はすぐに2人の兵士を連れてきた。
囲まれるようにして部屋へと歩みを進める。

回廊を通り抜ける夜の風が、頬に当たって気持ちがいい。

熱気に包まれていた広間にいた所為で、体は火照っているようだ。

満月の淡い光に照らされた廊下は幻想的な美しさを醸し出していた。
昔読んだ童話の挿絵に似ている。

ただ空想の世界に憧れていたあの頃は、王子様と結婚する王女様になりたいたづなっていたつね。

「ありがとう。悪いけれど席を外して頂戴」

侍女達が部屋から出て行くのを見送ってから、窓の傍まで近づく。ここから見える景色はなんて美しいのだろうと、王妃になって初めての日に思った。

陛下が治める愛すべき景色。

美しいからこそ、私には重過ぎた。

やがて控えめなノックが聞こえ、私は知らず知らずのうちに流れていた涙を拭った。

そこには一年ぶりにみる兄の姿。

私と同じ髪の色、同じ鼻の形、見知った笑顔。

泣きそうになるのを必死で堪え、子供の頃のように抱き着いた。

「久しぶりクラウドスお兄様」

「ああ。会えて嬉しいよ。もっとよく顔を見せて」

胸に埋めていた顔を上げると、途端にお兄様の顔が綻ぶ。

「綺麗になったね、サラ」

「お兄様は少しお年を召されたみたいね」

「ははっ…当たり前だけどそこは格好良くなったと言って欲しかった」

たな」

からかうように片目を瞑って見せたお兄様は、私に促されて椅子に座った。

侍女に用意してもらったティーポットからお茶を注ぐ。

アル兄様と違ってクラウスお兄様は甘党だから、砂糖は2杯と少し。微妙な匙加減はお前にしか出来ないと笑った。

「そっついえばアルは来ないのか？」

「ええ。今日はお兄様に大事な話があつて」

「大事な話？まさか子供ができたとか？」

「うっん…違うの」

「何だろう。まさか私の結婚相手を紹介する訳じゃないよね？まったく最近親戚が五月蠅くて仕方ないんだ」

「私、ここを出ようと思うの」

楽しいことを想像していた兄に告げるのは心苦しかった。

きつとこんなことを告げられるなんて思ってもいなかったんだろう。案の定、兄の喉を潤す筈だったティーカップは不自然な位置で止まっている。

もう一度、と兄の瞳が言う。

「王妃を辞めようと思うの」

ガシャン、と派手な音を立ててカップが床の上に落ちた。
バラバラになった欠片は四方へ飛び散る。

お茶を少し被った筈なのに、そのことに気付かないようで、兄はただ呆然と私を見ていた。

「なん、だつて？」

「驚かせてしまつてごめんなさい」

「どうして…またそんな。陛下に何かされたのか？」

「…いいえ。何も」

そう、何もされてはいない。

始まりすらなかった夫婦生活に終わりもない。

私は用意された舞台から離れて行くだけ。

ただ、それだけのことなのに。

どうして…どうしてこんなに涙が出るのだろう。

「サラ…お前は幸せじゃなかったのか」

「いいえ、お兄様。幸せでしたわこの3年間」

「しかし」

「私よりも王妃に相應しい方にその役目を譲るだけ」

「…スカーレット王女か」

低く呟くようにそう言ったお兄様は、私の肩を優しく抱き寄せた。
幼かった頃、怖い夢を見る度にそうしてもらった。

その頃の記憶と安心感で胸が一杯になり、泣くことを止められなかった。

「分かった。お前が王妃を辞めた時には必ず力になる」

「我が儘でごめんなさい」

「何を言ってる。元は俺の責任だ。ちゃんとお前の幸せを考えてやれなかった」

許してくれた嬉しさと罪悪感が入り混じって言葉にならなかった。そんな私の背中をお兄様の手が何度も往復する。

「陛下にはもう話してあるのか？」

「明日、話そうと思ってます」

「そうか」

王妃が退冠するのは決して簡単なことではない。様々な手続きと退冠式への準備、私付きだった侍女の次の就職口などやることは沢山ある。

それに元王妃の肩書きは生きている限り纏わり付くだろう。

好奇の目や中傷にも耐えなくてはいけなく、今よりずっと辛い生活を強いられる。

何より陛下に面倒を掛けてしまうことが申し訳なかった。

けれどもこうするしかなかった。

辛い現実から逃れたいのかもしれない。

モリスが言っていたよりずっと私は我が儘なのだ。

明日私はこのきらびやかな世界に、愛する人に別れを告げる。
3年間の思い出を置き去りにして。

04：氷の契約（前書き）

作中にはR15の表現、残酷な描写があります。
少々狂気を孕んだ内容になっておりますので、苦手な方はご注意ください。

04：氷の契約

大きく息を吐く。

小刻みに震える指先をなんとかしようと努力したけれど、あまり効果はなかった。

窓の外は私の心の中を示すように、どんよりと重たい雲が空を覆っていた。

昨日あんなに綺麗な満月だったのに、夜半のうちに曇ったのだろう。

話しがあると陛下に手紙を書いたのは今朝のことだ。

すぐに女官長が持つてきた返事は是。

直ぐには無理だけれど、昼食の後時間を取ろうと書いてあった。

始めは心臓を落ち着ける時間が出来たと安堵していたが、それは間違っていたらしい。

長針が短針を追いかける毎に私の心臓は壊れそうな程に鳴っている。喉の奥が渴き、何度お茶を飲んでも落ち着かなかった。

思えば陛下と2人きりで話すなんてことは今までなかった。

侍女や兵士の姿があったし、陛下とは公の場で会うのが常だったから。

今回は話の内容が内容だけに、人払いをしてもらうことになる。

そうした時、私はきちんと話が出るのだろうか。

弱気になりそうな自分を叱咤し、深く息を吐いた。

もう決めたこと。後戻りはできない。

「陛下がお着きになりました」

ドアの外にいた侍女がそう告げると、心臓の音も頂点に達した。窓の外に向けていた視線をドアに移す。

両隣にいた侍従の者に席を外すよう指示し、陛下はそのまま私の所まで足を進めた。

先日のような華美ではないけれど、王に相応しい服装。

左側の腰には愛用している剣が敵を威嚇するように備わっている。

「お忙しい所お呼び立てして申し訳ありません」

「構わない。話があると聞いたが？」

遂に。遂にこの時がやってきた。

一瞬でも気を抜けば崩れてしまいそうな足元に、必死で力を込める。

指先の震えは未だ治らなかった。

しつとりと手の平に汗が滲む。

まるで判決を受ける囚人の気分だと自分自身に苦笑いした。

陛下の蒼い瞳はしっかりと私を見据えていた。初めてお会いした時、深い海のようなと思った。

何度この目に見つめられたいと願っただろう。

その瞳に、私だけを映して欲しいと。

「お願いがございます。陛下」

「お前が何か望むとは珍しいな。言ってみろ」

「私を…城から出して下さい」

ぴくり、と陛下の柳眉が上がる。

「なんだと？」

底冷えするような声に戦慄が走った。

国が安定するまで戦場で第一線を戦ってこられた陛下は、他国に名の知れた軍人でもある。

剣の腕もさることながら、その冷然とした瞳に震え上がった敵も多
いと聞く。

戦場に赴いたことのない人々は噂だと思っているようだが、真実だ
ったのだ。

海の底を思い出させる目には青々とした冷たい炎が宿っていた。

ひゅう、と無理に飲み込んだ空気が喉の奥で音を立てる。

「わ、私は3年、王妃として城にりましたが、ただの一度も本当
の意味で私が王妃だったことなどございません」

陛下は何も言わず、仮面のように無表情で私を見下ろしていた。

舌が纏れて上手く言葉が紡げなかった。

けれど、何としても伝えなければという一心で先を続ける。
きつと陛下なら慈悲を下さる。敗国にそうしてきたように。

「幸いお世継ぎはございません。それを理由に離縁しても皆は納得して下さるでしょう」

「……………」

「スカーレット姫こそ真の王妃様に相応しい方。どうか私の最初で最後の…つきやあ！」

今まで微動だにしなかった陛下は突然、私の顔を上げさせた。

骨が砕けてしまうのではと思うほど強く掴まれた顎は、鈍く痛みを放っている。

恐る恐る陛下を見ると、冷気を纏っていた瞳には今やはつきりと怒気を帯びていた。

陛下を怒らせてしまったことが、深く心を傷つける。

今まで贅沢な暮らしをしておいて、陛下のご尽力で実家まで立て直して頂いて、なんて我が儘なんだろう。

けれどこれ以上自分の存在意義すら分からぬまま過ごすことは出来なかった。

蔑まれる王妃などこの国の為にもよくないだろう。

「陛、下」

「お前は…それほどまでに私の妻でいるのが嫌か」

「え？」

陛下が呟いた言葉はあまりに小さく、私には聞こえなかった。顎にかけられていた手が離れ、不安定な熱が痛みを残す。

「ならぬ」

吐き捨てられるような言葉を理解するのに時間がかかった。
慌てて紡いだ言葉はひどく滑稽に零れ落ちる。

この部屋に入ってきた時と同じ、無表情な陛下と視線が合った。

「えっ……」

「ならぬと言った。今後その考えを改めない限り、部屋からも出さぬ」

「陛下！」

「これ以上話す気はない。いいか、お前の実家や親族の家を潰すことは容易い」

「……っ」

その瞳が、その言葉が暗に意味することに愕然とした。
私のたった一つの行動が、愛する家族を破滅させる。

目の前が真っ暗になるとはこういうことなのか。

私には重厚な扉が閉まったことにすら気付かなかった。

もう立っていることすらままならず、崩れるように床にへたり込んだ。

「どう……して」

涙が静かに頬を伝う。
心が痛いと思鳴を上げる。
粉々に砕けた残骸はもはや希望とは呼べない。

陛下に言い付けられたのか、食事の時間すら部屋から出ることは許されなかった。

警備の兵士も人数が増え、今まで以上の厳戒体制が敷かれている。
代わる代わる入ってくる侍女達は、まるで私がここから逃げ出さないように見張っているようだった。

そんなことしなくても逃げられるわけないのに。
羽をもがれてしまった鳥は静かに籠の中で生きるしかないのだ。

「王妃様、湯浴みがお済みになりましたら今夜はおやすみになりますよう」

「ええ…分かったわ」

言われた通り沐浴を手伝ってもらった後はベッドに入った。

一人で眠ることが常だったのに、今夜は眠れそうになかった。
目を閉じると、昼間の氷のような瞳を思い出してしまうから。

ベッドから降り、実家から持ってきた本を取る。

子供の頃から好きだったお伽話の世界は、いつだって幸せに溢れていた。

美しい王女と王子は互いに愛し合い、数々の困難を乗り越える。

どんなに途中切なくても、最後はハッピーエンド。

「それから2人は、幸せに暮らしました…」

何度も読んで空想の世界に耽った。

自分にもいつか、素敵な王子様が現れて愛されて幸せになるんだと、信じて疑わなかった。

それは叶わない永遠の夢。

現実をもっと苦しくて辛いものだ。

幸せそうに微笑む2人の挿絵に涙が落ちる。

もう枯れてしまったと思っていたのに、私にはまだ泣けるらしい。

不意に人の気配を感じ、ドアの方に目を走らせる。

月明かりも淡く、はつきりとは見えない。

「誰…?」

私の声に応えるかのように、その人物は一步一步近づいてきた。コッソ、コッソと暗闇に響く靴音は不気味以外の何物でもない。

やがてぼんやりと浮かんできた姿に、私は危つく悲鳴を上げそうになった。

「陛下？」

何も言わない陛下に、昼間と同じ恐怖を覚えた。

開けたシャツに、ズボンといつもよりも無防備な格好なのにそう感じるのは、腰に下げている剣が鈍い光を放っているからだろうか。

陛下が腰を降ろした所為で、ギリリとベッドが軋んだ。

その表情からは何も分らない。

王という立場上、表情を悟られないよう幼い頃から訓練を積んできたと聞いていたけれど…

違う。これは「表情」ですらない。

蒼い目はガラス細工のように何も映していないのだから。

ギシ、と音が鳴る度陛下は私の距離を詰めて行く。

その目に見つめられた私は、その場から動くことが出来なかった。やがて暗闇の中でもお互いの顔が確認出来るほど近くなったとき、私の鼻を2つの香りが掠めた。

一つはアルコールのツンとした匂い。

もう一つは…優しい花のような香り。

私はその香りを知っていた。

先日スカーレット姫がいらしたときに頂いた香水と同じだったから。そこから導き出せる答えは一つ。

頭から冷水をかけられたようだった。

私を嘲り、傷つけるつもりならば大いに成功した。

抱いたのだ、彼女を。

今にも陛下の瞳の中にあの美姫が映りそうで怖かった。

重なり合う身体が、絡み合う様子が目に浮かんできそう。

「いや…嫌！」

胸板を力一杯押して距離を作る。

それが過ちだと気付いたのは、手首を痛いくらいに掴まれてからだ。

「私を拒むのか？」

抑揚のない声で問われ、はっとした。

だけど私が口を開くより早く、両手が柔らかいシートに沈む。

断続的な痛みだけが、これを現実だと教えてくれた。

「陛下…いや！止めて下さい！」

服にかけられた手を拒もうともがくと、一瞬だけ動きが止まった。思い直してくれたのかと安堵したのも束の間のこと。

陛下は突然高らかに笑い出した。

誰もが戦くような声で。

「こうして欲しかったんだろう？こうして抱いて欲しかったんだろう？」

「何、を……」

「世継ぎが欲しいのなら孕めばいい。協力は惜しまん」

冷たい声と瞳は、闇の中で更に深さをました。

陛下の手は震える私を嘲笑うかのように、次々と服を剥いでいった。恐怖に怯える肌に指を滑らし、言葉を紡ぐことを忘れた唇を塞ぐ。もしこれが愛のある行為なら、どんなに幸せだったかと思うと、心が壊れた。

陛下は決して私を愛さない。感情など必要ないのだ。私という器さえそこにあればいい。

「私のものだ、全て。お前のものですらない。いいか、サラ。お前は私のものだ」

吐息のような言葉さえ、私には届かない。
心を殺した私には。

05：闇はまだ深く

目を開けた時、カーテンの隙間から薄らと朝陽が零れていた。

小鳥のさえずりと、朝露に濡れた花の香りが今にも窓を突き抜けて溢れそうな気がする。

いつもと同じ朝。

あと数分もすればエレナが明るい声を響かせて、扉から入ってくるだろう。

もう少し夢との狭間を行き来していたい気がするけれど、彼女はそれを許してくれない。

名残惜しく感じながらも、体を起こそうとした時だった。

「えっ…？」

まるでベッドに縫いつけられたかのように体が重い。

それどころか口から出たのも掠れた空気で、おおよそ声とは言えぬものだった。

目が冴える毎に感じる鈍い痛み。指先一つ動かすにも神経の細部までぴりぴりと痺れを覚えた。

混乱した頭で昨日の記憶を辿っていく。

確か陛下に城を去るお許しを得ようと話をして…それから…

断片的に思い出す昨夜の出来事に体が震える。

肌をなぞる指先も、かけられた言葉にも優しさなど存在しなかった。

蔑みと、果てのない憎悪。その2つだけが氷のように冷たい瞳に宿っていたのだから。

競り上がってくる痛みを何とか飲み込み、心を落ち着けようと息を吐く。

隣には誰もいない。温度のないシーツに一人、沈んでいく。

もしも肌に残された痕さえなければ、全て夢として納得していただろう。

ホンの少し、悪い夢を見た。それだけで済んだ筈だったのに。

「王妃様」

ドアの向こうから控え目に掛けられた声に、慌ててシーツを掻き抱く。

来ていた夜着は、どこかへ消えてしまっていた。

入ってきたのは女官長と、見たことがない侍女2人だった。

侍女たちに的確に指示を出した彼女は、眉一つ動かさないまま私の肩に薄手の服を掛けた。

そこにいつものエレナの姿がない。そういえば夕食の時も彼女の姿はなかったように思う。

いつも一緒にいた所為か、違和感と不安ばかりが心を支配していく。

「このまま湯にお浸かり下さいませ。その間に朝食を用意しておきます」

「あの…エレナはどうしたの？いつも私付きだった」

「彼女でしたら、城から暇が出ましたので王妃様のご実家に戻りま

した」

「え…？」

「これから暫くは私たちで王妃様のお世話をいたします。必要な物がございましたらすぐにお言いつけ下さい」

質問は受け付けないと言うように、型通りの礼をした彼女は思い出したように口を開いた。

「本日はスカーレット様がお茶会を開くそうでございます」

「そう…時間は？」

「いいえ。陛下より部屋から出すときつく申しつけられております」

「どういう、ことかしら…」

「今後も陛下の許可なく王妃様は部屋から出られません。扉の外、窓の下など全て兵がおりますのでくれぐれも軽率な考えは謹んでいただきますよう」

全身から血の気がゆっくりと引いていくのが分かった。

私には、少しの自由さえなくなってしまったのか。

絶望なのか怒りなのか悲しみなのか、心の中を渦巻く感情に名前はつけられそうにない。

ただゆっくりと心に染みてく虚無感は、確実に感情を壊している。

多くを望んだわけではない。

王妃として役目を果たせないのならせめて、ひっそりとこれからを暮らしていけたらと。

陛下を愛する気持ちだけを持ち続けられたらそれでよかったのに。
願ったものは何一つ残らなかった。

一礼して去っていく女官長の背中を呆然と見送った。

侍女たちに急かさせれ、浴室へと足を進める。

代わる代わる湯浴みを手伝う彼女たちにされるがままの私は人形みたいだ。

本物の人形になってしまえば、痛みを感じる心も無くせるのに。
ただの「飾り」として王妃の位に就いたままでいられたのに。

湯浴の後用意されたドレスも宝石も、全て一流品ばかり。

実家にいた頃は憧れさえ持っていたのに、今はこの身を縛る鎖にしかない。

私の胸元を彩る10分の1の宝石でも母はとても喜んでいたっけ。
愛する父からの贈り物に大きななんて関係ないのだ。ただ父が母を想っている、その気持ちだけで幸せだと言っていた。

大きくて、とても重い宝石。

だけどそこに想いなど入っていないのだ。

やがて身の回りの世話を終えた侍女たちは、用があったらベルを鳴らすように言い扉の向こうへ消えていった。
することも無く、ぼんやりと外を眺める。

王妃になってから、随分とこの国の歴史を学んだ。創世記から、現代史まで。

今の陛下の代になるまで実に100近くの王が、歴史にその名を連ねていた。

歴史を重ねることに我がロゼ国は強く、そして大きくなっていく。戦争という手段を取っても、ロゼにあまり敵がないのは一重に陛下の圧倒的な力の所為なのだろう。誰もがその力の前には無力になる。そして跪かずにはいられないのだ。

「随分熱心に外を見ているのだな」

突然降ってきた声に、肩が跳ねる。

そちらへ視線を移すと執務用の服を纏った陛下が立っていた。

先ほどの私の反応が気に食わなかったのか、綺麗な形を描いている眉は歪んでいた。

コツン、と陛下が一步踏み出す毎に鳴る靴音が、昨夜の恐怖を甦らせる。

挟まれた傷がまた開いていくように、ゆっくりと確実に心に痛みが走る。

今まで昼間から陛下が私を訪れたことはなかった。尤も、夜もだけれど。

昨日は薄暗く月明かりに照らされていた顔は、眩しい光の中にハッキリとその形を表す。

見惚れてしまう程整った顔が怖いと思うのは、そこに何の感情も無いから。

小刻みに震えている唇をなぞり、陛下は笑う。

慈しむようなものでも、からかうようなものでもない。
心の底から嘲るような笑み。

「私に触れられるのがそんなに嫌か」

「いえ…そんな」

「生憎執務が押していてな。お前を抱いている時間はない」

ぞく、と背中を戦慄が駆け抜ける。

壊れた機械のように昨夜の情景が何度も何度も、途切れながら繰り返し頭を掠める。

目を瞑って振り払おうとしても、まるで瞼の裏にこびり付いているかのように離れてはくれなかった。

「何か、ご用でしょうか」

精一杯自身を奮い立たせて紡いだ言葉は、情けないほどに震えていた。

陛下は私の質問に答えるでもなく、窓際に置かれた小さな丸テーブルの上に何かを置いた。

それは手紙だった。薄紅色の封筒は私が好きだったもの。

それを知っているのは実家の人間…兄とエレナだけだ。

恐る恐る陛下に視線を合わせる。

その表情からは何も読み取れない。

深海のような瞳に全て吞まれそうになり、無意識に合わせた目を逸らしていた。

「今朝実家に返したお前の侍女が持っていたものだ」

そのまま陛下の指先は、何の躊躇いもなく封を切っていく。
一度開けられたようで、綺麗に剥がれたそこから手紙を取り出す。

「私が何も知らないとも思ったか？」

手紙には私の身を案じる言葉が連なっていた。

今まで辛い思いをさせて悪かった。城を去った時は必ず家に寄ってくれ。必要な物は全て揃える。

兄の優しさが溢れている手紙。

エレナは私にこれを渡す前に見つかってしまい、内容を知った陛下に実家に返された。

私の所為だ。エレナは何も知らなかったのに。

「随分甘く見られたものだ。楽しい計画が台無しになって悪かった、とても言っておこうか」

「陛下っ……!!」

「なんだ。言い訳でもするか？」

どうして、という疑問符はずっと頭の中を巡っていた。

私が王妃である意味、この城に残る意味。それが一体どこにあると
いうのだろう。

3年、こうしてこれたのも陛下を想っていたから。傍にいただけで幸せで、大切な時間だった。けれどそれだけではいけないのだ。王妃としての責任は、それだけでは。

「お願いです…私を」

全てを言い終わる前に陛下の足は、既に扉の近くまで進んでいた。これ以上言うことも許されないということだろうか。

「今宵また来る。準備をしておけ」

告げられたその一言は、暗に今夜も抱くということ。

唇を強く噛んで言葉を飲み込む。
でないとい今にも堰を切ったように泣き喚いてしまいそうだった。

06：心の棘

夜の帳がその身を横たえ、辺りが暗闇と静寂に包まれた時。それが陛下の訪れを意味する。

あの日を境に毎夜のように繰り返される行為は、ただ虚しさと悲しさを浮き彫りにするだけだった。

肌をなぞる指先も、私の名前を紡ぐ唇も偽りでしかない。

そして朝が来れば、泡沫の魔法は消え去ってしまうのだ。

ベッドは私一人の体温しか覚えない。ホンの数時間の陛下の体温など、忘れてしまう。

あとどれくらい、涙を流せばいいのかわからない。

痛む心は失くしたと思っていたのに、一夜を明かす度私の胸に戻ってくる。

涙の数だけ、陛下を想う気持ちも消えてくれたらどれほど楽だろうか。

始めから届くことはないと分かっているのに、陛下の仕草一つに簡単に傷つく自分がいる。

王妃という立場から逃れたい半面、朝起きて陛下が隣にいる日々を思い描く。なんて放漫な感情だろう。

「え？」

ぼんやりと考え事をしていた所為で、女官長の言葉を聞き逃していた。

投げかけられた疑問符に、彼女は特に顔を顰めるでもなく淡々と言葉紡ぐ。

「スカーレット姫がお会いになりたいそうです。出来れば今日明日中にでも」

「私に？一体どうして…」

「お茶会に王妃様がお出席になられないからと、姫自ら赴いて下さるそうでございます」

「そう…」

部屋から出るなという令は、一週間以上たった今でも解けることはなかった。

暫く誰かと話すこともしていない。部屋から出なければ特に問題はないだろうと思う。

「本来なら王妃様がお茶会を主催されるべきでございますのに」

ときばきとお茶の道具を片づけながら言う女官長の言葉には、微かな非難が含まれていた。

何度か後宮の他の姫をお招きしてお茶会を開いたことがある。ス力

「レット姫が城に入り、真っ先にそれをしなくてはいけなかったのは自分なのに。」

城を出ることに頭がいっぱいで、そこまで気が回らなかった。

これではスカーレット姫を王妃が認めないと、変な噂を生んでしまっただろう。

自分の行動の甘さに今更ながら苦笑いが隠せない。

「ええ、そうね。気が利かなかったわ、ごめんなさい」

「臣下に謝罪は不要でございます」

「そうだったわね。姫が到着されるまでに新しいドレスに着替えます。用意を」

「畏まりました」

一人残された部屋で溜め息を吐く。

エレナがいなくなつて、途端にミスが多くなつた。

王妃でいることは極限まで神経を張り詰めているということ。

今まではその緊張を解く場所があつた。エレナとお喋りの時間であつたり、一人ではないものの庭を散策する時であつたり。

どちらの機会も失ってしまった今は、日がな一日緊張状態にある。夜でさえ、それは同じだった。

王妃になる人物は幼い頃よりそれなりの訓練を積んでいる。

民の前に出ても物怖じしない度胸と、深い教養、幅広い交友関係など求められるものは多いからだ。

そのような方たちは自分の価値を知っている。だから私のようなミスもしないし、臣下に謝ることもしない。

傲慢だとかそういうのではなく、それが求められている事だからだ。

鏡の前に立ち、自分と向き合う。

栗色の髪は真っ直ぐではなく、癖のある巻き毛だ。お兄様たちは可愛いと褒めてくださったけれど、あまり好きにはなれない。

可愛いという言葉は、「綺麗」ではないのだ。なんだか子供っぽさを強調されているみたいに聞こえてしまう。

18になったというのにあまり肉付きのない体もコンプレックスの一つ。お母様も華奢で小柄な方だったから、遺伝なのだろう。

大人になればなるほど、周りとの差を感じずにはいらなかった。

私には体の線を強調するようなドレスも、深紅の口紅も似合わない。歳を一つ重ねる度に、試してはみるものの不釣り合い過ぎた。

スカーレット姫には、さぞ似合うことだろう。

頭を過った彼女の姿を急いで打ち消す。嫌だ、こんなみつともない嫉妬をするなんて。

もう一度溜め息を吐き、鏡の中の自分に言い聞かせる。

「笑うのよ、サラ。まだ…貴女は王妃なんだから」

鏡に映った笑顔は、ひどく歪だった。

「本当に私、楽しみにしてましたのよ。王妃様とこうしてお話するの」

朗らかに笑いながら、音一つ立てずにカップをソーサーに戻す仕草は流石に優雅だった。

「この前のお茶会も、王妃様が来て下さるとばかり思っていたから残念でしたのよ」

「申し訳なく思っています…本当なら私からお誘いしなくてはいけなかったのに」

あの後、それ程時間を置かずに訪れたスカーレット姫は相も変わらず「美しい」という表現がぴったりだった。

歓迎の宴の時はきちんとお顔を拝見する機会がなかったけれど、近くで見るとますます硝子細工のよう。

陽の光を受けて肩口を流れる髪は、更にその色の深さを増し、胸元には髪色と同じ深紅の宝石が輝いていた。

一つ一つの動作は洗練されていて、きつとあの女官長でさえ文句は言えないだろうと思う。

「まあ、王妃様が謝られることなんてございませんわ。体調を崩されたのでしょうか？もうお加減はよろしいんですの？」

「ええ…お気遣いありがとうございます」

お茶会を断った口実は私の体調不良だったのかと、今更思い知る。それにしてもなんて優しい方なのだろう。こんな風に細やかな気遣いもして下さるなんて。

スカーレット様が持ってきて下さったお茶は、初めて口にする味だった。

甘さの中にもほんのりとした苦味があり、本当に美味しい。正直にその感想を口にする、祖国の品だと教えてくれた。カメリア国でこんなに美味しいお茶が取れるなんて初耳だった。少なからず隣国のことは学んできた筈なのにと、ここでも勉強不足を否めない。

「私、こんなことも知らなかったのかと思うと恥ずかしいですわ」
「このお茶は特産品ではないのです。知らなくて当然ですわ。実は私もつい最近知ったのです。内緒にして下さいましね」
「まあ…」

スカーレット様と話をする度に、どんどん自分の中で靄が晴れていくようだった。

この方に嫉妬を覚えていたなんて、自分が恥ずかしい。

「スカーレット様は…陛下と幼馴染なのですか？」

「ええ。と言っても、幼い頃年に数回会う程度でしたけれど。子供って無邪気でしょう？あの頃は恐れ多くも名前でお呼びしてたので

すよ」

「仲がよろしかったんですね」

「そうですね。懐かしい、思い出です。十数年ぶりにお会いしましたけれど、お優しいところはちつとも変っていらっやらないわ」

遠くを見つめる視線は、誰を想っているのかすぐに分かった。

きつと私もこのような瞳で陛下を見つめているのだから。

スカーレット様は陛下を想っていらっやる。それも、幼い頃から。

陛下は…どうなのだろうか。

あの夜、スカーレット様がお持ちになっていた香水を残していたことは未だに根深く記憶に残っていた。

今日もスカーレット様はあの甘やかな香りを身に纏っている。

それに、先ほどの言葉。優しいところはちつとも変っていないと言っていたところからして、陛下はスカーレット様を大切に思っているのだろう。

その事実が切なく胸に棘を残す。

「それより王妃様こそ教えてくださいな」

「え？」

「正妃様なんですもの。私の知らない陛下のことをご存じなんですよ？」

ちくり、ちくりと胸を刺す痛み。

とてもじゃないけれど、言えなかった。

陛下は決して私を愛していないのだと。私が知っている事など何もないのだと。

私には胸を焦がす思い出も、心を躍らせるような未来も陛下との間には存在しない。

ただ3年間、言ってしまったえば肩書きだけにしがみ付いていただけ。スカーレット様を知っている優しい顔も、言葉も私は知らないのだ。知っているのは氷のような眼差しだけ。

「あ…それは」

「まあ王妃様、勿体ぶらずに教えてください」

「私…」

一体どうしたというのだろう。

さつきから体が熱くなったり、冷たくなったりを繰り返している。頭もくらくらしで酷く気分が悪い。

お茶を飲もうとカップに伸ばした手は、ひどく痺れて力が入らなかった。

それでも何とかカップに触れた瞬間。

目の前がぐらりと揺れた。

「王妃様！？誰か！王妃様がっ…！」

遠くで悲鳴とカップの割れる音が聞こえる。

沢山の人の足音と、私を呼ぶ声。

全身に力が入らなくて何も答えられない。

割れるように痛む頭を忘れるかのように、私は静かに目を閉じた。

07：偽りの海に沈む真実（前書き）

宰相、ヴィンセント・モリス視点。

07：偽りの海に沈む真実

我がロゼ国は列国最強を誇っている。軍事力、政治力をこれほどまでに兼ね備えた国は歴史を振り返ってもそうはないだろう。

驚くべきことにそれが若干23歳の王によって行われている。

18で即位してから国内で起こっていた様々な内乱を鎮圧し、前々王の御世から傾いていた国政を見事に復活させた。

以来王が即位してから一度も国内で怪しげな動きを見せるものになくなった。例えばいたとしても、今の陛下に楯突こうなんて間抜けな輩はいないだろう。

頭のいい奴らは自分の懐を守るのが第一だと考えるからだ。

人々に「賢王」と讃えられ、敬われる存在である陛下の右腕と自負出来るのはこの上ない栄誉だ。

貴族の次男坊として何不自由なく、しかし何一つ満たされることのない人生を送ってきた私は陛下に文字通り「拾われ」た。

初めて陛下に謁見した時から私の身に宿る魂を捧げたと信じていても過言ではない。

一臣下として、私は陛下の為ならば命をも投げ出す覚悟を持っている。

人々の尊敬を一心に受け、列国最強としての国を保つその肩には想像もできないほどの責が石のように積み重なっていることだろう。

もし何かに悩むことがあり、私の力や知恵を必要とするのであれば尽力するつもりだ。

しかし今、陛下の表情に憂いを落とす原因となっているものには、私だけの力ではどうにもならないだろう。

人の気持ちというものは、当人同士が解決の道を辿らないと意味がないからだ。

傷つけ合うのは簡単だが、それではいつ限界が訪れても不思議ではない。

現に王妃様は、刻一刻とその足を「限界」に近付けているのだから。

「最近仕事を増やされましたね」

さりげなさを装ってそう言うと、今まで文字を追っていた目が私を見据える。

何が言いたい、と視線が問う。

「変なお噂が流れていますよ。陛下が王妃様を囲っていると」

「只の噂だ。放っておけ」

「王妃様付きの侍女もご実家へ帰されたそうですね」

「無駄口を叩くな。執務が捗らん」

「いえ、陛下。今日こそは言わせて頂きます。一体貴方は何をなさっているのですか？」

「なんだと？」

氷を思わせる瞳が鋭く私を射抜く。

あまりに冷たい氷に触れると熱を感じるが、今まさにその状態だ。

普段の私なら、陛下が言うように噂など放っておいた。

大抵の出所は口の軽い侍女だからだ。一々本気にしていたらキリがない。

それに噂というものは誇張され、人々の間を渡っていく。人の上に立つ者として噂を信じるということは、真実を見極められない愚か者として見られる。

王妃様には、口にしたことはなかったが、様々な噂があった。

王に愛されていないだとか、現王妃を排して新しくスカーレット姫を王妃として迎えるだとか。もっと上をいくと、金の為に王妃は王と結婚しただとか。

私からしてみれば愚の骨頂としか言いようがない噂ばかりが、尾ひれをつけてまるで真実のように語られていた。

スカーレット姫のことは、私も少々驚いたことは否めない。

王妃を迎えてから一度も後宮の姫を増やそうとしなかった陛下からの、突然の案だったからだ。

しかしそこには、陛下なりに何かの考えがあったのだらうと私は信じている。例えば私が知りえなくとも、絶対的な自身がない限り陛下は独断では判断されないからだ。

だが、今回の噂に関してはまるで話が別だった。

陛下が夜な夜な王妃の許へ通っている。しかも部屋から王妃を一步も出そうとしない。

狂気染みた噂だと始めは高を括っていたが、それは大きな間違いだった。

今のロゼ国は、陛下のお力は勿論だが、有力貴族のバックアップも大いに影響している。

その貴族たちの娘を王子の時から後宮に迎えることによって、信頼を得、また損なわずここまで来ている。

娘のうち誰かが、陛下のお世継ぎを孕むことを期待されていることだろうと思うが。

真実を述べるのなら、サラ・ハークネス子爵嬢が王妃として立てたのも、そんな事実があったからだ。

兎にも角にも、後宮という場所は政治とは無関係なようで中枢と言ってもいいくらい重要な場所でもある。

微妙な均衡を保ち、上手く貴族たちを動かしていくのが陛下の役割

であり、義務だ。

例え王妃という地位を与えられていても、お世継ぎが生まれるまではその足元はとても脆い。

ましてや今まで王妃様は陛下に愛されていないなどという不名誉な噂が流れていたのだ。

突然とも言える寵愛は、後宮に不安を呼び反乱を招く。そうして誰が一番傷つくのか、陛下が知らない筈はないのだ。

ただでさえ王妃様の心は乱されている。見たまま、聞いたままが全てだと思い、一つずつ暗闇への階段を踏み外していく。

このままでは、いずれ…

「いずれ、大事なものを失ってしまいますよ」

陛下ではなく、王妃様へ不穏な動きを働く者も出てくるだろう。

そういった頭を使える者達は、決して自分の手を汚しはしない。

幾重にも袈裟を被り、自分のところへ疑いが来る前にその糸を断ち切る。そうなったら成す術がない。

厳しく細められていた瞳は、やがて諦めたように私から逸らされた。口元には笑みさえ浮かべて、しかしそれは自分自身への嘲笑であるかのように。

「失うようなものは始めから持っていない」

知らないのだ、この方は。

求められるものが多すぎたが故に、自分から求める術を。

王妃様と同じく、現実から目を逸らすあまり、真実を避けている。

「陛下……」

「陛下……！」

私が口を開くより早く、執務室のドアが慌ただしく開いた。

見ると、普段は冷静沈着で有名な女官長が、その顔に緊張を漲らせて立っていた。

「どうした。ノックもなしに執務室に入るのは無礼だぞ」

そう私が咎めるも彼女の思考は別のところにあるらしく、頻りに何かを言おうとしては口を閉じる。

いつもの彼女ではない。これは何かがあると感じたのは私だけではなかったようだ。

椅子から立ち上がった陛下は、女官長の謝罪を手で遮り本題を促した。

「何かあったのか」

「陛下……その、王妃様がお倒れに……！」

「なんだと……？」

一瞬にして顔を強張らせた陛下は、私と女官長の間を走るように抜け、執務室から出ていった。

慌ててその後を追うも、見えたのは近衛兵が慌ただしく廊下を走る姿だけ。

恐らく近衛兵でさえ、突然のことに対処しきれなかったのだろう。あれ程狼狽する陛下を見るのは私も初めてだった。

「医師はもう呼んであるのだろうか？」

「え？ええ……」

呆気にとられていた女官長にそう問うと、はっとしたように答えが返ってきた。

「スカーレット姫とお茶を楽しんでいたところで、突然……取り乱してしまい申し訳ございません」

「いや……当然だろう。さて、私たちも向かいましょうか」

幾らその心に頑丈な鍵をかけて全てを押し殺そうとも、奥底に眠る感情は隠しきれない。

先ほどの陛下の表情を見た誰もがそれを知ると、女官長の前を歩きながら思った。

あの瞳が語っていたのは紛れもない真実だ。

あとは貴方次第です陛下。偽りという装飾を剥がすのです。

まだ間に合う筈です。きっと。

「寝不足と精神的なストレスからくる心労です。十分な睡眠を取っておけば問題ないでしょう」

医師の診断に、その場にいた誰もが深く安堵の息を吐く。

ずっと付き添われていたスカーレット姫も、「よかったわ」と口元に笑みを浮かべていた。

王妃様の傍に座っていた陛下は、苦しそうに頻りに何かを呟いていた。私の耳にまでは届かなかったが。

「念の為薬を出しておきます。女官長殿、目が覚めたら飲ませて下さい」

「畏まりました」

「それから…モリス様。少々お話が」

「なんでしょう」

老齢の医師は穏やかな表情を一変し、厳しい顔つきのまま私を扉の外へ誘導する。

他の誰も、私たちのやり取りには気づいていないようだ。

近衛兵の姿さえ見えなくなるほど奥まった場所へ連れてきた医師は、私に屈むよう指示し、耳打ちをする。

「先程は陛下の手前、言わなかったのですが…」

耳にそっと囁かれた言葉は、信じられないものだった。

「なん…ですって？それは本当ですか！？」

「ええ。まだ確信とまではいかないのですが、ほぼ間違いないと思います」

体の芯から一気に冷えていく。

医師の言葉は、先ほどまで私が抱いていた淡い期待を無残にも打ち砕くようなものだったからだ。

この医師の気遣いに感謝するとともに、頭の中を整理させようと必死に考える。

事態は思ったよりも悪い。そして、これからも悪くなるだろう。

それは予感ではなく、確信だった。

08：ハシバミ色の記憶

額にひんやりとしたものが当てられ、ゆっくりと目を開ける。

見慣れた高い天井に妙な安心感を覚えるのは、夢見が悪かったからだろうか。

内容はよく覚えていない。ただ、ぞっとするような感覚だけが、鈍く痛む頭にこびりついていた。

「お気づきになりましたか？」

傍に控えていた女官長と空中で視線が合い、ほっと安堵したような顔で問われた。

「私……」

「まだ起き上がってはいけません。覚えていらっしゃいますか？お倒れになったのですよ」

そうだ。スカーレット様とお茶を飲んでいるときに気分が悪くなったのだっけ。

せっかく時間を作っていただいたのに、申し訳ないことをしてしまった。

窓の零れそうな程陽の光で溢れていた室内は、今はシンと静まり返っている。

外はもう、群青色に包まれているところからして相当な時間眠っていたのだろう。

まだ頭に痛みは残るけれど、倒れる前よりはずっといい。差し出された熱いお茶で喉を潤し、ほっと溜め息を吐いた。

「お医者様が十分な睡眠をとるようにとのことでございます。それから念の為にとお薬も」

「ありがとう。体調管理には気をつけないといけないわね」

「ええ。スカーレット様も心配されました。つい先ほどまでは陛下と宰相閣下もありましたわ」

「陛下が？そう…後でお詫びに窺わなければね」

貴重な執務の時間を削らせてしまったに違いない。

スカーレット様にもお詫びの手紙と、庭園の花を沿えて後日お茶会のやり直しをしておおう。

その時は後宮の他の姫も集めて。

女官長が何か言おうと口を開くのと、部屋の扉がノックされたのはほぼ同時だった。

侍女に付き添われ入ってきたモリスは、私と女官長を交互に見、気まずそうに笑った。

「なにやらタイミングが悪かったですか？女官長殿」

「い、いえ…」

「お話の途中で悪いのですが、王妃様とお話ししても？」

「ええ。しかしまだ体調が万全ではないので、手短にお願いいたします」

勿論です、と笑ったモリスはゆつくりと私の方へ歩みを進める。
ベッドの中に入ったままというのは気恥ずかしかったので、体を起こそうとしたらやんわりと押し止められた。

「そのまま結構です、王妃様。お加減は？」

「よくなりましたわ。心配をかけてごめんなさい」

「とんでもございません。大事に至らなくてなによりです。…ところで」

いつになく真剣な顔で、周りを窺うようにして紡ぎだされた言葉。
急に落とされた声が、これから話される事の重大さを物語っていた。

「これから暫く王妃様の警護を強化いたします」

「…何かあったの？」

「いえ。大したことではございません。陛下にも話は通してありますのでご心配なさらず」

「そう…」

「近衛兵より3人、本日より警護にあたらせて頂きます。3人も若いですが腕は確かです」

近衛兵と言われ、一瞬アルフレド兄様の顔が頭を過る。

しかし、陛下に話を通してあると言われたらその線は薄いだろう。

何しろ実家との連絡を絶つ為にエレナを解雇したぐらいなもの。

警護の強化と聞いて不安ではないかと問われたら、勿論不安だ。最近不穏な動きをしているものがないと聞いていたから余計に。

けれど剣の覚えもない私は、ただ大人しく守られているしかない。

紹介してもいいかと問われたので、勿論だと答える。

これからのことも考えて、私を守ってくれる人の顔は覚えておいた方がいいだろう。

モリスに呼ばれ入ってきたのは、言われた通り若い兵士だった。王族を直に守る兵士だ。強いことには変わりはない。

「手前がヘルマン・ブラック。近衛兵副隊長です」

「まあ…そんな方を？」

「常にといいわけではございません。公務の時など外に出られるときはブラックが先導しますが」

あとの2人のうち1人は女の兵士だった。

アメリカと名乗った彼女は薄い茶色の髪を短く切りそろえ、見た目は男と変わらないと言っていたけれど。

でも線の細さと、なだらかな体の曲線は武装していても隠せないものだ。

聞くとなのある貴族の令嬢なのとか。とは言っても自分は五女で、結婚するのが嫌だったから入隊したのだと笑っていた。

深窓の姫君には決してない傷とか、日に焼けた肌とか。それが兵士としてのなによりの証だ。

それでも女の身でありながら近衛兵に抜擢されるなど、実力としては男に劣らないのだろう。

これからよろしくと笑いかけると、顔を真っ赤にして頭を下げていた。

歳もさほど変わらず、他の侍女のように私を好奇の目で見ないところがとても嬉しい。

彼女は常に近くに来てくれるということなので、エレナがいなくな

ってから寂しかったお茶の時間がまた楽しくなりそうだ。

最後の1人は、モリスに名前を呼ばれるまでずっと俯いているので顔はよく見えなかった。

ブラック副隊長と、アメリカが前に出て私に礼をしている間もずっと。

「最後にサイモン・ノワイル。アメリカと共に常に王妃様の近くにいる者です。アメリカが室内なら、ノワイルは室外の警護を担当します」

彼の名前を聞いた瞬間、心臓が止まるかと思った。

それは彼も同じだったのだろう。だからずっと、下を向いたまま私の方を見なかったのだ。

「サイモン・ノワイルです、王妃様」

躊躇いがちに向けられたハシバミ色の瞳は、私が記憶しているのと何も変わってはいない。

ただ、4年という月日が流れた分だけ彼は大人になり、その顔に精悍さも加わった。

サイモン・ノワイル。

私が王妃になる前：正確には実家がまだ裕福だった頃、私と彼は婚約していたのだ。

元々ノワイル侯爵家当主と母が幼馴染だったらしく、子供の頃はよ

くお互いの家を行き来していた。

大きくなったら旦那様になる方よ、と母が教えてくれた4つ年上の男の子はまさに絵本に出てくる「王子様」だった。

色素の薄い髪は、太陽に透けると金色に見え、幼いながらも感動したものだ。

4つ下の私にも秘密の場所を教えてくれたり、器用に編んだ花飾りをくれたりと可愛がってくれた。

『サラは僕のお嫁さんだから、これ』

頭に乗せられたお母様の薄い絹のシヨールと手作りの花冠は、本当に花嫁さんのようだと思親を笑わせ、兄たちを困らせた。

たった5つだった私には、どういう意味なのかもよく分からなかったけれど。

周りの人の反応と、隣に並ぶ男の子の笑顔で幸せなことだということとは分かった。

やがて私の母が亡くなり、父が亡くなった14歳の春までその幸せは続く。

王兵に志願して直接会えなかった間は、月に1度の手紙のやり取りが幼い日の約束を未来へを繋げていたのだ。

そして私も、いつか彼の隣に立つことを夢見ていた。

しかし、父が亡くなり兄が子爵家を継いだことで事態は大きく変わる。

治める領地の負債が紙面上に残されていた額よりはるかに多かった。長兄は必死でその原因を突き止め、目の前の現実をなんとか打破しようとして躍起になっていた。

父は優しくった。優しすぎたのだ。

その為、多くの悪意に触れ、その度に裏切られ。それでも決して私

たちにそれを悟られまいと振る舞っていた。

私たち兄妹は、父を愛していたから恨もうなんて思ってもいけないけれど、世間の多くは違った。

友人は離れていき、親戚からは溜め息が零れない日などなかった。あれ程親しくしていたノワイル侯爵家とも疎遠になり、遂に14歳の春に婚約が白紙になったことを知らされた。

仕方がないと思った。

元々母と侯爵様が知り合いでなければ、こんな不相応な縁談はなかったのだから。

それに父が生きていた頃ならまだしも、今や急速にその地位を落としている子爵家に何の魅力も無い。

逆に荷物を背負わせてしまいうくらいなら縁談を白紙にしてよかったのだと。

悲しくないとは言えなかった。心に灯った淡い恋を気の所為になど出来ないから。

婚約を白紙にするという手紙を貰った時は、正直目の前が真っ暗になったし、泣き叫びたいほど胸が痛かったけれど。

必死に気持ちを押し殺して、実家の為に年老いた伯爵家に嫁ごうとしていた矢先、王宮から使者がきた。

あれがもう、4年も前の出来事だなんて。

彼の瞳には、深い後悔と同情の色が浮かぶ。

優しいこの人は、あの時子爵家を助けられなかったことを後悔しているのだろう。

同じ近衛兵に入ったアルフレド兄様が、いくら気にしていないと言っても、深く謝っていたと聞いたことがある。

貴族としてはよくある話だし、侯爵様の行ったことは何の無礼もない。それでもこの人の気は済まないのだろう。

あの頃と立場はまるで変わってしまった。

気軽に名前で呼び合うことも、無邪気に家の中を走り回ることもない。

それでも私の胸に、懐かしさと共に初恋の温かい感情が甦ったことは事実だ。それは兄に寄せる気持ちと似ている。

「よろしくお願いします」

また会えてとても嬉しいとは、王妃という立場上口には出来ない。ただ精一杯の気持ちを込めて笑顔で言うと、サイモン様はほっとしたように息を呑む。

それからハシバミ色の瞳に感情が過ったかと思うと、跪き、床にくほど深く頭を下げた。

主君に対する、最大級の忠誠の礼だ。

近衛兵の場合、使えるべき主は陛下なのだから私にするのには、少し大袈裟すぎる。

彼はそんなことは気にしていないようで、視線を下に向けたまま言った。

「この命に代えても、貴女をお守りすることを誓います。… サラ様」

最後に呟くように紡がれた私の名前は、懐かしさと、ホンの少しの切なさを残して空中へと消えていった。

09：終わりへの痛み

後宮には現在、王妃の私を除いて4人の姫君がいる。

先日後宮入りしたスカーレット様の他に、イザベル・バレンデン嬢、ルイズ・エメラ嬢、オリヴィエ・ロビンソン嬢の4人だ。

いずれも名のある侯爵家の出だったり、大臣職を父に持つ由緒正しい姫君ばかり。

後宮の女の数がその国の栄華の証とまで囃したてられるほど、後宮はある意味その国の象徴ともいえる。

過去、他国の王の中には30人近くの姫を囲ったという記録も残っている。記録に残っているだけなので、実際にはそれ以上という話もあるけれど。

ましてや今、ロゼ国は列国最強の国。

姫君の数は10を超えてもおかしくないとされているだけに陛下への輿入れの話は後を絶たないそうだ。

陛下がまだ殿下であらせられた頃はそれなりの人数はいたらしいが、降嫁されたり、陛下の口添えで同盟国へと嫁いだりと今の数に至る。つまりのところ、最近入られたスカーレット様以外は有力な王妃候補だったわけだ。

私が王妃となった時点でその道は絶たれたようだが、まだ未来の国母という地位は空いている。

陛下と私の関係が良好ではないと知っている彼女たちは、虎視眈々と機会を窺っていると言えよう。

国力を無視しても、陛下はあまりに魅力的な方だ。その容姿の美しさは、男女問わず一度は深く溜め息を吐いてしまう。

しかし決して女々しい訳ではなく、剣を振るう姿は獅子とも鷲とも例えられるだけあって彫刻のように整っている。

あの方の寵愛を受ける為に美しさも教養も重ねてきた深窓の姫君たち。

だから当然、いままで候補ですらなかった私の存在は疎ましいのだ。

「こちらが王妃様が丹精込めて作った花園ですの？先王妃様の庭とは随分違いますのね」

陛下にお許しを頂いて、後宮の姫君を集めたお茶会を開いたのは倒れてから一週間後のことだった。

王妃になった時に陛下から「好きにしてい」言われた庭の一部。天気も良かった為、そこでお茶会を開くことにしたのだ。

スカーレット様だけは少し風邪気味だということで、来られなかったけれど。

表面的には何もなく和やかにお茶会は進み、イザベル嬢に乞われるがままに庭を案内した。

その、最初の一言がこれだった。呆れたような、そんな声で。

私が譲り受けた庭の隣には、前王妃様のバラ園が広がってる。

何もかも計算しつくされた絵画のような庭。色の配置も彫刻の位置も、ここを訪れた人はみな口々に前王妃様の事を褒めたそうだ。

名前にもなっている通り、国花はバラだ。王国の紋章には向かい合う獅子を囲うようにバラが描かれている程重要な花。

殆どの貴族は邸にバラ園を持ち、その美しさと精巧さを競い合っている。まるで庭の出来栄が国への忠誠の証だと言わんばかりに。

そんな中で、私の庭は芸術とは程遠く、ぱっと見だとそれが花園だ

と考えられないような出来だ。

王宮に入って孤独だった私の、唯一心休まる場所。それが欲しくてあえて、野に咲いているような花を選んだ。

元々華美なものは私には似合わない。

それに素晴らしいバラ園は前王妃様が作ってくださったのだから、私が作る必要はないと判断した。

陛下は何も仰らなかつたけれど、大半の人間には呆れられた。

彼女、イザベル様も同じ感想のようだ。

「こちらの花は？」

「スミレですわ、イザベル様」

「随分小さな花なこと。でも王妃様にお似合いな花だと思いますわねえ、皆様もそうお思いになりますわよね？」

イザベル様の問いにあとの2人も「ええ」と穏やかに笑う。

けれど扇で隠したその上品な口元には、悪意に満ちた笑みが広がっているのだらうと想像に容易い。

この3年間で何とか気にしない術を身に付けたけれど、やはり小さくとも痛みは痛みだ。

最初の頃は泣いてばかりだったことを思えば、無理矢理でも平静を保てるくらいには進歩したのだらうけれど。

イザベル様のご実家は、王家とも縁の深い侯爵家だ。何代か前には王妃を輩出させたこともあるという。

はつとするような美しさは、スカーレット様にも引けを取らない。

輝くばかりの金色の髪と強い意志の宿る琥珀色の瞳。尤も妃の椅子に近かつたのはこの方だらうとも言われている。

後の2人は決してイザベル様に楯突くことはしない。いつも彼女の後ろにつき、専らイザベル様を褒め、彼女の意見に従っているだけだ。

侍女も取り巻きのように、彼女を崇拜していると聞く。

イザベル様の言っていることがすべて正しいのだとも言つかのうちに。

そして私に何か言うのも、決まってイザベル様が一番始めなのだ。

「しかし、王妃様はご存知でしょうか」

「なにをでしょう？」

「獅子は名も無いような野花よりも、バラを好みますのよ。目を奪われたとしてもそれは一瞬のこと。興味などすぐに薄れます」

その言葉が暗に意味することは、この国に伝わるお伽噺を知っているものなら誰でも気付く。

どうして国の紋章に獅子とバラが描かれているか。

それはこの国を創った獅子の異名を持つ初代王の妃の名が、外国の言葉でバラという意味だったから。

愛妻家だった彼は国の名前を自国の言葉の「ロゼ」に変え、城の周りをバラの花で一杯にした。

以来、獅子は王、バラの花は王妃に例えられ紋章として残ったという話。求婚する際に男性が女性に一輪のバラを贈る所以もここからきている。

私じゃ陛下に愛されない。

イザベル様はそう言いたいのだろう。

今は情けで王妃の座を貰っていても、いつかはその地位を追われると。

噂を知らないほど私は愚かではなかった。

偽りの王妃から一転、陛下は夜ごと私の部屋を訪れ私を囲っているという。

イザベル様もその噂をご存じなのだろう。元々そういった情報には早い方だから。

さっきの言葉にはそういった含みもある。

「…ええ、存じております。イザベル様」

「は？」

「すぐに獅子も気付きますわ。真に愛されるべきなのは美しいバラだと」

陛下は貴方の許へ帰ります。

そんな意味を込めた言葉にイザベル様の顔が赤く染まったかと思うと、次の瞬間には頬に鋭い痛みを感じた。

庭中に響くような音で、頬を打たれたのだと他人事のように思った。

「馬鹿にするのもいい加減にしてっ！！」

悲痛な叫び声に、庭にいた人々の視線が私たち集まる。

ルーズ様もオリヴィエ様も、この時ばかりは言葉が出なかったように顔面を蒼白に手で口元を押さえていた。

例えどんなにイザベル様のご実家にお力があるうとも、王妃である私の方が立場が上だ。

こんな大勢の前で私の頬を打てば罪は免れられない。

冷静な時だったならこんなことはしないだろう。だから今まで嫌味や皮肉で済んでいたのだから。

尚も私に詰め寄ろうとするイザベル様の腕は近くに控えていたアメリアによって取り押さえられ、私を背に庇ったサイモン様の手は剣に添えられていた。

「もううんざりよ！どうして私がこんな思いをしなくてはいけないの！？」

「お気を沈めください。皆が見ています」

サイモン様の言葉にも耳を貸さず、イザベル様は更に捲し立てた。

「あなたさえいなかったらっ……！！憎いわ！あなたが！」

「バレンデン様。それ以上王妃を詰るのは私が許しません」

「五月蠅い！どうしてこの女なの！？スカーレット様ならまだしも！！」

眉を顰め剣を抜いたサイモン様の手に自分の手を重ね、首を振る。

彼女に剣を向けることは私が許してはいけない。

「王妃様！何故止めるのです！」

「いいの」

今はそれしか言えなかった。

一概にイザベル様のことばかりは責められない。

彼女にだってプライドがあったのだ。王妃となるべく重ねてきた年月が、その努力が私によって壊された。

それも自分の家よりずっと爵位が低い貧乏子爵家の娘にだ。

“スカーレット様ならまだしも”

我が国には劣るうとも、スカーレット様は生粋の王族。それに比べて本来、王族と関わりが持てる筈のない私の家。

この3年間、彼女たちもまた見えない鬱積をただただ積み上げていたのかもしれない。

私だって、もしイザベル様と同じ立場だったら同じ事を思うだろう。もっと醜い感情を露わにして相手を罵倒していたかもしれない。そう思うと、何も言えなかった。

「…部屋に戻ります。アメリカ、イザベル様を放して差し上げて」

「しかし！」

「放しなさい」

私の言葉に従い、それでも全く納得がいていないという顔でアメリカはイザベル様を拘束していた手を緩めた。

重力に逆らえずにその体は柔らかい芝生の上に落ちる。

唇は未だに震えながらも、気丈に口を結ぶイザベル様は私を見ようとはしなかった。

「せっかくのお茶会なのに、場の空気を濁してしまってごめんなさいね。アメリカ、悪いのだけど姫君たちをお部屋までお送りして」

「はい。王妃様」

「それでは私が頬の手当てをします。こちらへ」

サイモン様の言葉に頷き、その後続く。

幾つもの視線が私を貫いているのに気付きながらも、全て無視した。立っているのが精一杯なのを悟られたくない。

赤く腫れた頬よりもずっと、心が痛かった。

「速攻性のある塗り薬です。少し染みますが」

「大丈夫よ」

遠くの医務室行くよりよりもと、鍛錬室から湿布と塗り薬を持ってきたサイモン様は手早く私の頬にそれを貼った。

ツン、と消毒液の臭いが鼻を突く。

言われた通り、湿布を貼られた場所は少しだけ染みた。だけど我慢できないほどではない。

子爵家の子女であつた私だけど、兄2人に習つて少々お転婆だつた。膝を擦り剥いたことも一度や二度ではないので、この位の痛みなら慣れていた。

カチャカチャと道具を片づけるサイモン様は無言だ。

こうして2人きりになったのは4年以上も前のこと。その時はまだ幼かつたし、こんなに空気は重くなかつた。

「あの、サイモ……」

「何故」

「え？」

「どうしてそこまでして我慢しているんだ!？」

興奮しているのか、いつもの物腰の柔らかい彼はどこにもいなかった。言葉遣いも昔と同じまま。

真摯な瞳に見つめられ、自分の中の緊張の糸がぷつん、と切れる。ずっと張り詰めたままだった糸が。

視界を歪ませる涙は次々と頬を伝って落ちていく。

後から後から溢れて止まらないそれは、零せなかった自分の感情だ。イザベル様に憎いと言われて傷ついた。どうして私なのかと問われて胸が締め付けられた。

そして向かう感情はただ一つ。

私さえ、王妃にならなかつたら誰も不幸になどならなかつたんじゃないか。

どうして王妃になどなったのだろう。王宮から直々に来た話だとは言え、断る口実は幾らだつてあった筈だ。

自分ばかりが傷ついてきたと思っていた3年間。

私は同じくらいの痛みと屈辱を彼女たちに与えていたのだ。

「……言ってくれ」

暫く黙って私を見ていたサイモン様は、ふいにそう言った。

「え？」

「言ってくれ。王宮から出たいと」

「なにを…」

「アルフレドを通して、ハークネス子爵から手紙を貰った。だから王妃を守る近衛兵の話が出た時、立候補した。君を守る為に」

「サイモン様」

「言ってくれ、サラ！君が一言ここから出たいと言えば、私が出してやる！命を賭けてでも！」

「それは面白い話だな、ノワイル」

空気を切り裂くかのような冷たい声に、言いようのない恐怖を覚えた。

それはサイモン様も同じだったようで声のした方に向ける表情はとても硬い。

「陛下、下…」

陛下の口元は上がっているのに、血に飢えた獣のように光る眼が恐怖を増幅させる。

扉に寄りかかるようにして立つその姿は、まるで獲物を追い詰める獅子そのものだった――

10：解放（前書き）

少しですが流血シーンがございます。
苦手な方はご遠慮ください。

10：解放

コツン、と陛下の足音が広すぎるくらいの室内に響く。

「今度から口止めをするということ覚えて方がいいな。女の近衛兵が、私の執務室に飛び込んできたぞ」

「陛下……」

「さて。言い訳があるなら聞こうではないか」

それは一瞬の出来事だった。

陛下の言葉と同時に、サイモン様の首元に当てられた切っ先。

鈍い光を放つ剣は、装飾用に帯刀しているものではない。確実に敵を切る為のものだ。

その鋭く尖った剣の先は軽くサイモン様の肌を傷つけ、真っ赤な血が一本の線になって首筋を伝う。

ぽたり、と床に落ちた一滴の雫。赤黒く面積を広めながら、床を汚していった。

私はまるで人形のように立ちつくすことしか出来なかった。

目の前で起こっている事が真実なのかすら、判断できない。

サイモン様は微動だにせず陛下を真っ直ぐ見つめ、対する陛下は何の感情も宿さない瞳でサイモン様を映していた。

時が止まり、誰も彼も呼吸を忘れたかのように重苦しい空気だけが張り詰める。

その異様な沈黙を破ったのは陛下だった。

「サイモン・ノワイル。お前のことは聞いている。昔サラの婚約者だったそうだな」

「もう昔のことです、陛下」

「ほう？その割には随分親密なように見えたが？」

「恐れながら。王妃様とあらせられる方に邪な感情は一切持つておりません」

その言葉にサイモン様の首元から剣が引いていく。

しかしそれで陛下の気が逸れたわけではないのは、目を見れば分かった。

すつと細められた瞳は絶対的な圧力と冷気を纏っていた。

「…私の命に逆らってサラを城から出そうとしたな？」

「それについての申し開きはいたしません」

「王に逆らった臣下はどうなるか。…お前は知っているだろう？」

「ええ。しかし、私の首を取る前にどうか、サラ様を解放してください」

「解放、だと？」

再び陛下の剣が宙を舞う。今度はさっきのような細い傷じゃ済まない。

近衛兵であるサイモン様が陛下に剣を向けることはなく…それは、確実に彼の「死」を意味していた。

スローモーションがかかったかのようにゆっくりと切っ先がサイモン様に向かって振り下ろされる。

気付いた時には、体が動いていた。

「サラっ!?!」

「王妃様!?!」

カツン、と私の首を飾っていたチョーカーの宝石が床に落ちた。陛下の剣が、私を避けきれずにそこを掠めてしまった所為だ。重なる2人の声も遠くに聞こえる。

私は一瞬の死の恐怖を覚えていた。

視界いっぱいに広がった陛下の華美な服装も、風のように振られた剣も何度も繰り返し見た本のように思い出せる。

体が小刻みに震えたのはそれからだった。サイモン様を庇うように前に出た時は、そんなこと感じている余裕も無かった。

足から力が抜け、床に崩れ落ちる私の腕を支えるサイモン様。

そしてそんな私を呆然と見詰める陛下。

陛下の手から剣が落ち、重厚なそれは部屋中に劈くような音を響かせる。

「…何故だ。サラ…何故、その男を庇った」

虚ろな表情で紡がれた言葉は、弱弱しく、どこか悲しみさえ秘めていた。

何故か、なんて理由が必要なのだろうか。

サイモン様を死なせるわけにはいかないし、幾ら王でも正当な理由もなしに貴族を殺すなんて国民への不信感へと繋がりがねない。

だけど私はその言葉を口に出来なかった。未だあの恐ろしさに、唇が震えて上手く言葉にならないのだ。

窓から零れる光に反射する陛下の剣は、サイモン様の血でその切っ先を赤黒く染めていた。

王妃の部屋にはおおよそ似つかわしくない、残虐な色。それに私の血が付かなかったのは、陛下の剣の腕前なのか、奇跡なのか。今となってはどちらとも言えなくなっている。

ゆっくりと視線を上げると、固く口を結んだ陛下と目が合った。

その瞳に一瞬、様々な感情が過る。

何か言いたいのか口を開いては、また閉じ、そして遂には私と目さえ合わせなくなってしまうた。

「…分かった」

「え？」

「お前を、“解放”しよう」

サイモン様も私も、同時に息を詰める。

陛下は落ちた剣を拾うと、鞘に収め、深く息を吐いた。

閉じた瞳は何かを精一杯堪えているかのように小刻みに震えていた。

解放。

陛下の言葉をもう一度頭の中で繰り返す。

それは。それが意味するのは…

「王都の端に、昔母上が立てた離宮がある。サラ、お前の実家から

馬で数時間もあればいけるところだ」

「陛下、下…?」

「離婚は出来ない。色々準備もあるからな。手続きが済むまではそこに住むといい。少なくとも2カ月かかるだろうが、全てが終わったら…」

——その時は、必ずお前を王妃という立場から解放しよう。

噛み締めるような声で呟かれた言葉。

王都の端、離宮、離婚、王妃。断片的に理解できた言葉を頭の中で繋いでいく。

城から出られる。その答えに行きついた時、胸の奥がどうしようもなく痛んだ。

自分から望んだ筈の結末なのに。このまま王妃を辞め、片田舎でひっそりと暮らしていく。それがあの日陛下に望んだことだったのに。嬉しいという感情は全く湧いてはこない代わりに、痛みだけがその存在を主張していた。

「王妃様！アメリカから聞きました！お怪我は…」

「ご無事です！王妃様！！」

けたたましい音を立てて、乱暴に開いた扉から現れた女官長とモリス。

2人は私、サイモン様、そして陛下と順に視線を巡らせ、お互いに顔を見合わせた。

その後ろから事情を話したであろうアメリカが、私たちの奇妙な表情に眉を顰める。

「あの、陛下「モリス」

「は、はい」

「サラを城から出す」

「は？」

「一先ずは母上の離宮へ身を置くことになりそうだが。必要な書類があれば早急に用意し、今夜までに私のところへ持ってこい。いいな」

「陛下！なにをつ…！」

「出来れば明日、サラを城から出したい」

「陛下…！」

モリスの静止も聞かず、陛下は扉へと足を進める。そして、今まさに出ようとしていた時、思わぬ言葉が陛下の口から零れた。

「…すまなかつたな、サラ」

私が口を開くより早く、重厚な扉は完全に閉じていた。

微妙な沈黙を置いて女官長が慌てたように私に駆け寄る。怪我の具合はどうかと問われるも答えることは出来ず、代わりにサイモン様が2、3日で治る事を告げた。

モリスは神妙な顔で私を一瞥すると、陛下の後を追うように扉から出て行った。

繰り返し頭の中で響く声。すまなかつた。陛下はそう言った。何に対してだろう。

私を城から出さなかったこと？部屋に閉じ込めたこと？私を王妃にしたこと？

それとも…私を愛せなかったこと？

サイモン様と女官長に支えられ、椅子に腰を降ろした時もその考えで頭が一杯だった。

様々な感情が平行したり、交わったり。結局自分が何を考えているのかさえ、上手く分からなくなった。

混乱している。きつと。

明日になれば私は王妃という立場から一步退く。

手続きの都合で時間はかかると言っていたけれど、陛下は必ず私を王妃ではなくしてくださると言っていた。

夢は夢のままで終わる。3年間の魔法は、今夜目を閉じれば解けるのだ。

サラは何も持たない娘に戻り、田舎でひっそりと暮らしながらこの夢を思い出すだろう。

私のことを心配し色々と気を利かせてくれる女官長に、今日は疲れたからという理由で退出してもらった。

寝室への扉を開き、一度だけ大きく呼吸した。

豪華な調度品、柔らかなシーツに、淡い色のカーテン。改めて自分がいた場所が、どれ程凄いとこか身に染みる。

初めてこの部屋に通された時も圧巻のあまり、声も出なかった。

最後まで慣れないと思ったものだけど、こうして見るとやはり私にすっかり馴染んでいた。

3年間、数える程しか陛下と寝台を共にしなかった。殆どが私の泣く場所だった。

王宮の厳しさに何度涙を流しただろう。

そして、陛下と同じ朝を迎えた時のシーツの冷たさにも。

私が去って、新しく王妃として迎えられる方にはそのような想いはさせないだろうか。

それとも私と同じように枕をしつとりと涙で濡らすのだろうか。

これが最後。ここで泣く最後の時だ。

初めてしたときと同じように枕に顔を埋め、思いっきり泣いた。声が掠れても、涙が枯れても構わずに。

そうしてどれ程の時間が経ったのだろうか。

泣き疲れて眠る私の髪を撫でる優しい指先。

頬を伝っていた涙の跡をなぞり、額に落とされた唇。

それらが与える感触はあまりに心地よくて、覚めない夢の中を私は温かい気持ちで歩いていた。

声が聞こえた。

始めはくぐもっていて何を言っているのか聞きとれない。

しかし、足を進めるごとにその声が次第と大きく、ハッキリと聞こえてくる。

「愛してる、サラっ…愛しているんだっ…！」

幸せな夢の中で、声の主はそう言っていた。

11：悲しみの別離

終わりの朝は呆気なく訪れた。

涙の染み込んだ冷たいシャツ。泣きあかした所為で瞼は重かったが、それも今までに幾度となくあったこと。別段珍しいことではない。

いつもと変わらない時間に置き、侍女に手伝ってもらいながらドレスを着替え、朝食を取る。

機械のように正確に私は一日を始めた。

ただいつもと違うのは、給仕に当たっている侍女の顔がどこことなく沈んでいる事だろうか。

決して今までも和氣藹藹わきあいあいと朝食を取っていた訳ではないけれど。

それでもいつもより大きく、食器のぶつかる音が高い天井に不規則に響いた。

自分の触れるもの、見るものが全て今日で最後だと思つとやはり胸は痛んだ。

始めに城から出して欲しいと願つたのは私なのに、感情というものは本当に不可思議だ。

優しい思い出なんて何一つなかった筈だった。毎朝同じ温度のベッドの中で目覚めて、自分の立場に苛まれて。

目に映る全てが私を否定している気がしてならなかった3年間。ただの一度だつて陛下を想わなかった日はなかった。

愛し、愛される夫婦がこの時世どれほどいるだろう。殆どが陰謀と野心という人間の醜い部分で繋がっている。それは王族ですら変わりはない。

それでも愛したいと思つた。愛されたいと願つた。それが生涯叶わないと知つた時、せめて傍にいたいと思つた。

けれど…結局私は心が壊れてしまう前に、陛下から逃げることを選んだ。

例えば、となぜられる幸せな未来はハッピーエンドだとは限らない。
例えどんなに希^{こいねが}つても。

「王妃様、宰相様がいらつしやいました」

いつもは張りのある女官長の声も、覇気がないように聞こえる。
口に使っていた紅茶をソーサーの上に置き、部屋の中に入る許可を与えた。

深く頭を垂れながら入ってくるモリスの表情もまた暗く沈んでいた。
まるで言葉を出したくないかのように、真一文字に結んだ口元。
それだけで、彼がここを訪れた理由が分かってしまう。

「お食事中のところ大変申し訳ございません」

「気にしないで。準備ができたのでしょう？」

私の言葉に答えない代わりに、更に深く頭を下げる。消え入りそうな声で「申し訳ございません」とモリスは繰り返したけれど、彼が謝ることなんてなにもない。

これは私が望んだ未来だ。王宮を出て、田舎でひっそりと暮らしてただ静かに時が過ぎるのを待つ。

私がそれを願い、陛下が叶えてくれた。感謝こそすれど、モリスを責める理由なんてどこにもない。

「顔を上げて、モリス。私は感謝しているわ。我が儘を聞いてくれてありがとう」

「いいえ…いいえ！私は結局何も出来なかったのでございます！」

「…もう充分よ」

椅子から立ち上がり、扉へしっかりと足を進めた。

コッソ、コッソと規則正しく足音が鳴る。それは今までのどんな距離より遠く、長く感じた。

この扉を出てしまえば、後は指示の通り馬車に乗るだけだ。

女官長、それから数人の侍女に連れられ、廊下を歩いていく。

隣を歩くモリスからこれからの事を聞いたところによると、私が王宮を出ていくことは極秘裏に進められている事らしい。

今までに前例がなかったことから仕方がないことで、表向き私は体調を崩していることになっており、本当の事を知っているのはごくごく限られた重鎮の一部だそうだ。

その為、馬車もお付きの人間も質素なもの。不便をおかけしますが、と続いたモリスの言葉に首を振る。

元はと言えば私の我が儘から始まったことだ。本当はもっと時間をかけて計画を進めていく筈だったんだろう。

モリスの目の下を縁取る寝不足の後に、申し訳なく思った。きっと陛下にはそれ以上の迷惑をかけてしまったことだろう。

まだ朝も早い所為かシン、と静まり返った廊下はどこか寂しげに感じる。天井や壁を飾る名の通った芸術家たちの作品ですら、そのものの悲しさを拭いきれなかった。

空から降る小雨が霧のように窓を濁していた。小さな水の粒が一つ、また一つと細かい筋を作っていく。

比較的雨が少ないこの時期に珍しく、また同時に何か悪い予感を助長させるような不気味さも持ち合わせている。

前を歩く女官長も同じようなことを感じたのか、「嫌な天気ですね」と言葉を紡いだ。

「王妃様、しばしここでお待ち頂けますか？」
「ええ」

連れてこられたのは裏門だった。

王宮という場所柄、警備が薄いということはないけれど正面の門よりは数が少ない。

人払いでもしてあるのか質素な馬車と2人の近衛兵が、栗色の馬に乗って私を待っていた。

「サラ」

私を呼ぶ声は懐かしい響きを伴う。

2人の近衛兵のうち1人は、アルフレド兄様だった。軽々と馬から飛び降り、私の方へと走ってくる懐かしい面影。

青い隊服から伸びる腕は待ち構えていたかのように広がり、その中にすっぽりと私を包む。

温かい体温、服越しに伝わる心音。全てが私を安心させるのに十分な力を持っていた。

クラウドお兄様には王宮を出ることを相談したけれど、アル兄様にはしていなかったから随分驚かせたと思う。

陛下の許へ嫁ぐ時も最後まで私の事を心配してくれていただけに胸が痛む。

それでも何も言わずこうして抱きしめてくれる兄様の優しさが、今の私には必要だったのかもしれない。

暫く無言で抱き合っていたけれど、どちらからともなくそっと離れる。アル兄様の固い質感の髪が頬に当たって擦りたい。

肩越しには馬に乗ったサイモン様が少し困ったような顔でこちらを見ていた。

「兄様…何故、サイモン様が？」

「ああ。俺とサイモンがお前を離宮に送り届ける間の護衛だ」

「え？」

「昨日陛下が直々に命を下さった。その時お前の決意も聞いた」

「ごめんなさい。驚いたでしょう？」

「いや、言えなくて当たり前だ。驚いたことには驚いたが。サイモンは知っていたんだな」

「ええ…先日クラウドスお兄様を送った手紙で」

「そうか」

アル兄様の真剣な瞳が、不安に揺れる私の顔を映し出す。

「サラ。お前、本当にいいのか？このまま離宮に行っていていいのか？」

「……」

「何もお前を責めてる訳じゃない。元はと言えば俺と兄貴の力不足が原因だ。だがこのままで本当にいいのか？」

兄様の強い瞳を見て昔を思い出した。

兄2人は過保護すぎるくらいに私を可愛がってくれたけれど、その性質は異なっていた。

優しく、一度も私を叱ったことのないクラウドスお兄様と、時には厳しく叱咤するアル兄様。

例えば私が何か悪いことをしたら両親のお咎めから全力で守ってくれたクラウドスお兄様に対して、アル兄様は私が謝るまで許してはく

れなかった。

けれどしっかりと私の話を聞いてくれたし、何がいけなかったのかも必ず説明をくれた。アル兄様の目を見ると嘘がつけなくなる。今のアル兄様の目はまさにそれだ。兄様の前では嘘は通用しない。例えばどんなに心を偽ったとしても。

「いいの。これは私が決めたことなの」

私が出した結論はそれだった。

「そうか…お前がそう言うのなら、それでいい」

「アル兄様」

「道筋の事で少しサイモンと話をしてくる。もうすぐで出発だからここにいろ」

兄様の後姿を見送りながら、もう一度自分に問う。

本当にこれでいいのかと。けれど何度問いかけても答えは同じだった。

陛下を愛していないわけでもないし、自分自身今になってもこの選択が正しかったのかすら分らない。

それでも決めたのだ。これ以上王宮にはいられないと。私がいることで誰かを不幸にする未来などあってはならないと。

このまま王宮にいるよりは、今の決断を信じてみたかった。

雨は未だ止む気配はない。しとしとと視界に映る全てを濡らしていた。

不意に、自分が作った庭を見てみたくなった。今日が本当に最後に

なるかもしれない。

イザベル姫に頬を叩かれたのが昨日のことだなんて、にわか信じられないほど長い時間が経った気がする。

高価な薬を頂いたお陰で、頬の痛みはすっかりなくなっていたけれど、また別の傷として心を疼かせていた。

やがて私の退冠が正式に決定したら、この庭にも私の気配はなくなってしまうのだろう。まっさらな更地に変わり、次の王妃様が造り出す芸術を心待ちにすることだろう。

だったら今一度だけ。私がおここにいた証を見てみたくなった。

裏門から庭までは目と鼻の先だ。ホンの少しこの場を離れたとしても、特に問題はないと判断した。

足元がぬかるんで若干の歩き難さは感じたけれど、それでも歩みは止まらない。

小雨に打たれた花は、小さな雨の粒を花弁に散らしていた。

せめてもの思い出にとスマレの花を一本手折る。バラのような甘い香りも、人目を引く美しさもないのに私はこの花が好きだった。

さよなら。今までありがとう。唯一私を否定しないでくれた大切な場所。

―― ふと、背中に視線を感じ、後ろを振り返る。

雨の中立っていたのはスカーレット様だった。美しい髪はしつとりと雨に濡れ、更にその輝きをましているようだった。

まだ体調も万全ではないのだろう、厚手のストールを纏っている。

「スカーレット様！？一体どうしたのです！早く城にお戻り下さい」

「よかった…間に合ったのね」

「え？」

「陛下から伺いました。王妃様が城を出ていつてしまうと…それで私、いても立つてもいられなくて」

「陛下、から…」

私が今日城を出ることはごく一部の人間しか知らないともリスが言っていた。

それを陛下の口から直接聞いたスカーレット様。彼女が陛下にとつていかに重要な位置を占めているかがよく分かる。

…どうして涙が出そうになるのだろう。これこそ私が望んでいた未来。

陛下は真に愛する方を見つけ、これからを幸せに生きていくだろう。偽りの王妃ではなく。

嬉しい筈なのに、心が痛む。これ以上壊れることのないと思っていた心が悲鳴を上げる。

「こんな風にお別れとなってしまうなんて…」

「スカーレット様」

「せめてもの思い出にこれをお持ちになってください」

スカーレット様に手渡された小さな箱。

甘い香りが漂い、荒れた心を落ち着かせた。

「これは…」

「先日お茶を一緒にしましたでしょう？その時のお茶です。私何も差し上げるものがなかったの…こんなもので申し訳ないのですが」

「まあ。お気遣いありがとうございます。先日のお茶、もう一度飲みたいと思いましたの」

「このお茶には心を静める効果があります。スプーン2杯が丁度良

い美味しさになります」

「本当に…なんてお礼を申し上げていいか」

「いいえ、王妃様。どうか…どうかお元気で」

薄らと美しい瞳に浮かぶ涙。本当に、なんてお心の優しい方なんだろう。

スカーレット様ならきっと、陛下と幸せになれる。

「スカーレット様」

「え？」

「どうか、お幸せに」

遠くの方で私を呼ぶ声がする。きっともう出発の時間なのだろう。スカーレット様に頂いた箱をしっかりと握りしめ、私は馬車の方へと歩き出す。

馬車の前には女官長を始め数人が私を待っていた。

この場を離れたことを詫び、アル兄様の手を取り馬車に乗る。

誰一人として口を開く者はいなかった。口を引きしめ、ひと言たりとも言葉を漏らさないかのように。

馬車の扉が閉まるその瞬間に、モリスが前に出て頭を下げた。

「モリス、ご苦勞をかけました」

「いえ…王妃様」

「もう王妃ではないわ。だって陛下は…」

陛下は真に愛される方を見つけたんですもの。

その方こそ王妃の名に相応しい。城を去る私に、もう王妃の名を名乗る資格などない。

現に陛下はこの場にはいない。それこそが何よりの証明ではないだろうか。

しかしモリスは私の言葉を否定するかのように首を振った。

「いいえ王妃様。必ず真実を目にする時が参ります。どうかそれまでご辛抱下さい」

モリスはいつだって私を励ましてくれた。私が王妃でいられるように。

その優しさが今は悲しいだけ。

アル兄様に視線を走らせると、静かに扉が閉まる。

まだ何か言いたげなモリスの顔も見えなくなってしまった。御者の声が響き、馬車が動き出す。

これで最後。

涙が出るのはもう止められなかった。全ての思い出に、美しくて残酷で、それでも手放したくなかった陛下との思い出に。私は別れを告げる。

どうかこれからの治世が穏やかでありますように。そして心から愛される方と幸せになれますように。

私が願うのはそれだけだ。

だから知らなかった。

城の窓から苦しげにこちらを見ていた瞳のことを。

その後部屋中に響いた慟哭を。

12：嵐の予兆

王都から少し離れた緑豊かな地方。

小さな村々が点々と連なるその場所の、一際眺めがいい小高い丘に建つ王家の離宮。

外観はそれほど豪華には見えないが、中に入ればそこは完全に外界とは違っていた。洗練された調度品の数々。それは窓枠一つ取っても違っていた。

陛下の母君が立てた離宮。けれどそこは王宮のように冷たい感じはなく、ただ温かな家族のような空気さえ湛えているのだ。

離宮での暮らしは穏やかなものだった。

離宮で働いている城の者たちは和やかで、話好きだった。私の姿を見れば気さくに声をかけてくれるし、時には冗談さえ言う。

王宮では決して許されないことだが、私は今の雰囲気の方が落ち着くことができた。侍女たちは両親の代からこの城に仕えている為、それが普通だと思っているようだ。

朝の挨拶も、食事の時のちょっとした会話も王宮ではなかったものだ。エレナがいた頃はそれなりに会話をしていたが、常に周りの目を気にしていた。

先代の王妃様も同じ気持ちだったのだろうかと思うと、少しだけ親しみを感じる。

柔らかないで統一された私の部屋は、昔先代の王妃様が使っていた部屋だそう。

肖像画でしか拝見したことがないが、艶やかで美しい方。笑えば大輪の花が咲いたようだったと、使用人たちは口々に言う。

侯爵家の出であった彼女を先代の王が見初め、結婚した。国中が祝

福し、歴史を振り返っても珍しい程愛情に満ちた夫婦だったと。

この城で長年使用人を統べている老婆は、皺だらけの顔を綻ばせて話をしてくれる。

陛下も幼い頃は先代の両陛下に連れられて何度かここに来たことがあるそうだ。

「本当、あの頃は悪戯好きで。私だって何度泥まみれになったか知れませんかよ」

彼女の話聞くのはとても楽しかった。何も知らなかった陛下の幼い頃の話、誰にも咎められずに聞くことができるから。

庭に植えてある林檎の木に登ったこと、こっそり馬に乗って行ってしまう、使用人総出で探したこと。

まるで昨日のことを思い出すように、老婆の口からは次々と話が流れ出た。

ここに来てから二度同じ話は聞いたことがないくらい、陛下の幼い頃の話は尽きなかった。今の姿からは想像もつかない腕白ぶりに、緩む頬が隠せない。

そう言えばスカーレット様が最初に王宮に入られた時も同じようなことを言っていた。陛下は苦笑いしながら「忘れてくれ」と言っていたけれど。

「そんな方が、こんなに可愛いお妃さまを娶られて。本当に幸せですね」

話が一旦途切れると、そう彼女は口にする。いいえ、なんてとてもじゃないけれど言えなかった。

陛下は幸せではなかった。私は決して望まれて王妃になった訳ではないのだから。

そういうときは決まって曖昧な笑顔しか返せない。彼女はそれで満足しているようだけれど。

ここの使用人たちにも、何故私がここに来ているか本当の理由は知らないらしい。

おおよそ体調を崩してその静養に、とも言つてあるのだろう。

例え真実を知ったとしてもこの人たちの態度は変わらないと思うが、なんとなく伏せておいた方が気が楽だった。

だって…先代の両陛下の恋愛物語を聞いた後では、悲しすぎるから。

そうして一週間が経ち、一か月が過ぎていくと私の心も次第に落ち着きを取り戻していった。

朝起きてカーテンを開ければ、清々しい空気が窓から入ってくる。

和やかな雰囲気で朝食を取り、侍女に手伝ってもらいながらドレスに着替える。

王宮にいるときと一見なんら変わりのない生活を送っているようだが、時間はゆつくりと、そして穏やかに過ぎていく。

誰の目を気にするでもなく笑い、老婆の話を聞き、天気が良ければ数人の侍女と一緒に庭へ花を愛でに行く。

完璧とは呼べなくとも、ここの庭はある程度の広さがある。観賞用の華やかな花もあれば、私の好きな野花もある。

新しく種を植えていいかと聞くと、庭師は嬉しそうに笑いながら日当たりのいい一角を私にくれた。

二週間に一度はクラウスお兄様がエレナを連れてやってくる。3人でテーブルを囲み、甘い菓子とお茶で話をするのも私の楽しみだった。

エレナは使用人だからと初めは断つたのだが、メイドたちに押し切られ遂に私たちと同じテーブルに着くことになったのだ。

王宮にいた日々などまるで夢の出来事だったかのように過ぎていく

毎日。もしも王妃にならなかつたら、私にもこういう時間があつたのかもしれない。

こんな穏やかな日々がこの先ずっと続けばいいと思った。例え一時の夢だとしても、そう願わずにはいられなかつた。

「…また笑うようになったね、サラ」

クラウドお兄様の言葉に、私ははつと顔を上げた。

お兄様の顔には慈愛に満ちた微笑みが浮かんでいる。隣でお茶を注いでいたエレナも同調するように首を縦に振った。

「そんなに酷い表情でした？」

「ああ」

「そんな…きつぱり仰らなくても」

「いや。今思えばそうだと言っているんだ。あの頃は気付かなかつたが。お前は何かにも我慢をしていたんだな」

カチャン、と茶器の音が沈黙した私たちの間に漂う。

私は否定も肯定もしなかつた。そのどちらでもなかつたから。

我慢をしていなかった訳ではない。王妃として振る舞うべく沢山のことを我慢した。

けれどそれが後悔かと聞かれれば違ふのだ。後悔ではない。

王宮にいた時の私は息抜きを忘れていたのだ。いつも緊張を漲らせ、失敗すれば自分を責める。

例えばどこかでその緊張を少しだけ抜いて入れば、その術を知って

いたなら。お兄様やエレナに「酷い表情だった」と言われずに済んだ。

今でもふとした瞬間に陛下のことを想う。

何をしていらっしやるのか、睡眠はきちんととっているのだろうか。

…スカーレット様と幸せな時を過ごしているのだろうか。

胸に刺さる小さな棘と、柔らかい気持ち。時間を重ねればいつか、私はもっと優しい気持ちで2人を祝福できるだろうか。

その時が来たら、王宮での暮らしも私の生涯の一部として受け入れられるだろう。

もう二度と近くでお顔を拝見する機会がなくても、遠く離れた土地でただ密かに歳を重ねていける。

「もうそろそろ2カ月経つが…城からの使者はまだか？」

「ええ。大変なことですもの。本来なら私がここにいることすら許されないはず」

「そうか。もしその時が来たら、これからのことは何も心配しないでいい。私が全て手配する」

「ありがとう、クラウスお兄様」

次に王宮から使者が来る時。

それは陛下と私の離婚が正式に受理された時だ。

私は「その時」をただ静かに待つのみ。

「失礼します、王妃様。王宮から使いの者がいらっしやいました」

突然の侍女の声にその場にいた誰もが凍りついた。

城からの使者。それが意味することはただ一つ。

心臓が早鐘を打っているのが分かった。

お兄様も動揺が隠せないらしく、私を追う瞳は戸惑いに満ちていた。一緒に行こうとするエレナを制し、ドアの外で待っている侍女にすぐに行くと言事をする。

席を立つ時も地に足が付いていないんじゃないかと思うくらい、浮遊感を感じた。

「噂をすれば、だな。まさかこんな都合よく来るとは思わなかったが」

「そうですね。けれど…これですべてが終わります」

私の言葉に相槌を打つ2人の声は重々しい。

複雑なのは私も同じだった。

全てが終わるということ。私と陛下を繋ぐものが何もなくなくなるということ。

それは胸が抉れるほど切ない現実だ。

笑顔を浮かべながら部屋を出るのは結構な労力が必要とした。

侍女に付き添われ太陽の光が零れる回廊を進む。王宮ほど広く壮大ではない離宮はすぐに目的の部屋へと着く。

その間も心臓が痛いくらいに鳴っていた。

誰も入るなと言われているのか、侍女は扉の前までその歩みを止めた。

ドアノブ手をかけ、ゆっくりと扉を開ける。

部屋の中に満ちた光に一瞬だけ目が眩む。光の中にいたのは、サイモン様だった。

「お久しぶりです王妃様」

私の姿をその目に捉え、深く頭を下げる。2か月前より少しだけ伸びた髪は柔らかい光を放っていた。

「わざわざいらしてくれたことに感謝します」
「いえ…そのような」

向かい合って座ればサイモン様瞳の戸惑いの色が濃くなる。

その手には王室でよく使われていた封筒がしっかりと握られていた。その封を閉じているのは王の紋章。

つまり、陛下以外使うことの許されない封蝋。

ゆつくりとそれが私の許へと渡ってくる。

私の指は震えずにそれを取れたのかすら分からなかった。

『全ては万事滞りなく進んでいる』

陛下の直筆でたった一言、そう書かれていた。

まだ離婚を伝える旨ではなかったにしろ、時間の問題だと告げる手紙。それも、恐らくすぐ傍の未来。

心が翳るのは、目頭が熱くなるのは我が儘過ぎる。必死で涙を堪え、サイモン様にお礼を言おうとした時だった。

ふわりと香る、甘い匂い。

サイモン様に抱きしめられていると気付いたのは、それからだった。

「サイモン…様？あの…」

「もし。もし陛下との離婚が成立したら…その時は私の屋敷にこないか？」

「え…？」

サイモン様の言葉を頭の中で繰り返す。

「私はまだ君を愛している。婚約が勝手に解消された時どれ程父親を恨んだか…」

私を抱きしめる腕はどんどん強くなっていく。

混乱して言葉が紡げない。

何を…言っているのだろうか。一体、何を…

きつと4年前だった嬉しかった言葉は、私の心に響いてはくれなかった。

サイモン様を慕う気持ちは今も変わらない。けれどそれはクラウドお兄様やアル兄様に感じるような、家族愛に似ていた。

「止めてください…」

「サラ」

「お願いです…！」

すぐ近くにあつたサイモン様の表情が苦痛に歪む。

私の体は彼を拒むかのようにサイモン様から離れていた。

それからのことは記憶が曖昧だ。ただひたすらサイモン様から離れることを思い、部屋から飛び出す。

後ろから侍女の慌てた声が聞こえたけれど構っていらなかった。

自室に入り、中から鍵をかける。扉を叩く音、クラウスお兄様とエレナの心配そうな声。

何もかもがまるで何かを隔てたかのように遠くの方から聞こえた。

涙が後から後から頬を伝う。止めることもしないまま、私はベッドに伏せた。

サイモン様の言葉が胸に刺さる。

私はただ、静かに暮らせればそれでよかったのに。

嗚咽が指の間をすり抜け、シーツの中に沈む。

ふと、スカーレット様の言葉を思い出した。

スカーレット様から頂いたお茶には心を静める効果があると言っていた。

今はとにかくこの気持ちを落ちつけたかった。そうできるのなら全てに縋り付きたい気持だった。

急いで引き出しを開けお茶の箱を取り出す。

夜中にお茶を飲みたくなったとき侍女を起こすのが忍びなくて、寝室には常にティーセットが置いてある。

震える手つきでカップの中に茶葉を入れ、お湯を注ぐ。

ぐらりと揺れる視界。必死に息を整え、カップを持つ。

涙が一滴お茶の中に零れた。

出来るのなら、何も知らなかった頃に戻りたい。そして全て初めからやり直せたら。

陛下と結婚する前に、サイモン様を知る前に、まだ無邪気だったあの頃へ。

私はそれでも同じ道を選ぶのだろうか。

だってこんなに頭が混乱しているのに、陛下の声だけは今でもすぐ傍に聞こえる気がするのだ。

二度と会わない覚悟で王宮を出たのに、陛下の声が、温もりが欲しくて仕方がないのだ。

切ないくらいに、こんなにもまだあの方が恋しくて苦しいのだ。

13：届かぬ激情（前書き）

宰相、ヴィンセント・モリス視点。
かなり残酷な描写がございます。苦手な方はご注意ください。

13：届かぬ激情

連日の激務で凝った肩を解そうと首を回す。臣下の執務室に残っているのは私と近衛兵隊長ぐらいだ。

彼の場合、頭を使うことが少々体を動かすことよりも苦手という理由で時間がかかっているのだが。

目を通して通しても、書類の山が少なくなる気配はない。寧ろ一刻前よりも増えているのではないか。

溜め息は苦めのお茶で濁した。

扉一枚隔てた向こう側では、私よりももっと膨大な量の仕事を抱えている陛下がいる。

今までも決して少なかった訳ではないのに、最近の仕事の量は異常だ。下手すると食事すら取るうとしない。

理由は口に出さずとも明らかだが、一国の王として体調管理も大切な仕事である。それを知らぬ訳でもないのに、彼の人は激務に没頭することで何かを懸命に忘れようとしている。つまり、王妃様のことを。

いつだってそうだ。あの無表情が崩れるのは王妃様が関係した時だけ。陛下ご自身は否定するだろうが、他人の目というのは案外己の気付かなかった部分まで見ているものだ。

日増しにその表情が失われていくのを勘付いている者は意外と多い。ただその理由を知るものがないだけで。

王妃様が王宮を去られてから1カ月と少しが経つ。

一見何事も無く過ぎているようにも思われるが、水面下では様々なことが動き出している。

元々後ろ盾が弱かった王妃様を廃そうという動きがあると最近になって頻繁に耳にする。勿論、黒幕はまだ上がってこないが大方の目

星は付いていた。

こうなつてくると極秘裏に王妃様を離宮へと移したのは幸いだつたのかもしれない。その理由が何であれ。

あの離宮の場所を知る者はごく僅かだ。陛下が認めた者しかその位置は教えられない。国の重鎮ですらあの離宮の存在自体を知らない者は多い。

陛下にはまだ報告していないが、あの聡明な方だ。何かしら気付いておられるだろう。

現にこうして執務室に鍵をかけてまで籠っているのだから。

調べれば調べる程、紙面上には信じられないような事実が並ぶ。

それと同時に、人間という生き物は一旦甘い蜜を吸ってしまったら最後、更にその上を求めようとする心理が働くのだと思い知らされた。

しかしいくら嘘をその身に塗り固めても、必ずどこかに綻びがあるものだ。

王への、この国への反逆に等しい行いをするということは先ず自分の身を破滅させることを考えた方がいい。

今机の上にある一枚の書類。

たった一枚だが、全てを語るのには充分だ。この1カ月の間、入念に調べた結果。

時期を見計らって泳がしてはいたが、そろそろこちらからも動くころでしょう。

自分がいかに愚かな行いをしているか。敵に回したのが一体誰なのか。その身を以て知って貰う必要がある。

「まあ、こんな時間に何のご用でしょうか？」

闇に閉ざされた扉の向こう。

大抵の人間は眠りにについているだろうこの時間の訪問だ。侍女殿が眉を顰めるのも無理はない。

不敬を詫び、この部屋の主を呼ぶよう言う。始めは渋っていた侍女も、宰相である私がわざわざ出向いたことに何かしら感じたのか、応接間に私を通し、少し待つようにと言って別の部屋に消えた。

暫くして待ち人が来た。洗練された人間というものは足音を立てない。彼の人も例に漏れず静かに私の向かいの椅子に座った。

彼女と私の二人。

侍女たちには下がって貰った。

「宰相閣下様ですね？」

「ええ。夜分遅くの訪問、どうかお許し頂きたい」

「何かございました？」

優雅に微笑む彼女を見て、誰もが天使を連想するだろう。そのくらの美しさを持ち合わせた人だ。

しかしその中身は…仮面を被った悪魔だ。

侍女が持ってきた熱いお茶に口をつけ、その瞳が私に理由を問う。

何も知らない無垢な目を装って。

「…恐ろしい人だ」

「え？」

「美味しいお茶ですね。甘すぎず、渋すぎず」

「え、ええ…お褒めに頂き光栄ですわ」

「でも何かお忘れではないですか？」

「どういう、意味でしょうか」

「“悪魔の雫”」

その名を口にした瞬間、彼女の表情が変わったのが薄暗い室内でも分かった。

悪魔の雫——ある国にしか生えない植物だ。小さな花をつけ、見た目は可憐だが蜜は持たず、代わりに搾った花弁からは苦味のある毒が採れる。

少量ではそれ程の威力がない為、その花の恐ろしさを知る者は殆どいない。

しかし一度…例えばスプーン一杯程の量を摂取すると、人であれば一瞬で死に至る。

使用方法を考えればこれほど強力な武器はないだろう。

毒性と希少価値から、その植物は悪魔の雫、そう呼ばれるようになった。

私も知識としては知っていたものの、あの事がなければ口に出すことは生涯なかったであろう。

「私が知らないとも思いましたか？かの国は国外へその植物の存在を殆ど知らせていませんでしたしね。無理ありません」

「何を仰りたいのか：私さっぱり分かりませんわ」

「一つ、お教えいたしましょう。お忘れのようですが我が国は列国最強を謳っています。軍事力、政治力：それと、情報力も我が国を組織する一つなのですよ。スカーレット姫」

ごくり、とその細い喉元が鳴る。

今やその顔から美しい笑みは消え、代わりに禍々しくぎらつく瞳が私を見据えていた。白い手は更に色を失くし、指先は小刻みに震えている。

「我が国、それも王宮お抱えの医師ともなればその知識はあらゆるものに精通しております。その医師が見つけたんですよ」

「…悪魔の雫を？」

「ええ。先日王妃様がお倒れになった時、香りに違和感を感じたそうです。まだ確信の段階には至っていなかったので公にはしませんでした。あの時王妃様に処方された薬には解毒剤も入っていました」

「そう…香り、ね。気付かなかったわ」

「ではお認めになりますか？」

「否定したら見逃してくださいの？宰相様」

「いいえ。私がそんな弱い証拠で後宮にいらっしゃる姫君を追及すると思いますか」

「私が甘かったのですね。あの植物さえ使っておけばと高を括って

…」

スカーレット姫の言葉が不自然に途切れる。

目を見開きある一点を見つめる瞳には、驚きと恐怖も見て取れた。その視線を追うと、この緊迫した空気にはおおよそ似つかわしくない堂々とした気を纏った人物。

侍女達が震えながら傳っている。その人は国中を探しても一人しかいない。

「陛下、」

彼女の呆然とした声にも答えず、陛下は我々の方へと歩みを進めた。その足音はないに等しい。戦場で…敵と対峙する場では足音は命取りになる。

敵に悟られずその背後に回り、一気に首を取る。それが戦場における優秀な武人としてのあり方だ。

陛下は、この国で最も優れた武人だ。近衛兵隊長でさえ、陛下と剣を合わせたらどうなるか分からない。

平和に国を治め、その手に剣を持つことが鍛錬以外でなくなったとは言え。

「陛下!!」

滑るような動作に反応が遅れた。

次の瞬間彼女の悲鳴と私の声が重なり、室内に木霊していた。白い首筋にはまさに彼女の首を取ろうと、鋭い切っ先が牙を剥いている。嘗てないほどに表情を消した陛下は、カタカタと震えるスカーレット様の顎を鎬つでなぞった。

それは一思いに首を刎ねられるよりも恐ろしく、人間の中にある恐怖心を更に煽るだろう。

見ている私ですらぞっとするような冷たい空気が背中を駆けあがる。

「…目的はなんだ」

「……へ、いか」

「この国か？王妃の座か？私の心臓か？」

「わ、私は…」

「答えよ！！」

それでも彼女は答えられずにいた。カチカチと齒が鳴り、繰り返す呼吸も浅い。

やがて忌々しげにスカーレット様を睨みつけた陛下は、ゆっくりとその剣を下に降ろした。

安堵の溜め息すら吐けないほど、未だに空気は張り詰めていたが最悪の結果だけは免れたようだ。

立っている事がやっとだったのだろう。陛下が離れると姫はすぐに足元から崩れてしまった。

「モリス」

「はっ」

「今すぐ近衛兵を連れてこい。姫を国に返すまで地下牢に繋いでおけ」

「地下牢、ですか？しかし一国の姫を…」

「首を刎ねられなかっただけありがたいと思え」

誰からも美しいと褒められた瞳から、涙が零れる。

きっと初めは些細な嫉妬だったのだろう。幼い頃、陛下と遊んだ記憶は大人になっても変わらずその胸に残っていた筈だ。

いつか自分がこの国に嫁ぎ、陛下の隣に立つ瞬間を夢見て。

しかしそれは、現王妃、サラ様の所為で呆気なく崩れ去った。一国の姫としての自尊心、そして淡い想いを打ち砕かれ失望し、怒りすら覚えたのかもしれない。

後宮入りの話が入った時、スカーレット様はすでに心を決めていたのだ。

悪魔の雫を使うことを。一般にすら人に使用することは重大な罪とされている中で一国の、しかもロゼ国の王妃に飲ませることを。

王妃様が口にしたお茶に入っていたのが幸いにして少量だったのは、姫の最後の良心だったのかもしれない。

「ど…して…ただ私は、陛下を愛していただけなのに！今の王妃様よりずっと私の方が相応しい筈なのに！！」

「知らぬなら教えてやろう、スカーレット姫。」

激しく自分の感情を吐露するスカーレット様とは対照的に、陛下の返答は冷静だった。

彼女を見下ろす目は氷のように冷たい。

その冷静さが逆に恐ろしさを感じさせた。

「表向きは側妃としてロゼに迎えたが、事実とは違う」

「え…？」

「近頃カメリア国が不穏な動きをしていると報告を受けた。同盟国へ頻繁に重役が通っていると。調べたら面白いことが分かった」

「……」

「どうやら我が国に戦を仕掛けたいらしい」

「なっ…！！」

「嘗てカメリアの方がロゼよりも強大な国家だったからだろう。どうやら国王は昔の栄華を取り戻したいらしい」

「お父様が…そんなこと！だって私には一言も！」

「私の許へ来る前に父君から言われなかったか？ロゼの国王を虜にしる。お前こそ妃に相応しい、と」

「なぜ、それを…」

「私が何もせずにただ手を拱いているだけの王だと思ったら大間違いだ。先に数人従者を忍び込ませていた」

陛下が語る真実は宰相の私ですら知らなかったことだ。

国と国との関係を危くするかもしれない重大な事実だ。確かな確証が持てるまで陛下が極秘裏に従者を動かしていたに違いない。

陛下だけが使える従者があると噂でだが聞いたことがあったから。

しかしせめて私には相談して欲しかったと思うのは、決して悪いことではないような気がする。

王の執務全てを制限することは出来なくとも、手伝うくらいの事は私にも出来た筈だ。

具体的に何を、と問われれば言葉に詰まるが。

姫の顔が蒼白になっていくのにも拘わらず、陛下の声は淡々と先を紡ぐ。

「なるべくなら戦はしたくない。無関係の人間を巻き込むだけの戦など無意味だからだ。そこで私は考えた」

「私を、側妃として召す口実を…ですか」

「ああ。姫がこちらの国にいる間は戦を仕掛けてこないだろう。半年以内には全てを片づけるつもりでいた」

「私は父にとっても、陛下にとっても都合のいいように動いていた

だけでしたのね。自分が王妃になれるだなんて愚かな夢を見続けて……」

「サラに危害を加えたことは到底許せるものではないが、カメリアの件が片付き次第国へ帰すことで不問にする。これが王として私が出した結論だ」

「王と、して？」

「サラの夫としては今すぐそなたの首を刎ね、カメリア国を焼き払っても気が済まぬ」

「そんな……」

「それともう一つ。私の妻は生涯、サラだけだ。どんな手を使おうとも、私の隣にそなたが並ぶことはない」

その言葉に私が息を飲んだのは言うまでも無い。

陛下は向き合うことにしたのだ。長年目を背けてきた自分の感情と。

しかし陛下が初めて見せた激情は、遠く離れた地にいる王妃には届かない。しかも刻一刻と離婚への手続きは進みつつある。

まだ重鎮へは知らせていないが、この件が過ぎればすぐにでも公表されるだろう。

それでも真実を言葉へ変えた。

まだ知らない、表には見えない真実も沢山あるだろう。

間に合うだろうか。

いや、私が間に合わせてみせる。

「陛下。すぐに近衛兵を呼んで参ります」

「ああ。頼む」

「それから一つお願いがございます」

「なんだ」

「どうか先ほどの言葉、王妃様に直接お聞かせ下さい」

「…いや。それではあまりにも身勝手だ」

いいえ、そう口にしようとした時だった。

俯いていたスカーレット姫の肩が不自然に震える。初めは泣いているのかと思ったがそれは間違いだった。

「…ふ、ふふっ…」

妖艶な笑みを浮かべながら陛下を見つめるスカーレット姫は、最早先ほどの彼女ではなかった。

緩んでいた空気が瞬く間にピンと張り詰める。

「もう手遅れですわ」

「なに？」

「優秀な従者を持っていたのは何も陛下だけではございませんのよ。私にも腹心の従者ぐらいおります」

「なんだと？」

「一ヶ月前、それが教えてくれましたの。王妃様が王宮を去ると」

まさか、と嫌な予感が全身を駆け巡る。

それは陛下も同じだったようでスカーレット姫を見る横顔が緊張で強張っていた。

一か月前、馬車に乗る数分前に王妃様が姿を消したことがあった。

王妃様はご自分の庭を見ていただけたと言っていたが…もしもその時、スカーレット姫と会っていたら？
もしもその時…

「サラに、何をした」

重く問う陛下に、スカーレット姫は更に笑みを深くする。

「悪魔の雫を乾燥させた物を渡しました。心を落ち着かせるお茶ですと言つて」

——それからのことは私もよく覚えていない。

大声で近衛兵を呼び、スカーレット姫を拘束させた。頭は働かないのに口が勝手に動く。

立ち竦む陛下の代わりに指示を出し、直ちに数名の衛兵を離宮へと派遣する手続きを取った。

離宮からの連絡がないということはまだ最悪の結果が出てはいないということだ。出来るだけ早く悪魔の雫を見つけ出し、王妃から遠ざけなければ。

ただそれだけを思つて大声を出し続けた。

ふらり、と覚束ない足取りで陛下が扉へと向かつて行く。

「陛下!?!どちらへ…」

「決まっている」

返事はそれだけだった。

止める衛兵を次々と薙ぎ倒し、ただ一点を目指し陛下は走って行く。

国一番の駿馬と陛下が王宮から消えたのは、その数分後だった。

14：愛に帰す

繰り返し見る夢があった。

一面花が咲き誇る場所で、どことは説明が付かないけれどとても美しい所。

誰かが私を呼ぶ。優しい声で、愛おしむような口調で。

振り返るとそこにいるのはいつも同じ人。シルバーブロンドの髪に深い海を思い出す瞳。

広げた腕はとても広くて温かい。その胸の中に私を抱きしめてその人は何かを言うのだ。

でもいつもそこで夢は終わる。

その人が何を言ったかさえ私には分からない。まるで音を失くした音楽と同じ。ただ空虚な映像だけが取り残される。

だから今回も同じだと思った。だってあの人は一度だって私に笑いかけてくれたことはないもの。

その口が紡ぐのは音のない言葉なのでしょう？

だったらいつそ何も言わずに去って行って。夢の中だとしてもこんな風に抱き締めないで。

私はもうあなたの傍にはいられないのだから。

——愛してる、サラ

「王妃様！？よかった…お気づきになれましたか！？誰か！侍医を呼んでください！」

視界いっぱい広がるエレナの泣き顔。私を覗く瞳全てが心配そうに揺れていた。私がいるのは温かいベッドの中。

訳が分からず、しかしとりあえず体を起こそうと全身に力を入れると、途端に眩暈が訪れた。

それをいち早く察したエレナに慌てて押し留められる。

バタバタと部屋の中に入ってくる侍医と侍女たち。表情は一様に陰しい。

体を起こす手伝いをされながら、どうしてこんなことになったのか断片的ではあるけれど思い出してきた。

お兄様とエレナとお茶を飲んでいて、サイモン様が訪ねてらして…陛下との離婚が成立したら屋敷にこないかと誘われた。

混乱して、部屋に駆け戻って。それから…お茶、そう、スカーレット様から頂いたお茶を飲もうとしたんだ。だけど口をつける前に吐き気が込み上げてきて。

それからの記憶は全くと言っていいほどない。

一体どれくらいこうしていたんだろうか。カーテンがピッタリと閉められた部屋の中では時間を予測することもできない。

診察に來た侍医が代わる代わる私の額に手を当てたり、いくつか質問をしたりして頻りに体調を気にする。

以前体調を崩して倒れたことがあったけれど、こんなにも執拗ではなかった気がする。少量の薬を与えられたぐらいだ。

起きた時は酷く気分が悪かったが、今は至って普通だ。そう医師に伝えると安堵の笑顔が返された。

「お茶はお飲みになっていないのですね？」

「え？ええ…その前に気分が悪くなってしまつて…」

「そうですね。脈などにも異常は見られませんが、とりあえず安静にしてください。すぐに戻りますので」

そう言つて私の診察をしてくれて医師は出ていった。

どうしてあれ程までにお茶のことを気にしていたのだろう、と疑問はあつたけれど。

スカーレット様に頂いたお茶は零してしまったのだろうか。

傍に控えていたエレナにそのお茶が飲みたいと伝えたと、困った顔で私が倒れた時に茶葉ごと床に零してしまったと言われた。

せつかく頂いたものを私の不注意で台無しにしてしまったことに心が痛んだ。

エレナに急かされてもう一度ベッドの中に入る。医者はすぐ戻ると言っていたからこのままでも構わないと言つと凄じ剣幕でベッドの中に押し込まれた。

「いつまでも起きているとお体に触ります！3日もお目覚めにならなかつたのですよ？一時はどうなるかと」

「え、3日？そんなに？」

「ええ。陛下もとても心配されてましたよ。昼夜問わずずっとお傍に…」

「陛下、下？それってどういふ…」

「あつ」

エレナが急いで口を押さえるも、一旦言葉となつてしまった以上消せる筈がない。

冷静になりかけていた頭が再び混乱し始める。

どうして…陛下がここにいるのだろうか。

正式な退冠の日にちが決まったのだろうか。それにしても陛下ご自身が出向かう必要はない。

じゃあどうして？少なくともこの2カ月近くで王宮から使者があったのはサイモン様ただ一人だ。

それに何の知らせも無く陛下が王宮から出るということがあり得るのだろうか。

一つも整理が付かないまま、控え目なノックが思考を破る。

エレナが先だつて扉を開けると先ほどの医師が穏やかな笑顔で立っていた。

そしてそのすぐ後ろには、陛下がいらしたのだ。

2か月振りにお会いするその姿は相変わらず凜凜しく、だけど以前よりも痩せたように感じる。

私が王宮にいた時もそうだったけれど、政務が忙しいのだろうか。きつと寝る間もなく仕事をしていたに違いない。

エレナと何か話している医師とは逆に、陛下は真っ直ぐ私のベッドまで足を進める。

慌てて体を起こそうとするも、手を上げられやんわりと拒否された。とは言つても、ベッドの中にいたまま陛下をお迎えするのはとても無礼だし何より初めてでとても恥ずかしいのだが。

「…具合はどうだ」

「え、ええ…お陰さまで。ご心配をおかけいたしました」

「いや。それはいい。…レオナード!」

あの医師はレオナードという名前だったのか、陛下の呼びかけにすぐ「なんでしょう」と言葉を返した。

「少しサラ話をして構わぬか」

「ええ。ですが…」

「あの事なら私から話す。エレナと言ったな。そなたも外してくれるか」

「畏まりました。何かあればすぐにお呼びください。レオナード様、お茶でもご用意いたしますわ」

「ああ。ありがとうございます」

私が口を挟むまでもなく、陛下の指示通り2人は扉の向こうへと消えていった。

陛下の瞳が真っ直ぐ私を射抜いているのが嫌でも分かる。

さっきの夢が頭を過った。いつもは言葉が紡がれる間に終わる夢。

なのに今日は、陛下の声で欲しかった言葉が聞けた。

自分に都合がいい夢だって分かっている。だって私はもう王妃を名乗る資格すらなくなる身なのだから。

ただただ沈黙が続いた。話をすると聞いた陛下は一向にその口を開く気配を見せない。

相も変わらず深海のような瞳は私を見つめるだけ。

居心地が悪くなって少しだけ体を起こすと、陛下の手が優しく背中を支えてくれた。

「あ、ありがとうございます」

「辛くはないか」

「ええ。大丈夫です」

「そうか」

そうして再び訪れる沈黙。

息遣いすらひどく臆病になる。

私は握りしめたシートに、陛下はカーテンの閉じられた窓の向こうに意味も無く視線を落とす。

この沈黙を破った先にある何かが怖くて。その言葉の後に訪れる未来を知りたくなくて。

「サラ」

「はい」

「お前の退冠だが、難しくなりそうだ」

「え？一体どういう…」

一瞬、陛下の眉間に皺が寄る。

何かに耐えるかのように強く握られた服は細かい皺を幾つも作った。浅く吐きだされた息は少し、震えていた。

「お前の体に私の子がいる」

——えっ…

陛下の言葉が、噛み砕かれなまま頭の中に残る。

ゆっくりと視線を向ければ、辛そうに眉を顰めた陛下がそこにはいた。その目は私から逸らされ、冷たい床を見つめているだけ。

無意識のうちにお腹に手を当てていた。

この体に宿る新しい命。今この瞬間にも時間をかけながら育っている生命。

3年間、ずっと望んでいたはずだった。子供が出来れば、陛下も私を愛して下さるんじゃないかと思ってた。

だけど今陛下は愛する人を手に入れ、私は王妃を辞めようとしている。

そんな中、私が懐妊したと国中に知れ渡ったら一体どうなるんだろうか。退冠が難しくなるどころの話ではない。

陛下の代になって初めての御子だ。

私は、陛下は、スカーレット姫は？すべて何もかも幸せになる筈だった未来は、再び私の所為で黒く塗りつぶされてしまうの？

「サラッ！」

意識が遠のいていく私を支えたのは陛下の腕だった。

エレナと医師を呼ぶ声が、耳の奥で響く。

「王妃様！？」

「まあ！お顔が真っ青ですわ！」

すぐさま部屋に入ってきた2人は慌ただしく私の熱や脈を測りだす。

思考は全てを拒否していた。

愛する人の子供を身ごもって嬉しくないわけがない。だけど陛下にとつては疎ましい存在になってしまふんではないだろうか。

私だけならいい。けれどこの子はどうなってしまふの？

王族や貴族の間で望まれなかった子供の末路を、私は嫌というほど知っている。

もしもそうなってしまうのだとしたら…

「やつ…」

「王妃様？」

「いやっ…いや！いやよ！」

「どうされたんですか？落ち着いてください！すぐに鎮静薬を用意してください！」

「はいっ！」

医師たちに取り押さえられながら、私はただ叫び続けた。

お願い。この子を殺さないで――

気が付くと、カーテンの隙間から薄く光が入ってきていた。朝、と呼ぶにはまだ幾分薄暗い。

部屋の中はシン、と静まり返っていて人の気配はない。まだ少し頭は痛むが、力の入らない身体に鞭打ってベッドから起き上がった。冷たい床と、刺すような空気。ベッドの傍のテーブルに置かれた水差しで渴いた喉を潤す。

あれからどれくらいの時間が経ったのか分からない。ただ、花瓶に生けられた花が同じだったことから一日以上は経っていないだろうと予想する。

思考はぼんやりとして、考えることすら億劫なのに最後の記憶だけは嫌に鮮明に思い出された。

まだ平らなままのお腹をゆっくりと撫でる。この小さな存在を知ってしまった今、手放すことなど出来る筈がない。

このまま逃げてしまえたら…そんな考えを打ち消すかのように頭を振った。

カーテンの向こうはバルコニーになっている。少しでも頭を冷静にさせようと窓を開け、空気を取り込む。

朝の風は冷たいが、それが逆に気持ち良かった。

バルコニーのところまで軽めの椅子を移動させ座ると、丁度真下には庭師が私に与えてくれた庭が広がっていた。

今までこうしてバルコニーから眺めたことなど無かったけれど、とても心が落ち着いてく。朝露に濡れた花々が、私に語りかけているようにも思えた。

私は、もう一人ではないのだと。

ふと昔お気に入りだった歌を思い出した。

母が幼い頃よく歌ってくれたもので、お伽噺を元にした優しい音楽。いつの間にかこの歌が好きだったことすら忘れてしまった私は、自

分自身を偽ることに必死だったのかもしれない。
もう何年も歌っていないのに、一字一句間違えずに歌詞は言える。

優しいキスは朝露に零れて
美しい声は昼の風に乗って
温かい抱擁は夜の静寂を破って
妖精は歌います
可愛い君に

「初めてお前に会った時も、その歌を歌っていたな」

後ろから突然届いた声に、私は息を呑んだ。

当の本人は気だるげに額にかかった前髪を掻き上げ、窓枠に寄りかかっている。

いつもよりも簡易な格好の所為かそこに近寄りたさはなく、柔らかな雰囲気纏っていた。

未だ固まったままの私を余所に、バルコニーまで出てきた陛下は柵に体を預ける。

その手に持っている毛布を私の肩にかけ「冷えるぞ」と言った声は、少し掠れていた。

「あの…どうして、ここに？」

「私の部屋が隣だからだ」

「隣？そんな筈は…隣は使用人の部屋です！」

「無理矢理替わってもらった」

「そのようなこと、」

「お前の傍を離れたくなかった」

その目が、指先が、私を捕らえる。

「昨日：お前が気を失ってからだが、お前の侍女に散々詰られた」

「申し訳ございません。きちんと行って聞かせますので」

「いや。私が悪いのだ」

「え…？」

「サラ」

「へ、陛下！？」

驚きすぎて心臓が止まるかと思った。

陛下が、この国の最高人物である陛下が、私に跪いている。

それはお伽噺の王子が愛する姫にするのと同じように、しかしもっと鮮明に私の視界に広がった。

長い指が私の手を捕え、そしてその甲に陛下の唇が落とされる。

「陛下！お止めください！そのようなっ…」

「一目惚れだった」

「え？」

「いつだったか：私がまだ王子であった頃、どこかの貴族の夜会に忍んで参加したことがある。服装を変え、髪色も髪で誤魔化して一夜の恋の相手を探してた」

「陛下、あの」

「酔いを覚まそうと庭に出た時お前がいた。その家の飼い猫を腕に抱いて、先ほどの歌を歌って、ときどき猫に向かって話しかけて。初めは変わった子供だと思った」

朝陽に照らされた横顔は、遠い記憶を懐かしむかのように優しく穏やかだった。

私が陛下の隣に立つようになってから見たことのないほど。

陛下の言うその夜会が、私は思い出せなかった。

心配性の父に連れられてよく色々な貴族の夜会に行っていたからだ。勿論、陛下のような方が来ていると知っていれば、父も私を連れていこうなどとは思わなかっただろう。

けれど私が覚えている限りそのような騒ぎになったことは一度も無い。ということは、余程巧妙に自分の身分を隠していたということか。

陛下の瞳に映る自分の顔は、ひどく困惑していた。手にこもる陛下の力は強くなるばかり。

「それから城に帰って何日か経つと、ふとお前の顔が思い出されるんだ。妙に調子が外れたあの歌と、柔らかい笑顔が頭から離れなくて自分はどうかしてしまったかと思った」

「……」

「何度か貴族の夜会に参加する度、お前のことを無意識に探していると気付いた時にはもう手遅れだ。どうしようもなくお前を愛している私がいたんだ」

「そんなことっ……!!」

そんなことただの一度も言ってくれなかった。

私がどんなに焦れて、欲しくて仕方なかった言葉を。

陛下も私の言わんとすることに気付いたのか「ああ」と頷く。それはどこか自分を責めるような響きさえ持っていた。

「その頃お前にはノワイルという婚約者がいただろう？ 予期せぬ出来事で破談になったとは言え、簡単に断ち切れるほどの想いではなかったはずだ」

「あ…」

「尤もな理由をつけてお前を妻にした時も、心のどこかでそんな考えが残っていた。私は、愚かだったのだ。愛されぬなら、傷つけてしまおうと頑なになっていた。すまない、何度言っても足りない」

「陛下」

「サラ。今更だと思って私を詰つても構わない。それだけのことをしてきた自覚はある。だが、これだけは聞いて欲しい」

ずっと夢に見ていた。夢に見るのは、現実にならないからだと思っていた。

その手で触れて。そして言ってください。

あの夢の続きを。これが夢ではない証として――

「心から愛している」

溢れたのは涙だったのか、心だったのかは分からない。

だけど羽のように落とされた口付けに、これ以上ないほど胸が一杯になっていた。

陛下ばかりではない。私も愚かだったのだと気付かされた。ただの一度でも私から愛していると陛下に伝えたことはあったのだろうか。

愛されていないいつも怯えて、本当の気持ちを言葉にしなかったのは私だ。たった一言、その言葉さえ口にしていれば真実は手に届いていたのに。

今からでも遅くないのなら私も伝えたい。

「私もです。私も心からあなたを愛しています。オスヴァルト様」

言葉にすらならない感情を埋めるかのようにキスを繰り返した。それは確かに、離れていた心が一つになった瞬間。確かに、バラバラだった2人が愛に帰す瞬間でもあった。

15：エピローグ

静かに時間は過ぎていく。

だけど絡められた指先からは陛下の激情が伝わってくるようだった。

朝陽に染まって行くバルコニーには柔らかな空気だけが通り過ぎていく。

「共に帰ってくれるか？」

ぽつりと陛下が零した言葉がやけに弱弱しくておもわず笑ってしまふ。

不満げに私を見る陛下の肩に頭を寄せ、「この子も一緒にですか？」と聞いた。

肩に置かれた指先に力がこもる。

「勿論だ。ああ、すぐ早馬を走らせて後宮を改装しなくては。お前と、生まれてくる我が子の為に」

「他の姫君に怒られますわ」

「怒る姫君などいないから問題ない」

「え？」

驚いて陛下を見れば、至極当たり前のことを口にするように答えが返ってくる。

その瞳は悪戯が成功した子供のように輝いていた。

「後宮にいた姫君には全員暇を出した。スカーレット姫は国に帰り、あとの3人は降嫁することが決まっている」

「そんな！」

「不満か？まあ、モリスには小言を言われたがな」

「だって…そんな簡単に…どのお方も有力貴族の出身なのでしょう？ご家族がなんと仰るか」

「問題ないと言っているだろう。どの家にも有利な話だ。断る馬鹿はいない」

簡単に話してはいるが、それがどれ程大掛かりなことなのか私には想像が付かなかった。今頃モリスの執務机が大変なことになっているだろうということ以外は。

陛下の指先が私の髪を梳く。

好きになることが出来なかった髪。陛下の眩しい髪色に比べたらありふれた色だと自信をなくしていたっけ。

ただ陛下に髪を撫でられるたびその不安はなくなっていきそうだ。

バルコニーから広がる世界は、なんて美しいんだろう。

瑞々しい木々に、淡い色の草花。小高い丘から望む全ては柔らかな光に包まれ、精一杯の優しさで溢れていた。

「この景色がとても好きでしたわ」

「また来年もくればいい。その時は3人でな」

抱きしめられた腕の中はこれ以上ないほど穏やかだった。

この風を手に入れるまでに、どれ程苦しんだのかは分からない。私も陛下も、お互いの言葉に傷つき人知れず心を痛めてきた。しかしその過程があったからこそ、こうして静かに愛を重ねられたのだとも思う。

そう考えるとあの切なささえ、愛しく思えてくるのだ。

遠くからエレナの声が聞こえる。きっと私や陛下を探しているのだろう。

陛下にそのことを伝えようと、額に唇を寄せられ、こう囁かれた。

「今はまだ、もう少しこのままで」

15：エピローグ（後書き）

先ず。

ここまで読んで下さった方、全ての方に感謝いたします。

「愛に帰す」全15話のお話でしたがいかがでしたでしょうか？

小説というにはまだまだ稚拙な文章でしたが、こうして皆様に読んで頂けたこと心から幸せに思います。

まだ書き足りない部分があったり、数日したら「ここをこうすればよかったかな」なんて思うこともあるでしょう。

けれど今は、一つの終わりを迎えられたことにただただホッとしています。

昔からお伽噺が大好きでした。

お姫様が素敵な王子様と恋をして、途中色んな事があるけれど最後はハッピーエンド。

王道だけど大好きなお話を自分の手で完成できてとても嬉しいです。

たくさんの方に支えられて完結することができました。

お気に入り登録をして下さった方、感想を下さった方、ここまで読んで下さった方。

感謝の言葉は一言では言い表せません！

一旦このお話は終わりですが、後日談・番外編などなど書きたいことはまだまだあります。

それらのお話にもお付き合い頂ければ嬉しいです。

本当にありがとうございました*

2010/9/26 風

愛を乞う・1（前書き）

愛に帰すの陛下視点の話。

激しくネガティブ思考なのでイメージが崩れてしまう恐れがあります。ご注意くださいませ。

連日美しい月が上っている夜。

いつものように執務を終え、寝台へ疲れた体を横たえる。ベッドの温かさなど、とうに忘れた。

王の寝室には人目に付かないよう隠された扉がある。その存在を知っている者は多いから、隠されたと言うのは少し語弊があるかもしれない。

わざわざ外へ出なくとも、隣へ通じる——つまり、王妃の部屋と直接繋がっているの扉だ。

誰の介入も許さないそこを潜る瞬間だけ、忙しい毎日と王という立場から解放される。そして扉を開ければ、愛しい人が王の訪れを待っているのだ。

…だがそれは、私にとってはただの幻想に過ぎない。

サラを娶り、王妃という枷を与えて3年。私が扉を開けるのは、いつも彼女が寝入ってからだった。

いつものようにそっと王妃の寝室へと入ると、ぼんやりとした薄明りだけが私の行く末を照らしていた。

王妃らしい豪華なベッドに横たわる華奢な体。栗色の髪は柔らかなシーツの上にもまるで波のように広がっている。

足音を立てずに傍に寄るのも3年も経てば慣れたもの。閉じた瞳と唇から零れる浅い呼吸を確かめ、微かに涙の跡の残る頬を撫でた。

こんな想いをさせるつもりではなかった。

今更何を言ったところで、私の身勝手な言い訳に過ぎないが。それでも、この存在を手放すことなど出来ない。

もしもと考えたことなど数えきれないほどあった。

もしも彼女の家が没落せず、婚約者と破談にならなかったら。もしも私があの日彼女と出会わなかったら。もしも私が、彼女を愛さなかったら。

こうして夜ごと涙で枕を濡らすことも無かったのだと思う。

ハーケネス子爵家が大変な負債を抱えていると知った時、私の胸の奥に閉まっていた淡い想いが溢れだしてきたのだ。

いずれはどこかの国の王女や、国内の貴族の娘を娶るのだろうとぼんやりと想像していただけの日々、その想いはあまりに鮮烈過ぎた。私と結婚し、王妃という立場を得れば彼女の実家は今までにないくらい繁栄するだろう。今はまだ婚約者のことを想っていてもいい。列国最強の王の妻という場所は、その痛みをすぐに消してくれるだろう。

好きなだけ宝石とドレスを与えれば私を愛してくれる。きっとそうだった。

3年前の私はそんな愚かなことを考えていた。私自身、そういう女性にしか触れてこなかった所為もある。宝石と権力。その2つは彼女たちにとって何よりも代えがたい。

そしてサラもそうだろうと、信じて疑わなかった。

だが高価な装飾品を贈れば贈るほど、ドレスを新調すればするほど、サラの瞳は悲しい色を湛えるようになっていた。

初めて会った夜のような笑顔が見たいのに、「ありがとうございませす。嬉しいです」と言うサラは少しも喜んではいなかった。

そんなある日、私は偶然サラと侍女の会話を耳にしまった。

『王妃様、お手紙です』

『ありがとうエレナ。クラウドスお兄様と、アル兄様からね』

どうやら実家からだったようで、滅多に聞けないサラの弾んだ声に私はドアを開けずに聞き入っていた。

その後の言葉が、私を狂気に走らせるとも知らずに。

『お二人ともお変わりはありませんか？』

『ええ、そうみたい。…サイモン様は未だにアル兄様に申し訳ないと言っているみたいね』

『左様でございますか？ ノワイル様はお優しい方でしたから』

『本当にそうね。サイモン様には幸せになっていただきたいわ。素敵な方ですもの』

その切なそうな声に、背筋に剣を突きたてられたような痛みが走る。それと同時にどこかで納得している自分もいた。いや、納得しなくてはその感情についていけそうにもなかったから。

ああ、そうか。サラは婚約者のことを忘れずにいるのだ。だから私に笑いかけず、心を開こうともしない。

嘗ての婚約者：ノワイル侯爵家の嫡子を、愛しているから。

胸を突くような衝撃は、やがて冷えるような感情に変わって行く。握りしめた拳が白く変色していくのも構わず、私はその場に立ち尽くした。

愛されることが叶わないのならどうすればいいか。

答えは簡単だ。相手を憎めばいい。しかし、その感情を持つにはサラを愛しすぎていた。

王という立場にあり全てを持っている私は傲慢で、出した答えはあまりにも愚かだった。

——傷つけてしまえ、と誰かが言う。例え痛みであってもサラの心に残るのならそれでいいと。

初めは小さなその声も、段々と大きさを増して叫ぶ。歪んだ思考に陥った私は、そのまま身を委ねた。

王妃としてのサラの立場は思った以上に脆い。その地位を保ったまま、私はゆっくりと、しかし確実にサラの心を傷つけていった。最低限の会話しかせず、夜は後宮の他の姫のところに通う。傷が増える度、私は心のどこかで笑っていた。また一つ、彼女の心に消えない痛みが残ったのだと。元婚約者を想う気持ちは、痛みで塗りつぶされていくのだと。

愛とは物や痛みで与えるものではなく、言葉と抱擁で伝えるものだ。それに私が気付いたのは、サラと結婚してから一年も過ぎた頃だった。今更愛を乞おうとも何もかもが遅すぎた。

サラが私に向ける瞳には相変わらず悲しみと、そしていつからか諦めが加わった。

虚しく時は過ぎ、いつしか私は他の姫君の許へ通うこともしなくなった。代わりに夜毎あの扉を開け、サラの寝顔を見るようになっていた。

サラが言われも無い噂に傷ついている事も知っている。表面上は何もないように装っても、無防備になった夜にその感情は溢れだし涙になる。

本当はこの手で何の痛みにも触れず穏やかな生活だけを与えてやればよかったのに。

そうすべき手で、彼女を傷つけてきたのは他ならぬ私だ。

サラの涙で湿った指先が心に鈍い痛みを与える。

「サラ…愛している」

そっと触れるだけの口付けを落とし、そう呟いた。

夢の中を彷徨っている彼女に贈るのは、いつも同じ言葉。その言葉が伝わることはないだろう。

昼間は王の仮面を被り、妻に冷たい態度を取る。しかし夜になり、冠を脱げばその心に覆った仮面すら剥がれてしまうのだ。

もう一度サラの頬を撫で、来た時と同じようにそつとベッドから離れる。

朝日が昇ればまた、私は仮面を被らなくてはいけない。

人々が讃える賢帝は、愛の言葉一つ贈ることもできない。散々傷つけた後で今更愛など乞える筈もなかった。

「最近カメリア国で不審な動きが相次いでいます」

王だけが動かせる暗部の兵士が膝を折り、そう報告した。少し前から気になって極秘に兵を送っていたが、どうやら吉と出たようだ。カメリア国は我がロゼ国よりも繁栄した時代があった。今はもう歴史の陰に埋もれてしまっているが、過去の栄光にしがみつく様に生きていく連中もいる。

嘗ては属国としたロゼに支配権を奪われ、彼の王は気に食わないのだろう。周りの同盟国に頻りに使者を送っては、何やら物騒な会合をしているらしい。

王としての判断を迫られていた。

今のところは大した脅威ではないが後々どうなるか分からない。我

が国が領土を広げれば広げるだけ不満を持つ国は出てくるだろう。小さいものならいいが、油断していると途端に大きくなる。それはなんとしても阻止しなくてはならない。

——カメリア国には姫君が一人いる。まだ父も母も存命だった頃、幾度か顔を合わせたことがあった。

幼い頃は共に城内を駆け回った記憶すらある。

その彼女が今回のことを知っているかは分からないが、恐らくカメリア国王は私の提案を飲むだろう。上手くいけば戦を仕掛けるよりも簡単に、この国を奪えるのだから。

「エリオット」

「は」

「カメリアに潜れ。あちらの動向を暫く窺うとしよう」

「御意に」

暗部が去ったのを感じ、急いでカメリア国に使者を送る為の手紙を書く。表向きはスカーレット姫を側妃として召したいという内容で、しかし実際は人質としてだ。流石のカメリア国王も一人娘を犠牲にしてまで我が国に攻め入ろうとは思わない筈だ。

もしも彼女が今回のことに何の関係もなかったら自らの手で相応しい夫を探してやるつもりだった。

元々後宮にいる姫君は別として、結婚してから新しい側妃を迎えるのは初めてのことだ。

サラは…悲しむだろうか。それとも私のことなど当に見限っているのだろうか。

宰相に渡す予定だった令状は一瞬の心の乱れの所為で、インクが滲んでしまった。もう一度書き直さなければいけない。

いつだってそうだ。私の心を動かすのはサラだけだった。サラに会って恋を知った、己の弱さを知った。

そして、口から出ない言葉がどれほど無意味なのかも。

書き上がったばかりの令状を宰相のモリスに渡すと、おもいつきり顔を顰められた。

基本的に忠実であり、柔軟な考えを持つモリスだが時には頑固な一面を見せることもある。サラが関わるのがその時だ。

「恐れながら陛下」

「なんだ」

「王妃様にはこのことは伝えられるのでしょうか？」

「いずれ伝わるだろう。わざわざ私が言うことではない」

「しかしそれではっ……！」

視線をモリスから手元の書類に戻し、右手を軽く払えばそれ以上モリスは何も言えなくなる。

「失礼しました」と臣下らしく礼を取りモリスが出ていくまで、私は前を向かずにはいた。

真実を話してもよかったと思ったが、何の証拠もないまま下手に事を荒げる訳にもいかない。モリスには宰相としてスカーレット姫をもてなして貰う必要があるからだ。

今回のことを言ったところでサラは何も変わらない。大声で泣き喚いて、いつそ私を詰ってくれば少しは気が楽だったかもしれない。彼女はきっと、ただその身に運命を受け入れるだけ。もしも明日、私が王妃を別の誰かに譲ろうともそれは変わらないだろう。

サラは王妃という立場には固執していない。私が与えたから受け取った。実家に対しての負い目もあるのだろう。一度として私を困らせるような我が儘を言ったことはなかった。

権力や金に動かされないとこに惹かれた筈なのに、時々それがひどく苦しい。私から権力と金を取ったら、なにも残らないから。

それでも傍にいて欲しいと思うのは単なる私のエゴだ。

「…また泣かせてしまっただろうな」

泣かせてしまったとしても、私の我が儘だとしても、手放す辛さを
思えばよっぽどいい。

それだけを思い、執務机の上に溜まった書類を一つ一つ片付けてい
く。

——身勝手な私は気付くことができなかった。

そうやって言い訳を重ねている間に、サラの出した静かな決意を。

一月も経たないうちにカメリア国はスカーレット姫を後宮に召すことを承諾してきた。

彼女は明日、我が城に到着することになっている。

これほど簡単に事が運ぶと、逆に何か裏があるのではないかと勘繰ってしまうが、カメリアに潜り込んだ男からは何の連絡もないところからするとそうそう懸念することでもないだろう。

どうやら現カメリア国王は、見栄とプライドはあるが裏の裏まで読めるような知能は無いらしい。

それともこちらがまだ年若いからと侮っているのか。いずれにしてもこちらの動きを少しも怪しんでいないことは確かだ。

スカーレット姫とは幼い頃幾度か遊んだ記憶がある。

もう十数年前の話なのでハッキリとは覚えていないが、活発でよく笑う姫だった。

今回のことに巻き込んでしまうことは心苦しいが、彼女も王族ならば分かってくれるだろうと思う。

今日最後の書類に判を押し、疲れから痺れる目頭を指で揉む。

最近の忙しさで碌に睡眠もとっていなかった事を今更ながらに思い出した。

王として当たり前のことであって苦痛に思ったことは一度も無い。いや、私が王であることに何か感情すら挟んだことはなかった。

しかしそれでも、ふとした瞬間に夜は休む為のものだということを忘れていたと気付くのだ。

そういうときは無性にサラの顔が見たくなる。

大抵は涙の跡が残っているが、時々とても安らかな寝顔を見ることが

ある。ホンの少し緩んだ口元で彼女が幸せな夢の中にいる事を知り、胸中に愛しさが溢れるのだ。

それを口にするには、あまりに多くの嘘を重ね過ぎた。彼女にも、自分自身にも。

今宵もそつと王妃の寝室を開け、音を立てずにベッドまで歩む。

サイドテーブルに置かれた薄い本と、編みかけのレース。窓から零れる月明かりでぼんやりと浮かぶサラの白い肌。

渴いていない涙を拭うのも今では習慣となってしまった。

夜はサラにとって、例え一瞬でも心休まる時であるのだろうか。現実から逃れ、夢であっても笑える時であるのだろうか。

「サラ、愛している」

そうであつて欲しいと願う。

夢の中でも、幻でも。サラの涙が落ちない場所があるのなら。

それから2日の間は、何もかもが滞りなく進んだ。

スカーレット姫は無事王宮に到着し、その日のうちに歓迎の宴が開かれた。

一国の姫の輿入れだけあつて、カメラリアからは特産品である宝石が沢山贈られた。

それらは人々の称賛を集め、また姫の美しさにも話題が尽きなかった。

彼女は幼いときの記憶を楽しそうに話し、すぐに臣下の心を掴んだようだ。

それは私にとつても嬉しい事だったが、スカーレット姫を前にしてもサラの表情が少しも崩れなかったことは私の心に小さな影を落とした。

そうさせたのは私自身だと分かっているのに、それでも望んでしまう。サラの心に、私への関心が少しでもあることを。

「王妃よりお手紙を預かっております」

珍しく執務室へやってきた女官長が持つてきた思わぬものに、一瞬言葉を失った。

白い封筒に押されている蠟は王妃のみが持つことのできる特別な紋章。サラからであることは間違いなかった。

妙な浮遊感を覚えながら手紙を受け取り、封を開けた。

言うまでもないが、サラから手紙を貰ったのは初めてのことだ。当然封を切る指先にも力がこもる。

内容はこれといって特別なものではなく、話があるから少し時間をくれないかというものだった。

几帳面に並ぶ文字が、切ないほどに胸を抉る。

今日は確か面倒な会議もない筈だ。目の前の書類も、人と通り目は通してある。判を押すだけなので時間も掛からない。

控えている女官長に昼食の後でなら時間が取れると返事を返し、私は残りの仕事に取り掛かった。

昼食もそこに久しぶりに正面のドアからサラの部屋に入った。

王という立場上、常に護衛の者は傍に置いておかなくてはならないが王妃の部屋には私の許可なしに男は入れない。

扉の外で待機しているように指示し、サラの許へと足を進めた。

サラは窓の傍に立っていた。

薄い色のドレスはサラの印象をいつも以上に柔らかく見せている。先日の宴のような席では纏め上げられることの多い髪は、今は緩く背中に流されていた。

この国ではさして珍しい色でもない栗色の髪が、私はなにより気に入っていた。

波打つ髪に指先を絡めてみたい衝動に駆られ、手に込める力が強くなる。

俯きがちな瞳が真っ直ぐに私を見ていると思うだけで、喉の奥から熱いものが込み上げてくるような感覚に襲われた。

「お忙しいところ、お呼び立てして申し訳ありません」

「構わない。話があると聞いたが？」

一歩、一歩と私が近づく毎にサラとの距離が縮まっていく。微かな花の香りが、辺りを漂った。

「お願いがございます。陛下」

——予感、だろうか。

何故サラが口を開くことが、とてつもなく嫌だった。

「お前が何か望むとは珍しいな。言ってみろ」

なんとかかいつも通りの表情を保ちそう言葉を紡ぐと、途端にサラの顔に緊張が走った。

少しずつ視線が逸らされ、唇がきつく結ばれる。知らず知らずのうちに私の指先にも力が入った。

「私を…城から出して下さい」

初めは何を言われているか分からなかった。

やがてその言葉の意味が、重く耳に響いたとき心が凍るような気さえた。

「わ、私は3年、王妃として城にりましたが、ただの一度も本当の意味で私が王妃だったことなどございません」

止めてくれ、それ以上言葉を紡がないでくれ。
出なければ私は…

「幸いお世継ぎはございません。それを理由に離縁しても皆は納得して下さるでしょう」

私は…

「スカーレット姫こそ真の王妃様に相応しい方。どうか私の最初で最後のっ…」

乱暴にサラの顎を掴み上を向かせた。

驚きだけで見開かれた瞳。

その瞳に映る自分の表情の、なんと情けないことだろう。

今や人々の讃える賢王の顔はどこにもない。そこにいたのは嫉妬と焦燥に駆られた男だ。

渦巻くようなこの感情を言葉には出来そうになかった。

怒りなのか、焦りなのか、悲しみなのか、痛みなのか。それぞれの

欠片が一つにならないまま心臓を突き刺す。

いつそ一つに溶けてしまってくれたらこれ程までの想いは感じなかったかも知れなかったくらいに。

サラの目はもう逸らされてはいなかった。ただ私を見つめる瞳には少しの怯えと、期待が込められているだけ。

…期待？一体私にどんな答えを望んでいるのだろうか。

笑って頷くとしても？そうか、分かった。そなたがそうしたいのならそうすればよい、と。

人々が敬うような王の顔でそう言えというのか――

「ならぬ」

体が芯から冷えていた。

口に出した言葉は思った以上に空気に緊張を与え、サラの顔に不安の影を落とす。

私は完全に良心を失っていた。

もうサラを傷つけまいと誓ったその舌の根の乾かぬうちに、新たな傷をこの手で与えようとしていた。

しかし、もはやそんなことはどうでもよかった。

彼女を脅し家族を盾に取るという、非道なことを口走っても心は痛まなかった。

痛みなど、感じるだけ無駄だったのだ。

例えばこれが己の招いた結果だと誰が言っただとしても私は何も言い返せないだろう。

数々の傷を作っておきながらただ傍にいてくれさえしたらそれでよかったと、今更綺麗事など幾ら並べても何の弁解にもならない。

サラの事を考えればこのまま望むようにしてやるべきだ。それは頭では理解している。

しかし、いくら理解をしても本能が拒否するのだ。

自由にしてやりたいと鳥籠を開けた次の瞬間に、また何重にも錠を掛けてしまうような矛盾した心。

人間という生き物が、王という仮面を被った自身が、エゴで塗り固められていると知った瞬間でもあった。

夜半に響く靴音。

一心に仕事をこなしただ後だというのに、全くと言っていいほど疲労は感じていなかった。

夕食も思うように喉を通らず、杯に注がれたアルコールを次々に流しいれた所為で少しだけ体は熱を持っている。

酔ってはいなかった。逆にこれ以上ないくらい頭は冴えていた。

心に空いた空洞を埋めようと酒を飲んだ筈なのに、それが忘れさせてくれるのは一瞬のこと。その後には呑む前よりも強い虚無を感じる。完全な悪循環だと分かっている、給仕していた者が止めるまで私は杯を仰ぎ続けた。

その者たちを押し退けるようにして出た回廊には、夜らしい冷えた風が体から熱を奪っていった。

どこへと考えともなく、足は勝手に後宮の方へ向っていた。

誰でもいい。この虚しさから解放されるのだったら、誰を抱いても同じこと。

「まあ、陛下！いらしてくれましたね！」

その部屋の主はスカーレット姫だった。
名目上は側室であるが、私が彼女の部屋を訪れたのはこの夜が初めてだった。
何度か彼女付きの侍女から訪問を促されていたことをぼんやりとした頭の片隅で思い出した。

「私ずっとお待ちしておりましたの」
「そうか」

嬉しそうに笑う姫を見て、人々は口を揃えて美しいと言っだろう。
例えるのなら大輪の花だ。鮮やかな色を放ち、芳しい香りを放つような。

サラはどちらかと言えば控え目に咲く野花に例えられるだろう。
大半の人々の目には美しくは映らないかもしれない。しかし、あの淡い色がないとどこか心寂しく感じてしまうものだ。
一見目立たないでいるようで、なくてはならないもの。

姫の指先が私の肩をなぞるように這っていく。
鼻孔を掠める花の香り。

カメリア特有の花から採取した貴重な香水だと記憶している。
先日宴を開いた際に、彼女は確かサラにも同じものを贈っていた。

肩を撫でていた姫の手を乱暴に取ると、私の意図を汲んだのか姫は静かに目を閉じた。

——サラ

一体私はどうすればよかったのだ。

部屋に鍵を掛け、お前を閉じ込めればよかったのか？

それとも恥もプライドも立場さえも殴り捨てて愛していると叫べばよかったのか？

そうしたらこの虚しさの意味も、心臓が千切れるくらいの痛みの理由も少しは分かるようになるのだろうか。

愛を乞う・3（前書き）

陛下がサラに無体をはたらいたあの話です。

DVに近い表現をしております為、苦手な方はご注意ください。
をご遠慮ください。

サラ視点の時よりも弱冠R描写が濃いです。

愛を乞う - 3

ひどく冷たい夜だった。

姫の手はアルコールで熱を含んだ私のと違い、氷のように凍えていた。

顔を近づけ、目を閉じる。

——彼女に口づけをする為に。

「陛下：下？」

スカレット姫のそれが重なる寸前、私は咄嗟に彼女の肩を押し返していた。

訝しげに歪む瞳が私を驚いたように見ていた。

戸惑いを隠せない姫の目を見られないまま、私は背を向けドアに向かって踵を返す。

「今宵はもう遅い。後日また日を改めて訪れるとしよう」

取って付けたような言葉を並べ、そうそうに姫の部屋を辞した。

後ろで姫が侍女の声が聞こえたような気がしたが、私には立ち止まる余裕すら残ってはいなかった。

そのまま乱暴に廊下まで行き、自分を抑えるかのように大きく息を吐く。

後宮の廊下は驚くほど静まり返っていた。警備の為の近衛兵は目立たないところに立っている為、木霊するのは私一人の足音だ。

アルコールで思考回路は霞んでいるはずなのに、目を閉じれば鮮明にサラの顔が浮かんだ。

女を抱くことは簡単であつたはずだ。少なくとも一国の長として、私には子供を作る義務がある。

しかしもはや私には義務と割り切ることすら出来なくなっていたのだ。

どんなに忘れようとしてもサラの顔が、声が、絶え間なく私の脳裏を過る。

一度だつて彼女を笑わせることなど出来なかった。ただ傷つけ、泣かせ、それでしか私という人間を刻みつけることが出来なかった。昼間のサラの告白は予想以上に心の負担となつていゝらしい。あの時は怒りでやり過ごすことができたが、今私の中にあるのは深い痛みだけであつた。

——痛みとはあまりに勝手すぎるではないか。自嘲気味に笑えば、夜半の冷たい空気がひやりと頬を撫でる。

廊下の壁に背中を合わせ、後ろ手に力いっばい壁を殴つた。静寂は僅かに破られたが、やがて拳の痛みが引くと同時に再び無音の空間が訪れる。

勝手だつた。始めから、何もかも。

始まりもなければ、終わりもない。結局この3年間で私とサラが築いたものなど、何一つないのだ。

ふらふらと宛てもなく歩いているつもりだったが、気づくとそこはサラの部屋の前だつた。扉を守っている近衛兵たちが私に気づき、慌てて頭を下げる。

こんな時間に私がサラを訪ねたことがないからだろう。いや、サラを王妃にしてからというものの正式にサラの部屋を訪れたことはなかった。

夜な夜な私が部屋の扉を使ってサラの寝顔を見ていることなど誰も知らない。そこで私が何を囁いているのかも。

国王夫妻の仲がおもわしくないと噂が立つのもその所為だ。

近衛兵たちを脇に下がらせ扉を開く。淡い花の香りがするのは気のせい。

いつもの癖で足音は立てずに奥へと向かった。寝室は来客を接待する部屋の向こうにある為、例え足音を立てようと気づかれることはなかっただろうが。

薄い扉を開けるとぼんやりとした月明かりに照らされたにサラがいた。まだ眠っていないかったらしく、丁度ベッドの脇のテーブルに何かを置いたのが見えた。

彼女が実家から持ってきた古い本。サラが繰り返し読んでいるのを何度か見たことがあった。

「誰…？」

不意に私の気配を感じたらしく、不安そうにサラは言った。その声に応えるかのように一歩ずつ歩みを進める。

勝手なのは重々承知だ。昼間あれほど冷たい言葉でサラの願いを跳ね返し、それでもなお傍にいたいと願う。

私には素直に愛を伝える術がないのだ。くだらない矜持と嫉妬が私から大切な言葉を奪っていき。

本当に伝えるべき言葉を飲み込み、言葉すら口にすることを拒み、紡いできたのは痛みだけ。

「陛下？」

戸惑いながらそういうサラに、果てなく想いは募る。今なら言葉に

出来る気がした。言葉にしたかった。

——許してくれ。ベッドに腰を下ろし、不安げに私を見るサラに心の中でそう言った。

——許してくれ。お前を、失いたくないのだ。

ゆっくりと顔を近づけ唇を重ねようとしたときだった。

「いや…嫌!」

急にはっとしたよう目を見開いたサラはそう言って私の体を押し返した。

縮まりかけた距離が、サラの手でまた離れる。胸に触れるサラの手は微かに震え、それが彼女の本心を表しているかのようにも思えた。

そうか、と頭の奥で嘲笑うかのような声が響く。

そうか、それほどまでに私に触れられるのが嫌か。

全身で拒否する手を押さえつけ、強引に体をシートに沈ませる。

恐怖に強張るサラの表情に反して私の心はどこまでも冷静だった。

いや、冷静ではなかったのかもしれない。私をこんな行動に走らせたのは、心を刺す痛み到他ならない。

きりきりと胸が痛む。かつてないほどの痛みだと、遠くに薄れていく意識の中で思った。

そうして私は再び”言葉”を飲み込んだ。

「こうして欲しかったんだろう? こうして抱いて欲しかったんだろう?」

「何、を…」

「世継ぎが欲しいのなら孕めばいい。協力は惜しまん」

嫌だと言うサラの言葉を見殺し、強引に服の中に手を忍ばせた。柔らかな肌に指先に馴染む体温が私から理性を奪っていく。

サラの悲鳴も、痛がる声も何もかもが私を狂わせた。理性の籠は外れ、ただ本能に忠実な獣になる。

3年間必死でサラを守っていた誓をあつさりと破り、ひたすら貪欲にサラをいう存在を求めた。言葉にならない想いを、体で埋めようと隙間なく熱を感じ、与えた。

許してくれと請う傍らで、許さないでくれと叫ぶ。狂おしい感情に突き動かされ、もう一方で冷静に言い訳を繰り返す。

愛している？いや、もしかしたらそんな生易しい言葉では語れないのかもしれない。

もはや執着に近いと認めざるを得ないだろう。

彼女の幸せすら上手く願えない私が、許しを請うなどあまりに馬鹿げている。

「サラ……っ」

だから許さないでくれ。憎んでくれても構わない。お前の心から、私を消さないでくれ。

私がサラを解放したのは夜が明けていく頃だった。ゆっくりと白く

染まっっていく空を見ながら、気だるい体をベッドから起こした。気を失ったままのサラの顔は青白く、生気が感じられない。あれほど熱を共有したはずだったのに、触れた頬は驚くほど冷たかった。何度も口づけて残した鬱血痕が鮮やかに昨夜の情事を主張する。もう何も言つまい。

剥き出しの肩にシーツをかけてやり、ベッドから下りた。朝方の冷たい空気が容赦なく肌を刺したが、頭を冷やすには丁度よかった。無造作に着ていたシャツを羽織り、腰に剣をさす。

正確な時間は分からないが、今から自室に戻っても執務には間に合うはずだ。

もう一度サラの顔にキスを落としてから部屋を出ると、応接室には先客がいた。

「おはようございます！サラさ…」

サラが実家から連れてきた侍女は私の顔を見るなりさつと青褪め、慌てて深く頭を下げた。その手には薄紅色の封筒を持っている。

「へ、陛下でございましたか。ご無礼をいたしましたことをお許しください」

「よい。それよりその封筒はなんだ」

「サラ様のご実家からのお手紙でございます」

サラが実家に手紙を出したことは今までにもあった為珍しいことではないが、実家と手紙のやり取りをするときは必ず私に報告があった。

王宮に届けられるものは、例え親しい間柄の人物の贈りものであっても一度全て封が切られる。

それはどんなに世の中が平和になったところで変わることはないだ

ろう。万が一のことを想定しなくてはいけないからだ。

しかしその封筒には開けられた形跡が一切ない。そして、サラからの実家からだというのが更に私に不信感を抱かせた。

「その手紙は一旦預かるう」

「は？しかし…」

「王宮に届けられたものはどんなものでも一度目を通すしきたりなのだ」

「それは大変失礼いたしました。なにぶん存じ上げませんでしたもので」

その手紙の中身を侍女は知らないのか、それとも私の考えが杞憂だったのか、あつさりと封筒を渡された。

サラはまだ目覚めぬだろうから、他の仕事を優先するように彼女に伝えると何やら顔を赤くして部屋から出て行った。

王妃の部屋の応接間はそれなりに広い。何度かここには後宮の他の姫君を招いたこともあるらしいことは私も報告で聞いていた。

サラなりに一生懸命王妃としての務めを果たしてくれていたのだと今さらながらに気づかされ、どうにも切ない気持ちになる。サラは確かに貴族の出であるが、始めから王妃候補として育てられた姫君とは何もかも違う。

戸惑うことも、辛く感じることも多かっただろう。本来なら傍で支えるべき私も頼らずに、必死に3年もの間。

その応接間のソファに座り、侍女から預かった封筒を見つめた。ハークネス家の家紋の封？印。確かにサラの実家からのものだ。ゆっくりと封を開けていく。他人の手紙を読むなど、どう考えても褒められたことではないが。

私の嫌な予感はどうやらまた当たったらしい。

そこにはサラを案じる文章が連なっていた。家の為とは言え、辛い思いをさせて済まなかったとも。

——陛下との離縁が決まったら、必ず実家に寄ってくれ。サラ、今度こそ兄としてお前を守らせてくれ。

ハークネス子爵のサラへの愛情が詰まった手紙は、無意識に指先に力を込めた所為で僅かに形が歪んでしまった。

今日手紙が届いたということは、ハークネス子爵は何日も前からサラの決意を知っていたということか…？

私の脳裏にスカーレット姫が来た日のことが思い浮かんだ。あの日、ハークネス子爵も宴に招かれていた。

サラが退出したと侍女に聞いたと同時に、モリスがやってきたではないか。そう、確かサラがハークネス子爵と話をしたいと。

あの時は久しぶりの兄妹の再会だからと深く考えずに許可を出したが、そういうことだったのかと思えば全て辻褃が合う。

鉛を飲み込んだかのように喉の奥が重くなる。

どれほど前からサラは決意を秘めていたのだろうか。そうして私の許を去り、誰かと一緒になるつもりだったのだろうか。

もしも、と仮定するにはあまりに現実味を帯びている気がした。

扉一枚隔てた向こう側で、私との情事を色濃く残したサラはこの手紙を待ち侘びていることだろう。

「離縁など…してやるものか」

誰にともなく呟きそのままもう一度手紙を封筒に戻すと、酷く冷冽な感情を引きずった私は執務室には行かず近くにいた侍女に女官長を呼びに行かせた。

その間に一旦自室に戻り、王として相応しい服装に着替える。

女官長は数分と待たずに訪れると、静かに頭を下げるとすぐに用件を聞いてきた。

長年城に仕え、侍女たちを纏めてきただけある。彼女は私が余計な話を好まないのを把握しているのだ。

「今日から暫く王妃に仕えよ。サラが実家から連れてきた侍女は暇を出し、家に帰らせる」

「…何か彼女が失礼を？」

「余計なこと。詮索は無用だ」

女官長の問いを切り捨て、話はそれだけだと右手を払う。

心得たように頭を下げ去っていこうとする女官長を、もう一度呼び止め付け加えた。

「暫くはどんな理由があっても、私の許可なしに王妃を部屋から出すな」

はっと息を飲んだ女官長に背を向け、私は執務室へと向かった。薄紅色の封筒を、胸のポケットに入れたままで。

静かな夜だった。

木の葉を揺らす風も、闇夜に響く鳥の声も聞こえない。私の隣で眠る小さな肩が犯した罪を詰るかのように小刻みに震えていた。

心の中に閉まった無意味な言葉は、口から零れることなくそのまま呑み込んだ。呼吸をする度に下へ下へと降りていくそれは私の中に残る僅かな良心なのか。

あの日から幾度となくサラと夜を越えた。身体を重ね、指先ですら私を感じるように徹底的に肌に教え込ませた。

だが、心の距離は一向に縮まらなかった。寧ろベッドを共にする前よりも遠くなっている。

それが何故なのかは己が一番よく分かっている筈なのに、心のどこかでまだ認めたくないという頑なに拒んでいる己もいるのだ。

初めは傍にいてくれればそれでよかった。だがいつの間にかそれだけでは飽き足らず、愛して欲しいと願うようになってしまった。

——ただの一度もそう言葉にしたこともなくせに、だ。

夜の情事が激しければ激しい程、朝を迎えるのが恐ろしくて仕方がない。もし目が覚めたときにベッドに彼女がいなかったら。もし彼女が私を見て嫌悪感でいっぱい顔をしたら。

ひどく弱い心を隠そうと、日が上がる前に自室へと戻る毎日。

結局は私のエゴだ。感情に任せてサラを突き放しては引き寄せを繰り返す。

今更後悔などしても遅いのだろう。同時に、今更サラの温もりを忘れることも出来なかった。

疲れきってぐったりとしたサラの身体を包むようにして抱き、私は

目を閉じる。

まだ彼女はここにいるのだと確かめるかのように。

「最近仕事を増やされましたね」

書類の文字を追っていた視線を上げると、近くで書類の整理をしていたモリスが難しい顔で私を見ていた。

モリスが何を言いたいのかわかっていたが敢えてとぼけるように片眉を上げる。

「変なお噂が流れていますよ。陛下が王妃様を囲っていると」

——囲っている、か。違う。自嘲気味にそう思った。

日中はサラを部屋から出さず、夜は片時も傍から離さないのだから。本来なら新しい側室を迎えた今は、しきたりに則って連日王妃主催で側妃の歓迎の茶会が開かれている筈だ。

だが私はそれすらも許していない。今日はスカーレット姫がサラの部屋を訪れると聞いて会うことは許可したが、外に連れ出すことはならないときつく言っている。

我ながらどうかしていると思うが、サラが一步でも部屋から出てしまえば、その瞬間彼女がいなくなってしまうような気がしてならないのだ。

この城の中で私の意に反するようなことをする者はいないだろうと

思っているが、その一方でどうしてもその不安を払拭することが出来ない。

何が列国最強の王だ。このような女々しい感情を露わにして、その名が語れるわけがない。

サラを部屋に閉じ込めることで、私は己を保っているのだ。ひどく不安定ではあるが。

「只の噂だ。放っておけ」

「王妃様付きの侍女もご実家へ帰されたそうですね」

「無駄口を叩くな。執務が捗らん」

「いえ、陛下。今日こそは言わせて頂きます。一体貴方は何をなさっているのですか？」

一体何をしているかだと？私が一番聞きたいものだ。

どうして素直に愛することが出来ないのか。どうしてたった一人の大切な妻に苦しみしか与えることが出来ないのか。

私は何度も自分自身に問うた。

彼女を愛しいと思うのなら、彼女の望みを叶えてやることこそ私にできる最大の愛なのではないかと。

くだらない噂でサラを傷つけ、身勝手な感情で振り回し、そしてたった一つの願いすら私は聞き届けようとはしなかった私に、愛すると言う資格はないのではないかと。

だが何度己に問いかけても、答えはいつも同じだった。

どんなに王としての理性を働かせ、一人の人間として持つ道徳心を持ち出してもサラから離れることは出来ないのだ。

手放すのではなく、私が離れられない。例えお互いの気持ちがあく別の方向を向いていようと、私がオスヴァルト・アレキサンダー・ロゼであり続ける為には彼女が必要なのだ。

「いずれ大事なものを失ってしまいますよ」

モリスの忠告ですら私には無意味なものだった。

「失うようなものは始めから持っていない」

私たちの間には、始まりも終わりも無い。初めから私は何もかもを失っていたのだから。

本来なら築かなくてはいけない信頼を壊してしまったのは私なのだ。もしもで始まる未来など、どれほど焦れても手に入れられそうにはない。

「陛下！！」

執務室のドアが勢いよく開き、女官長が慌てて部屋に入ってきた。その顔は緊張からか青ざめており、いつもの冷静な彼女とはかけ離れていた。

これはただ事ではないと判断した私は、モリスの咎めるような言葉を片手で制し先を促した。

ぞわり、と例えようのない焦りが背中を駆け上がる。

余程急いできたのだろう、女官長の息は未だに整わず大きく肩が上下する。その間が妙にもどかしく、張り詰めた空気に汗が滲んだ。

「王妃様がお倒れに……！」

考えるよりも早く足が動いていた。護身用に持っている剣すら身につけることを忘れ、私の足は一心不乱にサラの部屋に向かって進んでいた。

後ろの方で護衛の騎士が慌ただしく私の後を追ってきているが、その足音すら聞こえないほどであった。

体中は温度を忘れたかのように冷たく強張っているのに、きつく握りしめた拳からは汗が流れている。無意識のうちに唇を噛んでいたのか僅かに血の味がしたが構っている余裕はない。

数メートル先に忙しなく人が出入りする部屋があった。そこで漸く自分がサラの部屋まで辿りついたのだと気付いた。

「サラ！」

大きな窓に近い場所に置かれたベッドの上で、青白い顔をしたサラが眠っていた。すぐ脇にはスカーレット姫が両手を握りしめ心配そうにサラを見ていた。

私が入ってきたことに気付くと何か言いたげに口を開いたが、それも一瞬のことですぐに目を逸らして俯いてしまった。普段の私ならば訝しげに思うだろうが、その時はそれすら気付けないほど平静を失っていた。

「妃の具合はどうなのだ」

怒鳴りたい気持ちを必死で抑え、顔見知りの老齢の医師を見た。

王宮に長年勤めている彼はもう大分白髪交じりになってしまった髪を後ろに撫でつけながら、私とは正反対のゆっくりとした口調で言った。

「寝不足と精神的なストレスからくる心労です。十分な睡眠を取っておけば問題ないでしょう」

ほつとその場に安堵の溜め息が満ちる。後から部屋に入ってきたモリスも女官長も一様に「よかった」と口を揃えて言った。

だが私は——そう思うことが出来なかった。

何がよかったものか。サラが倒れなければならぬほど、心に苦痛

を与え続けたのは私なのだ。

すまない、と何度言ったところで償いになるとも思えなかったが、すっかり血色を失った顔にかかる髪を掻き上げ、私は謝罪の言葉を呟くしかなかった。

気付いていた。そして気付きたくなかった。
もう、限界なのだと。

月下の庭園（前書き）

本編より4、5年ぐらい前のお話。
サラと陛下のファーストコンタクト。
陛下の独白です。

月下の庭園

香る香水、人々の内から零れる一夜の駆け引き。

女を飾るのが宝石と口紅なら、金と権力が男の装飾品だ。

囁く愛の言葉も、重ねられた指先も貴族同士のくだらない遊び。いかに偽りを並べられるかが勝負の分かれ目なのだ。

幾度となく目にしてきた光景であるのに、慣れるどころか嫌悪だけが募って行く。

これがこの国を支える貴族たちなのかと思うと我が国ながら将来を憂う。

—— オスヴァルト・アレキサンダー・ロゼ。それが私の名だ。

現ロゼ国王の嫡子にして唯一の王子。父に側室は何人かいるがいずれも生まれたのは王女だった。

私が次の国王になるのは明らかで、勿論依存はない。大きな責任が重圧に感じることもあるが、それも仕方のないことだと割り切っている。

父王の具合がおもわしくないのは最近のことだ。執務に向かうことよりもベッドの上での時間が長くなっている。

私ももう子供ではない。いつでも国を担う覚悟は出来ているし、その為に長年父と共に執務をこなしてきた。

既に何人かの姫が後宮へと興入れされており、大臣たちの間では私が王位を継ぐのも時間の問題だと囁かれている程。

私の見えるところ、見えないところで数えきれないことが変わろうとしていた。

だから今日、人払いをした父に呼び出された時もこれからのことだろうと何の疑問も抱かなかったのに。

…まったく。あの父王の考えている事がまるで分からない。久しぶりに生き生きとした表情をしていると思ったらこれだ。

お前も民のことをより深く知っておく必要があると、渡されたのは鳶色の鬘と仮面。それが何を意味するのか初めは分かりかねた。どこか楽しそうに「一夜の恋というものもいいものだぞ」などと言う口を塞いでしまいたいと思ったのは私だけか。

つまり変装をしてどこかの夜会に行き、遊んで来いと。父が言いたいことはそういうことだ。

拳句の果てには母上と知り合ったきっかけが忍んで行った夜会だったと嬉しそうに話し出す。

玉座に座っていた時とはまるで違う顔に、正直肩の力が抜けた。今まで生きてきた中で王以外の父を見たことがなかったからだ。だからだろうか。どうする？と問われ即座に肯定の言葉を出したのは。

それを今更激しく後悔したとしても、何の意味もないだろう。

夜会が催されているのは名のある侯爵家だった。確かこの姫が最近後宮に入ったはずだ。まだ一度もあつたことはないが。

口に入れたアルコールが苦く喉を通っていく。

仮面など逆に目立つものだと思っただ、周りを見渡せばどこもかしこも仮面の男女で溢れていた。

おそらくどの人物も名のある貴族なのだろう。配偶者がいるか私のようによっぽど顔を知られたくないか。まあ、多くは前者だ。

独身の貴族はわざわざ仮面をつけるような真似はしない。自分の容姿と着飾ったものを大いに見せる機会だからだ。

いかに自分が美しいか、権力を持っているか。それだけがこの夜会に必要なもの。

吐いた溜め息さえ周りの喧騒に掻き消される。

「まあ、随分美しい殿方ですね」

弧を描いた赤い唇に、胸元の開いたドレス。仮面と扇で年齢などはよく分らないが、私とそう歳は変わらないだろうと思う。

年上の貴族に嫁いだ若い娘というところか。その主人とやらは壁に体重を掛け私を睨む壮年のあの男だと思って間違いない。

その横には若い娘がいる辺り、お互い今夜の不義には目を瞑ろうと約束でも交わたのだろう。だったら睨むなとも思うが。

「お褒めに与り光栄です」

「声もお綺麗でいらっしゃるわ。今夜のお相手はもう決まって？」

言葉にはせず微笑んで見せれば扇から覗く頬がほんのりと赤く染まる。

彼女から伸ばされ、そつと腕をなぞる指先が何を意味しているか分からないほど子供でもない。

しかし、私はくだらないの一言で片づけられるような虚像に、想いを馳せようとも思わない。

「魅力的なお誘いですが、さきほどから熱心に貴女を見ている男性がいますので。私では役者不足でしょう」

「え？」

肩越しに指を指して女が振り返ったと同時に、踵を返し人ごみの中に紛れる。

嘘は言っていないから良心は痛まなかった。

人と人の間を縫うように歩いて辿りついたのは、裏庭と思しき場所だった。

硝子張りの扉を開けると夜風がアルコールで火照った頬を心地よく撫でる。

邸内とは打って変わって静寂が支配する庭には我が国の国花であるバラが所狭しと咲いていた。侯爵家の栄華を象徴するような豪華できらびやかな花の重なり。

城に咲いているのとさほど変わらない香りであるのに、息が詰まる様な甘さが辺りを漂っていた。

不愉快な酔いを醒まそうと庭内に足を踏み入れる。

誰もいないのか、時折風が枝を揺らす音以外は何も聞こえなかった。こんなに静かな夜はいつ以来だろうか。昼間は父の代わりに執務をこなし、夜は夜で大臣や後宮の姫の部屋を行き来する毎日。

王になる為にはそれが当たり前だと思っていたが、夜の静寂さえ忘れていた程忙しかったのだと今更ながらに思う。

大きく息を吐けば、胸に痞^{つか}える重みもとれるような気がした。

「きやつ……」

不意に聞こえた声にはっと思いを戻す。辺りを見渡しても声の主らしい人影はない。

耳をすませば、それは垣根の向こうから聞こえた声だったらしい。微かに人の足音と、鈴の音が鳴った。

そっと足音を立てぬように垣根を覗けば、栗色の髪を持った少女の横顔が見えた。

見たところ、夜会に参加できるような年齢でもなさそうだ。誰かの付き添いで来たにしてもあまりに不用心過ぎる。

中にはそういう趣向を持った男だっているのだから。

「もう、驚かさないで。誰かに見つかったら怒られてしまうわ」

一瞬、私に向かって言っているのかとも思ったが少女の視線からしてそうではなかった。

彼女の足元には一匹の白い猫が纏わりつき、のんびりとした鳴き声を上げていた。さっきの鈴の音は、あの猫の首元にぶら下がっているものからだったらしい。

子供らしく少し高めの柔らかい声は危機感など少しも感じていないようで、近くにあった石造りの椅子に腰を降ろすとその猫を抱きあげた。猫は大人しく彼女の腕の中に収まっている。

「あら、名前があるの？えっと、スノー……リア？」

「にゃあ」

「素敵な名前ね。お伽噺に出てくる妖精のお姫様と同じ名前。私はサラよ」

猫に向かって話しかける不可解な少女。動物に名を名乗ってどうするのかと問いたくなる。

しかしそんな私の思いは余所に、彼女は尚も猫に話を続けた。今夜

の月は丸いだとか、昨日食べたパイは甘すぎたとか。

誰が聞いても下さらない内容ではあったのに、私は何故かその場から動けなかった。

彼女のくるくる変わる表情と笑顔から目が離せなかったから。

「そうだ！最近覚えた歌があるの。聞いてくれる？スノーリア」

「じゃあん」

「ありがとう」

優しいキスは朝露に零れて

美しい声は昼の風に乗って

温かい抱擁は夜の静寂を破って

妖精は歌います

可愛い君に

朝陽より柔らかく

花の蜜より甘やかに

妖精は歌います

大好きな君に

静寂を破る様なその声は、しかし、自然なほど耳に響いた。

この国に古くからあるお伽噺の歌だ。幼い頃母がよく庭先で歌っていたのを思い出す。

時々外れる音程が妙に愛らしい。彼女は真剣に歌っているのだろうか、零れる笑みは隠せなかった。

ふと、歌声が途切れる。何事かと思えば誰かが近づいてくる足音。咄嗟に腰に挿した剣に手が伸びる。

「サラ!!」

「きゃあっ!! お兄様?」

「お兄様じゃないだろう。まったく私から離れるなど言っただろう」

「だって私が傍にいたら、お兄様誰ともお近づきになれないじゃない」

「ばっ…馬鹿! そんなことお前が心配しなくてもいい。それよりも帰るぞ」

「はあい。じゃあね、スノーリア」

会話から察するにどうやら兄妹のようだ。

少女は膝から猫を降ろし、頭を撫でてやると兄と2人で邸の中に入ってしまった。

再び訪れる静寂と闇。

なのに私の耳には未だ彼女の歌声が離れなかった。あの優しい笑顔も。

チリン、と音がしてスノーリアと呼ばれた猫が私の足に体を擦り寄せてくる。

そっと抱き上げると、甘いスミレのような香りがした。

「…スノーリア、お前オスではないか」

妖精の姫君と同じ名前を持つくせに。そんな呟きもこの猫には分からないのだろう。

先ほどまでには無かった、胸を温かくする感情。
私はまだ知らない。その名前を、その意味を。

ただ柔らかな熱を胸に、私は月下の庭園を後にした。

宰相：ヴィンセント・モリスの憂鬱（前書き）

活動報告からの転載です。

本編より少し後の話です。子供はまだおりません。

らぶらぶくほのぼのより。

モリスが相変わらず不憫で、陛下が素直になりました。

宰相：ヴィンセント・モリスの憂鬱

薄暗く、埃っぽい資料室から外へ出ると太陽の光におもわず目が眩んだ。

右手を額の上に翳し、ちらつく焦点を必死に定める。

暫く目が慣れるのを待ち、私はその一步を踏み出した。

陛下から直々に持ってくるよう命じられた書類は、左手に程良い重さを与える。

他国に関する資料ながら思っていたほど重要なものではない。急いではいないと言った陛下の言葉が頭を過り、少しだけその歩みを遅めた。

柔らかな日差しに、季節の変わり目特有の気だるい雰囲気以身を任せるのもいいだろうという気持ちになる。

資料室から執務室までの道のりは長くひっそりとしている為、護衛の騎士もそれ程いない。技巧を尽くしたアーチ状の回廊に沿うように、季節の花々が美しさを競い合っていた。

穏やかな陽の光は植物たちの成長を精一杯促すだろう。

盛りを過ぎ、少しだけ萎れ始めたバラがこうして季節が変わったことを教えてくれた。

あの日からもう幾日が過ぎただろうか。

陛下が王妃を伴って城に帰った時はそれはもう、大騒ぎであった。

何しろスカーレット様のことは極秘扱いにされ、私以外に事の顛末を知る物は数人であった。

その為、連日連夜その処理に追われているときに王妃の懷妊を知らされたのだ。

正直に言って、あの日から数日の記憶はすっかり飛んでいる。あまりに目まぐるしく変わっていく日常は、最早日常ではなかった。

残っていた姫君は後宮を辞し、他家へ嫁ぐか実家に帰っていった。勿論、陛下の一言で簡単に貴族たちが納得する訳がない。

一体彼らに何をしたのかその理由を聞くのはあまりに恐ろしかった為、深くは追求していない。ただ、幾人かが領地へ引ッ込んだという話は時折耳に入ってくるが。

あれから陛下は変わられた。いや、陛下だけではない。王妃様も変わられた。

3年の時を経てようやく繋がった想いは変わるのに充分な理由である。

陛下の瞳は王妃様への慈愛で溢れ、その想いを受け取る王妃様の瞳は優しさで溢れていた。

また何か裏があるのではないかと初めの頃は噂になったが、数週間もするとそんなことを口に出すものもいなくなつた。

今のお2人を見ればそんな気すら起きなくなるだろう。

紆余曲折を経たからこそ、結んだ想いは深く強くなっていく。国王夫妻の幸せな表情を見る度に、飛んでいる数日間の記憶など安いものだと思えるのだ。

ホンの数力月間のことに思いを馳せている間に、重厚な執務室の扉の前に着く。

この国で最も警備が厳重な場所。この私ですら中に入る為には、扉の横に控えている騎士から念入りに検査を受けなくてはいけない。普段は無表情で眉一つ動かさない騎士たちだが、私の姿を見るなり困ったようにお互い目を合わせた。

「なにかあつたのか」

「いえ…」

訝しげにそう尋ねると、なんとも齒切れの悪い返事が返ってきた。

「その、陛下は執務室にはおられません」

「…なんだと？」

「宰相様が執務室を出てすぐでございます。それから陛下からこれを」

咂然とする私に、一人の騎士が差し出して来たのは白い封筒であった。

陛下だけが持つことの許される蠟印が押してあるそれを、半ば絶望的な思いで開ける。

私だつて一国の宰相を担っている身。馬鹿ではないのだ。
この封筒の中身は恐らく…

『本日 of 執務は王の体調不良により午前中までとする。後のことはお前に任せた。くれぐれも邪魔はしないように』

ぐしゃり、と手の中の紙が歪む。陛下直筆のものをぞんざいに扱うなんて恐れ多いことではある。

しかし…しかし、だ。数刻前まであればど元気だったお方が急に体調不良など、仮病以外に考えられない。いや、最後の一文が仮病であることをひしひしと伝えてくる。

わざわざ私に遠くの資料室まで書類を取らせに行ったのはこのためだったのか。

くれぐれも邪魔はしないように。

基本的に王の命令は絶対である…が、流石に今日で3回目。2回目までは目を瞑ろうと思ってきたが今日こそは執務に戻ってもらおう。なんとしてでも。

私は持っていた資料を騎士に押しつけると、踵を返した。

そこに着くと、数人の見知った侍女たちが扉に耳をつけながら何やら話していた。

小声で何か言ったかと思うと、一人が顔を赤くし、あとの二人はくすくすと笑い合う。

が、私の足音に気付いたのかももう一人が顔を青くして慌てて腰を折った。

「さっ、宰相様！」

その声に反応した三人も各々表情を変え、頭を下げる。

「顔を上げなさい。それよりも、ここは王妃の部屋の前だ。王妃付きの侍女ともあろう者たちが揃いもそろって何をしている」

「申し訳ございません！」

「謝る様な事をしていたのか？」

「い、いえ……」

ますます身を縮こませる侍女たちに、それ以上追及するのは止めた。大体の予想はつくが、職務を放って、しかも王妃様の部屋の前で盗み聞きなど本来ならば許されることではない。

あまりきつくない程度に女官長に窘めてもらう必要がありそうだ。

「それより陛下が来なかったか？」

「は、はい。つい一刻前にいらっしゃいました」

「そうか。分かった」

そうと聞けば話は早い。

一刻も早く陛下には執務に戻っていただく。ここ数日で溜まった書類が、あれ以上増えない為にも。

そう思い、私が扉を叩く為に右手を上げると侍女たちの「あっ！」という小さな悲鳴に止められた。

「なんだ。何か不都合でもあるのか」

「あの…差し出がましいことと存じますが、その、今は扉を開けない方がよろしいかと」

「どういう意味だ？まさか…」

「いいえ！」

一瞬頭を過った有り得そうな事態を、侍女たちは全力で否定した。そして口々に、もう少しお待ち下さいと言うだけ。

しかし私にも都合というものがある。今日だけは今日だけは甘い顔をしてはいいつまで経ってもきつかけは掴めないだろう。物事にはここぞという瞬間があるのだ。

侍女たちの制止を振り切って、ドアをノックする。

中からの返事はないが、いた仕方ない。王妃の部屋を返事を待たずに開けるなど言語道断ではあるが、これも国の為。

「陛下？いらつしやるのは分かっております。申し訳ありませんが、失礼いたします！」

私も男だ。少しぐらいの罰ならば甘んじて受け…

「モ、モリス…！？」

王妃様の声で、ドアを開けた姿勢のまま固まっていたことを知った。不自然な程体が動かない。いや、動くことすら脳が拒否しているのかもしれない。

——そこには、有り得ない光景が広がっていた。

先日陛下が懷妊された王妃様の為にと理由を付けて買ったカウチソファ。

座り心地がなんとも柔らかかで、何時間座っていても体に負担を掛けない物をと陛下直々に店に赴いて買い付けたものだ。まさか一国の王がやってくるとは思っていなかっただろう店の店主は、こちらが見ていて可哀想なほどに緊張していた。

売り物の家具に何度足を引っ掛けて転んだか…その度口の端を引き攣らせながら笑いを堪えていた陛下を見て、店主に深く同情した。繊細な花が描かれているそれを、王妃様はとても喜んで愛用されていると聞き私も嬉しかった。

そのカウチソファで、まだ下腹部に膨らみのない王妃様は読書をされている。

それはいい。問題なのはその膝の上に陛下の頭があることだ。いつも帯刀している剣は無防備にもカウチソファの下に置かれ、その上には数枚の書類が散らばっている。…一応、国家重要書類のだが。

私と目があった王妃様は、初めこそ状況が掴めていなかったらしい

が、私と同じように徐々に今の恰好に気付き始め瞬く間に頬を染めていく。

両手に本を持ったまま、どうすることも出来ずに。

しかし、この異様な雰囲気の中で陛下だけは冷静であった。

ホンの少しだけ王妃様の膝から頭を上げると鋭い瞳で私を睨み、そして言った。

「邪魔をするなど言っておいた筈だ。即刻立ち去れ」

——次の瞬間には私は後ろ手に扉を閉め、侍女たちの憐みの籠った視線を一身に受けていたのだった。

「陛下……もう充分でございましょう！」

「まだだ」

「モ、モリスに見られてしまいましたわ！」

「構わん。見せつけてやれ」

「陛下……！」

暫く続いていた甘やかな会話の途切れた理由など、考えたくもない。今私にできることは、出来る限りの早さでここから立ち去り、今日中に纏めなければいけない書類に判を押すことだけだ。

侍女：エレナ・クラウンの証言（前書き）

前作「宰相の憂鬱」よりももう少し後の話になります。陛下あまり出番なし。けどなんか濃いです。

さらっと読んでくださったら嬉しいです。

侍女：エレナ・クラウンの証言

「サラ様、お茶をどうぞ」

「ありがとう、エレナ」

優美な彫刻が施された小さな丸テーブルに、バラの模様が描かれた茶器から温かそうな湯気が立ち上る。サラ様はレース編みをされていた手を止め、それに手を伸ばした。

ドレスの上からでも分かるほどに膨らみ始めた王妃様の腹部は、幸せと愛情に包まれているようにも見える。今や国全体が、国王夫妻の第一子を心待ちにしていた。

サラ様と私は幼い頃から同じ時を同じ場所で過ごしてきたと言っても過言ではない。サラ様がまだ子爵邸にいた時から、そして王妃に召されてからも私は傍にお仕えしてきた。

ほんの数ヶ月前まで、サラ様の結婚生活は決して幸せとは言えなかっただろう。身分を楯に言われのない中傷を受けたことも一度や二度ではない。唯一の頼りである国王ですら、サラ様を顧みなかったと知った時は心から怒りを覚えた。

サラ様が王妃を辞し、田舎で生活されることを望むのなら私もついて行こうと決めていた。

しかしこうして、数か月経った今は全てが良かったと肯定は出来なくとも、全てを否定することもしようとは思わない。例えどんなに回り道だったとしても陛下はサラ様を心から愛し、大切にしていることを分かっているから。

それにあの出来事がより一層二人の絆は確固たるものになっているのだ。

サラ様は変わられた。前より美しくなられ、そして強くなった。没落寸前の子爵令嬢から文字通り一夜にして王妃の名を頂いた時は、ただただ怯え自信を失っていた。

あれほど快活だったのにも拘わらず、数か月後には笑顔すら忘れてしまわれたかのようだった。

けれど今は昔よりも笑顔が輝いているように見える。愛している人の子を宿したことでサラ様に自信が付き、そして王妃として国王の支えとなる強さも生まれた。一日一日、サラ様は魅力的になっていく。

——これじゃあ、陛下がサラ様を離したがないのも無理はないと思う。先日宰相様事件（侍女たちの間ではこう呼んでいる）が頭を過り、緩んでいく頬を締め直すことは中々に困難となった。

あれから暫く宰相様は連日、陛下直々の仕事を任せられ数日姿を見せなかったと聞いている。だから部屋に入る前にお止めたのに。城に戻られてからの陛下は今までのことは夢だったのかと思うほど、サラ様を愛し抜いている。朝食と夕食を共に摂りサラ様との時間を大切にしている。

それはもう、城中の侍女が一目でもお2人を見たいと心から切望するほどに。勿論私はいつも特等席で拝見させて頂いている。王妃専属の侍女の特権だ。

「なあに、エレナ。何か嬉しいことでもあった？」

「あ…申し訳ございません！」

おもわずうつとりとした表情が顔に出てしまっていたらしい。サラ様に指摘され、いったん深呼吸をして自分を落ち着かせた。

「それよりサラ様、すっかり大きくなりましたね」

「ええ。早く生まれて来て欲しいわ。陛下も私も楽しみでしかたな

いの」

「生まれたら生まれたで、陛下が嫉妬しそうですね」

冗談で言ったその一言だったが、間違いなく一瞬にして場の空気を凍らせたことを長年の侍女の勘で悟った。

サラ様は紅茶の入ったカップを持ちながら何かを考えるかのように真剣な表情をしている。

「えっと…サラ様？」

「ねえ、エレナ。それって冗談よね？」

「はあ、まあ…何かあったんですか」

無言でサラ様は頷く。陛下…一体何を仰ったんですか。

「実はね…」

サラ様によると。

昨夜いつもの通り、サラ様と陛下は夕食の後の一時を過ごしていた。陛下はまだ執務が残っていたらしく、ご自身の部屋で今後の外交についての資料を読んでいた。

そのすぐ傍のカウチソファでサラ様はレース編みをされていたらしい。生まれてくる我が子への小さな靴下を編んでいたそうだ。

話題は自然と子供の話へ移り、王子であるうと姫であるうと愛情に満ちた毎日を送らせてあげたいと2人で笑った。

しかし問題はその後起こった。

サラ様はご実家で奥様がされていたように、子供が大きくなるまでは子供と同じ部屋で寝たいと零されたそうだ。そして、空気が固まった。丁度先ほどと同じように、冷たい沈黙が辺りを這っていたそうだ。

陛下は笑顔でサラ様の提案を却下。昼間は仕方なくとも、夜だけは

サラ様との時間を邪魔されたくないと優しく笑顔で——だが目は全然笑っていない——仰ったそうだ。

「…冗談よね？」

再び、確認するように言ったサラ様の問いに私は答えることが出来なかった。見てもいないその風景がありありと瞼の裏に浮かぶ。

有り得ないですと言えばサラ様は安心するだろうか。だが、そんな心にも思っていないことを私には口にできない。

なぜなら、陛下なら十二分にそう言う可能性があるからだ。

「愛されておりますね、サラ様」

そう言うのが精一杯な私をどうかお許しください。

「エ、エレナ!？」

「安心してください。このエレナ、お役にたてることでしたらなんでもいたしますから!」

「それはそれは。実に頼もしく優秀な侍女だな」

突然背後から聞こえた声に、サラ様も私も言葉を失った。

微かな物音すら立てずにこの国の頂点に立つお方——国王陛下がそこにいたからだ。

国中の女性たちの視線を攫うようにして集める整った容姿には穏やかな笑みが浮かび、陛下が歩みを進める度に腰に下げられた装飾用の剣が太陽の光を反射していた。

「へ、陛下！お出迎えもせず申し訳ございません！」

「よい。それより少しサラと2人きりにさせて貰えないだろうか。先ほどのことについてじっくり話し合う必要があるようだ」

「陛下！？」

「勿論でございます。では、サラ様。私はこれで失礼いたします」

笑顔で一礼し、私はドアへ向かう歩みを速めた。サラ様、これも運命でございます。この国で一番素敵な方に愛された宿命とでも申しましょうか。

きっとサラ様の提案は昨夜と同じように陛下の言葉一つで簡単に覆されてしまうだろう。

なぜですって？

それは陛下がサラ様を愛して止まないのと同じくらいに、サラ様も陛下を想っているからなのです。

君に愛の花束を（前書き）

1周年記念リクエストより

君に愛の花束を

それに気付いたのはエレナと一緒に久しぶりに庭の散歩をしている時だった。

最後にこの場所を通った時とは違う香りに、自然と歩みも止まる。私の数歩後ろを歩いていたエレナが戸惑い気味に尋ねた。

「どうかされましたか？」

「この前来たときとどこか違う気がするのだけど……」

確信ではないがそう思った。この庭は王宮の自室以外、どの場所よりもよく知っている自信がある。

まだ陛下と心を通わせることが出来なかった頃、庭は私にとって避難場所だった。痛みと苦しみの中で必死で陛下のことを想って、想い続けて。

それでも時々、どうしても泣きなくなった時は庭へ出て季節の花々で心を癒したものだ。あの時の風の匂いも、花の色も寸分の狂いも無く思い出すことが出来る。

それ程庭は私にとって特別な場所であったのだ。

だから僅かな香りの変化にも敏感になっていたのかもしれない。周りをよく見ると、この前来た時よりも幾分花の色合いが明るくなっているような気がした。

「さすがサラ様ですわ。先日庭師が代わったそうでございます。先代はもう歳でしたから」

エレナの言葉になるほど、と納得した。先代の庭師のことはよく知っている。

穏やかな老人で、職人らしく自分の作品に妥協を許さない一面を持っていた。彼とは何度も言葉を交わしたことがあるが、会う度に私に花のことについてたくさんのことを教えてくれた。

どの季節にどんな花が合うとか、水のやり方などは私個人の庭で大いに役に立ったし、今でも彼の知識はこの庭の隅々まで行き渡っている。

新しく庭師になった人物はきっと若いだろう。この前までは白や紫、青が中心だった庭の花色が薄いピンクや黄色など鮮やかなものへと変わっていた。

バラが国花ということもあり王宮の庭はバラが中心に植えられているのだが、よく見ると小さな草花も絶妙な配置で咲いているのが分かった。大輪のだけではなく、小ぶりの可愛いバラも今までにはなかったものだ。

まるで春の女神が降り立ったように明るい庭を見ると、こっちまで明るい気持ちになってくるのだから不思議なものだ。

胸一杯に花の香りを吸うと自然に頬も緩んでくる。そんな気の緩みがいけなかったのだろうか。何も考えずに近くにあったバラへ手を伸ばした時だった。

「危ない！」

急に茂みから大きな声を出され、反射的に伸ばしていた手を引いてしまった。それが逆にいけなかったのか、一瞬指先に熱を感じた。

「まあ！サラ様！」

エレナが慌てて私の手を取ると、人差し指の先から僅かに血が滲んでいた。きつとバラの棘で切ってしまったのだろう。

一瞬のことで痛みを感じる余裕すらなかったのか、居間になって鈍く指先が痺れていた。だが昔は怪我なんて日常茶飯事だったのだ。

私は別段驚くこともなく、エレナに差し出されたハンカチで血を拭いた。

だがエレナはそれだけでは済まなかった。

「大事なお体ですのに！侍医を呼んで参りますわ」

半ば叫ぶようにそう言うと、後ろを振り返りもせず去って行ってしまった。侍医なんて、大袈裟すぎる。現に血はもう止まっているのだ。

「あの…大事ありませんか？突然大声を出してしまって、本当に申し訳ございません！」

後ろを振り返ると、こげ茶色の髪をした青年が真っ青になって深く頭を下げていた。きつとさっきの声はこの人なんだろう。棘の取っていないバラに触らないように咄嗟に大声を出してしまったのだ。

「顔を上げてください。大した怪我ではありませんわ」

ほら、と指先を見せると青年の顔にもやっと安堵の表情が戻ってきた。

髪と同じ色の目と長時間太陽の下にいたと思われる焼けた肌、手には手袋をしていて頬には僅かに土が付いている。

一目で彼が新しい庭師なのだと分かった私は急に嬉しくなり、彼に微笑んだ。何故だかすぐに目を逸らされてしまったけれど。

「レイノルズに代わって新しく庭師になられた方ですよ？庭がますます素敵になって嬉しいわ」

「は、はあ…お褒めに与り光栄です。えっと…お嬢様」

年齢は私と同じくらいか少し上だろうか、老齡の大臣や落ちついた男性しか知らない私には彼の照れたような笑い方がとても好印象だった。

王宮に来たばかりなのか、それとも緊張しているのか、彼は私が王妃だということに気付いていないようだ。やっと最近お腹も膨らみ始めてきたとは言え、少しゆったりとしたドレスを着てしまえばそれも分らない。

元々美女と形容するには童顔な私は、いつも年齢よりも低く見られる。恐らく王宮に遊びに来た貴族の姫だと思われるのだろう。急に可笑しくなって笑うと、不思議そうな顔でこちらを見てくる彼と目があつた。

先代の庭師と同じようにいい話友達になれそうだ。庭の作り方からして、きっと先代と同じくらいかそれ以上の腕の持ち主に違いない。

「サラよ。このバラは新種のかしら？初めて見たわ」

「あつ、セドリック・フォードと申します。そちらのバラは陛下が王妃様へ贈る為に作られたものですので、まだ正式には発表されてないんです」

「え？」

陛下が、私に――？

小さな蕾をつけた薄紅色のバラは、他のどの花よりも優しい香りを持っていた。その香りが陛下の腕の中を思い出させる。

温かくて、私の不安を全て取り除いてしまう魔法のような腕の中。抱きしめられるだけで、泣きたくなるくらい幸せになれる唯一の場所。

「サラ、様？どこか悪いのですか？」

彼の問いにただ首を振ることしかできなかった。私の視界は涙で翳

み、嗚咽を飲みこむので精一杯だったから。

セドリツクの指先が躊躇いがちに私の方に伸ばされる。だが、頬に届く前に別の手がそれを阻んだ。

「自分の幸運に感謝することだ。サラに触れていたらそなたの首を刎ねねばならなかった」

私の肩を包み込むようにして抱いたのは、紛れもなく陛下だった。心臓の奥がぎゅっとなり、更に涙が溢れてくる。

侍医を呼んでくると去っていったエレナが息を切らしながらこちらへ向かってくるのを視界の端で捉え、侍医ではなく陛下が来たことを悟った。

「へい、か？えっと…その…どうしてこちらに……」

セドリツクは未だに状況を掴めていないようで、私と陛下を交互に見ては戸惑いを隠せずに視線が動く。やがてやっと陛下の言った言葉の意味が分かったのか、ぱくぱくと口を開けていたかと思うと勢いよく地面に平伏した。

「おつ王妃様とはつゆ知らず、大変なご無礼を……」

「いいえ、気にしない…つきやあ！」

突然足が地面から離れ、おもわず陛下のお召し物の裾を握った。私を横抱きにした陛下はセドリツクに鋭い一瞥をくると、何も言わず城へと歩き出した。

陛下に抱えられながら、私はその空気の冷たさに息を詰めずにはいられなかった。この雰囲気は過去に一度だけ味わったことがある。私が王妃を止め、城を辞したいと願った時だ。

背中をひやりとしたものが撫でたのを感じずにはいらなかった。

無言のまま部屋に着くとそのまま私はベッドに縫いつけられた。降ろす時に乱暴にされなかったのが唯一の救いだ。ベッドが軋み、陛下の整った顔がすぐ傍まで来る。そう思ったのも束の間ですぐに息もつけないほどの口付けをされた。

「へいつ…！」

「黙れ」

怒っている。それもとてつもなく。息を吸うこともままならない激しい口付けに、ぼんやりとしながらそう思った。

両手首を掴んでいた手はやがて身体の線をなぞるようにゆっくりと動く。その間もキスは止まらない。

どれくらいの時間が経ったのか。名残惜しげに離れていった唇は、私の頬に流れた僅かな涙を優しく拭った。

「身籠っていなかったら今頃どうなっていたか分かるか？また私はお前を誰の目にも触れぬように閉じ込めなければならなかったぞ」

やっと肺いっぱい空気を取り込むことが出来た私は両手を伸ばして陛下の首に抱きついた。

私からこうすることは初めてで陛下も戸惑っているのか、応えるよ

うに背中に回された腕はいつもの半分の力しかなかった。

「愛していますわ」

ぴくりと指先が動く。

「……どうしたんだ、突然」

「陛下が私の気持ちを疑っているようでしたので」

拗ねたようにそう言つと、陛下はやつと笑つてくれた。

「私を放つて庭師と仲良くなどするからだ。よく理性が持つたと褒めて貰いたいくらいだ」

「まあ。私、先代の庭師とも仲良しでしたわ」

「私は独占欲が強いからな。生まれてくる子供が王子だったら、きつとサラを取り合いになる」

そう言つ陛下の声がとても優しくかったから。私は溢れる愛しさを止めることが出来なかった。

もう一度愛してると言つて、強く抱きしめて、甘いキスをしたら。

この部屋があのだらの香りで満たされる日も、そう遠くはないのだろつと思つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9745/>

愛に帰す

2011年6月15日00時38分発行